

作品タイトル：先祖供養

作者筆名：スポンタ中村

第一章：オシッコがでない。

総合病院の受付で妻の妻が私の容体を伝えると、看護婦は私を車椅子に座らせる。午前中の総合病院の廊下は外来患者で溢れている。この泌尿器科の看板の下にも、すでに四、五人の患者が畏椅子に座って順番がくるのを待っていた。

私はなんとか診察室の前で車椅子から立ち上がり、前のめりのままカーテンをくぐった。ゆっくりと診察台に近づいていくが、その上に座ることは出来ず、かろうじて前かがみのまま診察台に手をついた。

「どうなさいました」

カルテに眼をおとしていた女医は、振り向くと質問する。やっとインターンを終えたといった私女の類には、いくつものきびが顔を出していた。この女医の場合、吹き出物というのが正確かもしれない。私女は受付から送られてきたカルテを一瞥した。

「オシッコが出ないのね。で、何時頃から」「昨夜の十一時位からです」

私はパンパンに張った下腹部のむくみを

こらえながら苦笑いの表情をかるうじつにつた。

「もう一度トイレで頑張ってみる？」

「いやあ、頑張っても多分グメでしょう。一晩中どんなにいきんでも、全然オシッコが出なかつたんですから。オシッコは出ないのに、オシッコは膀胱の中にどんどん溜まっていく。あんまり辛いで、昔し紛れにウォシュレットで肛門を刺激してみたんです」

「そう。それで」

「朝まで何度も頑張ってみたんですが、ほんのちよろつとしか……」

「じゃ、カテーテルしましょう。下を全部下ろしてそこに、横になって」

女医は脚かせがついた診察台を指さした。

私はその診察台をテレビドラマの出産シーンで見たことがあるが、自分がそれに跨ることなど想像したこともない。お腹いっぱい溜まったオシッコを揺る動かさないようにしながら、私はしすずと診察台に横になった。白衣を着ていなければパートの主婦のような看護婦は、戸棚の中からカテーテルのセットを取り出した。

私女は手馴れた手つきで封を開けると、中からビニールの管を取り出し、いくつかのキヤップを抜いてセットし、細くなっている管の先に潤滑油を塗り始めた。

もうじきあの管の先端が自分の陰茎の中に入る。私は思わず頭の上で両手を組んだ。女医は、陰茎を手粗く前後左右に動かした。オシッコが出ない状態を尿閉とゆうが、この場合はオシッコが溜まっているので、前立腺障害の可能性がある。前立腺は陰茎や陰囊の裏側にあるから、触診のため女医が私の持ち物を邪魔者扱いするのも無理はない。

「それじゃちよつと痛いですよ」

私はその声に一瞬身構えたが、痛みはチクリと針で刺された程度である。痛みは予想していた陰茎の先ではなく、根元の部分からやってきた。女医は大きく手を開いて、おなかをゆつくりと圧力をかけた。いままでのむくみが急速に引いていく。管の先端に置かれたガラス瓶には、黄金色の液体が溜まっていく。その液体が朝日の中に輝いて見える。小水は瓶の中に干っこ近く溜まったところで急速に勢いがなくなった。この量は大人が一日に

する小便の量に匹敵する。私の下腹部のむくみは消えたが、女医は最後の一滴まで搾り出すように、私の下腹部を押し去った。

「どう？ 大分楽になったでしょう」

「はい。夢のようです」

私は下腹部の痛みから開放されて、ほっと一息ついた。

「でも、若いのねえ……」

私は三十三歳。勤めているビデオ制作会社では、すでに中堅社員だったから、若いと言われて少々戸惑った。

「これから前立腺をマッサージします」

「あ、はい……」

女医はいきなり私の肛門に指を突っ込んでくる。私はあまりの痛さに身を振った。こんなとき、診察台の脚を固定する器具が能力を発揮する。私は必死に身をくねらせたが、肛門は無防備のままだった。

前立腺は睾丸の裏にあるゴルフボールほどの大きさの器官である。人間はこの器官の膨張収縮によって、オシッコが漏れないようになっている。だから、下の締まりの低下した老人は、前立腺の機能が衰えていることに

なる。若年で排尿に支障をきたした場合は、

少々厄介で前立腺肥大や前立腺癌が機能低下の原因として考えられる。女医は前立腺の状況を触診によって捉えようと、執拗に私の肛門から会陰部を探っていく。彼女の医療用のゴム手袋にはワセリンが縫ってあり、ぬるりとしている。だが、マッサージとは思えない手荒い仕打ちに私は苦痛以外の中を感じ余裕はない。しばらくすると女医は不思議そうに触診を終え、ゴム手袋をはずした。

「触診では何も異常は感じられませんが、ねえ。あなた何か、お薬は飲みましたか？」

「町医者がくれたインフルエンザの風邪薬と妻が腎臓の治療薬として持っていた利尿剤を昨日の八時頃に」

発熱したのは、四日前だった。市販の風邪薬を飲んで熱が下がらないので、二日前に自宅の近所の町医者に行った。

医者の診断は、「風邪ですな」といういたって簡単なもので、注射を打ってもらい、家に帰って処方してもらった解熱剤をの座薬を入れると、その晩には熱が下がった。しかし、翌朝になるとまた熱が上がってきた。

布団を頭から被って汗をかくと、いつの間にか熱が下がっていることがある。昨日も、頭から布団を被り、一生懸命に汗をかこうとした。すると、妻が言う。

「汗だけじゃなくて、オシッコが出ないと熱が下がらないのよ。」

汗もオシッコも体から出て行く水分である。そういえば汗が出ているから問題ないと思っていたが、この二日ばかりオシッコをしていない。妻はオシッコの重要性を強調し、自分の腎臓病に処方されている利尿剤をすすめた。

私は不覚にも夜の九時に、二錠その利尿剤を飲んだ。利尿剤は夜の十一時過ぎに効いてきて、一晩中尿意に唸らされたのである。他人に処方された薬を飲んではいけない。そんなこと常識だというのに…。

診察の結果、私はこの総合病院に入院することになった。

カテーテルを挿入した生活は、下手に動くとか管の先端が陰茎の根元に当たって痛む。だが、小便にトイレに立つ煩わしさからは開放

される。私はやれやれと肩をなでおろしたが、尿閉の原因を見つげるための検査が待っていた。

最初に行ったのが、陰茎の先から造影剤を入れてのレントゲン撮影。この検査はカテーテルの先から大きな注射器で造影剤を注入して、レントゲンを撮影するものである。膀胱に造影剤が注入されると、オシッコを漏らしそうになった時のような気持ちにならないと同時に、下腹部がパンパンにむくみ、少し痛んだ。

次に、ペタペタすくアイロンのようなコテを下腹部になすりつけて行うエコー検査を行った。

「とてもきれいな形の前立腺ですね」
検査技師によると、人の形がそれぞれ違いうように、前立腺の形も千差万別だそうだ。モニターに映し出された私の前立腺は、テキスト通りでとても美しく、どこにも異常は認められないという。

次に待っていたのは、肛門と陰囊のあたりに電極を貼り付け、陰茎の先から尿道に水を送り込む検査だった。電極を貼り付けるため

の剃毛がすむと、担当医はカテーテルの管を取り替えて膀胱まで少しずつ水を入れてゆき、人工的に尿意を作り出す。この検査によって、膀胱の圧力に対する前立腺の反応が筋電図を通して調べられる。筋電図のプリンターから、細長い紙に前立腺の反応が折れ線グラフになって出てきた。担当医はこの検査でも異常を発見できなかった。

入院三日目になっても、検査は続けられた。担当医は、「これはなかなかやらない検査なんだけど」と言って、内視鏡検査を行った。この場合の内視鏡とは、尿道にカメラを入れて実際に中の様子を見ることである。

担当医は陰茎をぐぐつと下に引っ張って膀胱までの尿道を一直線にすると、ファイバースコープを差し込む。痛みは他の検査に比べると格段に大きい。しかし、この検査でも何の異常も発見されなかった。

打つ手のなくなった担当医は、とうとう私に内科の診断を受けられることにした。

内科の医師は、聴診器をつかって一通りの診察をした後に、「百から七を引くといくつですか？」と、尋ねてきた。

私が「九十三です」と答えると、「今度はそれから七を引いて」と、続ける。

ここで計算を間違えたら精神病と診断されるに決まっているから、私も必死だ。頭の中で真剣に計算し、「八十六です」と答えた。「どこも異常はないようですね」。内科医のその言葉に私は深く安堵した。

三日間の検査によって担当医が下した病名は、心因性の尿閉である。病名は決まったが原因は依然不明だから、栄養を補給するための点滴はと解熱用の座薬以外、尿閉を治療するための薬は与えられなかった。

入院して六日たった日曜日の夕方、妻が着替えを持って面会にやってきた。

「どう、原因はわかったの？」

「全然わかんない。でも、ひさしぶりに算数をさせられたのには参ったよ。もし計算に間違えたら精神病棟行き。そのプレッシャーつたらなかったよ」

妻はにこにここと笑っている。

「純ちゃん。病気の原因がわかったよ」

そう言つと、妻はベッド脇の椅子に座り、小声で話しはじめた。

「ねえ、入院する一週間前に、純ちゃんがディスクウォークマンを買ってほしいって言ったの覚えてる？」

ディスクウォークマンとは電子書籍を読むための電気製品である。高校時代の親友は電子書籍を作る出版社に勤めていた。親友と十年ぶりに同窓会で逢うことになっていたから、この機会にことよせて、最新の電気製品を買い、親友とニューメディアの話をしたかった。だが、我が家の経済は妻に任せてある以上、私に無理強いする権利はない。

「どういうこと？」

「実は、今日、京都の白桜先生のところへ伺ってきたの。そしたら、ディスクウォークマンがね」

「ディスクウォークマン？ でも、あれは月末で余裕がないからって、買ってもらえなかったじゃない」

「そ、だけど、その頃、亡くなったお母さんが『ご注進、ご注進』と言って、白桜先生のところに行つたんですって。なんでも、お母さんは先生に、『聞いてください。私さんが妻にお金の心配をかけている』って言うんで

すつて。白桜先生は、その時、うらに連絡しようかなとも思っただけどつて」

「そんな…」

私は言葉にならぬ声を発した。

白桜先生とは、妻が霊視に行っている京都の霊能者である。

「今度の病気は霊障なのよ」

「たかだか六万円ちよつとの電気製品のために、何で俺が入院しなけりゃならないんだ」

確かにディスクウォークマンの無心はした。だが、それは口げんかにもならない程度の夫婦喧嘩。霊障という言葉はすでに宜保愛子という霊能者のテレビ番組で知っていた。だが、今回それが自分に起こっていると言われれば無闇に反論したくなる。だが、六人の大部屋の中では声を荒らげることもできない。

霊障とはスピリチュアルな世界での出来事の原因として現実世界で起きるさまざまな障害のことである。今回のような原因不明の病気は勿論のこと、精神障害を巻き起こしたり、不慮の事故による怪我や死をもたらす。

「霊障だなんて、俺はどうすればいいんだ」
「大丈夫。もう大分熱も下がったんでしょっ？」

「ああ」

「だったら、カテーテルをはずせば、オシッコも出るようになるわよ」

「そうか？」

「白桜先生もお母さんによく言い聞かせたから心配ないって」

「でも、担当医の先生にはどう言ったらいいんだよ。俺、霊障だったか？」

「僕はもう大丈夫ですから、カテーテルをはずしてみてもいいですかって聞けばいいのよ」

「そんなこと言ったって、大丈夫かどうか俺全然自信ないよ」

「大丈夫、白桜先生はお母さんに、『あなたが娘さんのことを心配なのは良く分かるけど、あなたは娘さんを守っているつもりでも、それは、娘さんを混乱させていることにしかなっていません。そして、一刻も早く、光の方向に歩くことが大切なのです』って言い聞かせているし、私も仏壇に手を合わせてお母さんに話しかけているから。それに、お母さん

も向こうに行ってまだ日が浅いから、自分が向こうで行動したことが、現世にどういう形になって現れるか分からないだけで、別に純之助さんのことを憎んでいる訳じゃないんだから、大して重い症状は出ないはずよ。オシッコくらいでよかったじゃない。今回のことは、お母さんがけっして悪気でもなかったじゃないんだから、私さんも許してあげてね」

私は「オシッコくらい……」と言われて、腹が立った。たしかにオシッコくらいではあるが、そのために七転八倒したところもあるに亡くなった義母は気難しいところもあるが、人を恨むことのできないさばさばした性格の持ち主だった。医者が原因不明と言っているのだから、霊能者のストーリーに納得するのも致し方ないことか。ただ、なぜ霊能者はこんな途方もないストーリーを持ち出したのか。今回の入院がとても滑稽な出来事になってきた。

尿閉の原因と言われた義母は八ヶ月前に亡くなり、今は仏壇の遺影で毎日顔を合わせるだけである。

翌日の回診で、私は担当医にカテーテルを外してみることを提案した。

「そうですか。そろそろいい頃かもしれないね」

検査をやりつくして、治療の方法もなくなった医師は、あっけなく私の提案に同意した。医師が病室を後にして暫くすると看護婦が現れ、カテーテルは七日ぶりに外された。

股間の異物がなくなると、なんともいえぬ開放感が私を包んだが、それは本当にオシッコができるだろうかという不安にもつながっている。それから、一時間も経つただろうか。ようやく尿意が訪れた。カテーテルをつけていた時には感じなかった懐かしい感覚である。

私は尿瓶を持ったまま小便器の前に立った。だが、三十年以上も毎日やってきたことなのに、たった七日間だけでオシッコをするための気張り方を忘れていた。そこで、仕方なく気持ち盛りが上がってくるのをじっと待った。尿瓶を抱えながら便器の前に立っていると、忘れかけていた感覚が満ち潮のよう

によりがえってきた。それから数分で、やっと二、三センチのオシッコが尿瓶の底に溜まった。

ナースセンターと廊下を隔てた向かい側にある棚には、刈谷純之助とラベリングされた溜尿瓶が置いてある。私は少しずつオシッコをためていった。一度、出始めたオシッコが元気を取り戻すのは早い。その瓶に干ぐほど溜まることになると、ようやく自信がついてきた。入院して八日目の朝、私は退院を許可された。

「またオシッコが出ないかもしれない」という恐怖心から開放されていた頃だから、退院して一週間ほど経過した頃だろうか。妻は、私に内緒で担当医が私の病気について語ったことを白状した。

「検査をいろいろとやってみましたが、尿道や前立腺にとりたてて異常は発見されませんでした。ご主人の症例は、老人性痴呆症によくあるケースです。老人性痴呆症では老化現象によって脳が萎縮し、それによって排尿のコントロールができなくなります。しかし、

ご主人の場合はまだお若いので、脳が萎縮しているとは考えられません。ご主人の病気は医学の見地を超えていると言ってよいでしょう。しいて言うなら、心因性の尿閉というのでしょうか。精神の病気といえるのかも少しありませんね」

その話を聞いて私は慄然とした。あやうく痴呆症患者にされるところだったのだ。

現代医学が万能でないことは、いまだに不治の病がたくさんあることなどから誰もが認めるところである。だから、原因不明の病気で入院したとしても、けっして珍しい話とはいえない。ただ、それがスピリチュアルな世界を原因として起きた症状だとすれば、きわめて珍しいケースとなるだろう。だが、誰にもその因果関係を証明することはできない。

この入院は、私にスピリチュアルな世界の存在を深く意識させるきっかけになっただけである。

第二章：義母の入院

入院から約一年前の一九九二年、七月十一日木曜日。私たち夫婦と同居していた義母まきが再入院した。私はその年の一月、まきがりハビリで入院している間に、友美と暮らすようになった。結婚を決意した後、友美は私を紹介するため、義母が入院していたリハビリ病院を訪ねた。

「近所にはもう挨拶に行ったのかい？」

私と初めて会った母は、近所の評判を心配した。

「お前、こんなババ臭い色、わたしや着れないよ」

リハビリ病院に入院中とはいえ義母は意気軒昂で、病院の中で着るためにと、妻が買ったきたスウェットの上下に不満をもらし、妻がおそろいにと揃えた派手な紫色のスウェットと取り返させた。義母には、最初から目の前の男が自分の娘の結婚相手として適当かどうか鑑別するという発想はなかったようだ。何かにつけて娘の結婚相手に難色を示してきた母がすんなりと私を認めたこと

は妻にとっても意外だった。ただ、義母が妻の結婚の条件とした刈谷の名前を継いでほしいことがあることに違いはない。

私はそれまで自分の苗字について真剣に考えたことはなかった。だから、妻に、「苗字を変えて欲しい」と言われたときに、はじめて考え始めた。私は考えれば考えるほど、そんなことを真剣に考えることが馬鹿げていると思えてきた。

「苗字にこだわるのはブランドにこだわるのと一緒。別に苗字が変わったからって、僕が変わるわけじゃないから、大して重要じゃないさ」

「でも、あなた長男でしょ」

「長男っていったって、うちは分家だし賃貸の団地に住んでいるくらいだから財産もない。うちの親父は若い頃赤旗を振ったくらいだから、そんなこと絶対に気にしないと思うよ」

「そつかしら」

「もし、親父がそんなことを気にするんだったら、俺の方が軽蔑するよ。でもなあ、仲間うちになんと格好悪いっていうくらいか

な」

私が長野の両親に電話を入れると、案の定父も母も私が苗字を帰ることにあっさり同意した。

「でも、仕事だけはやっつこしいから三沢をビジネスネームとして使うことにするよ」

妻と義母は、もう一緒に暮らしているんだし、私の意見が変わらないうちに戸籍を入れてしまおうと話し合い、まだ、結婚式もあげていない頃に婚姻届を区役所に提出した。

三月十九日、私は三沢姓から刈谷姓になり、三月三十一日、義母はりハビリ病院を退院し、私たちと暮らし始めた。義母と同居を始めても、私には娘の嫁ぎ先に実家の母が同居を始めたような感覚があった。だから、入り婿という気兼ねを感じることもない。しかし、世間的にみれば、私は母と娘の二人暮らしの家に転がりこんだお調子者にしか見えぬだろう。

リハビリ病院から退院したものの、義母は毎週一回、病院に診察に行った。そして、退院してから四ヶ月経って、義母が再入院した日も、朝から病院に行っって検査を受けに行っ

ていた。その日、義母は午後二時頃、病院から異常なしと診断を受けて帰ってきた。しかし、病院までの道のりと検査は七十三歳の体には重労働だったとみえて、「疲れて気分が悪い」と言っただけで自分の部屋で横になった。その二ヶ月ほど前の五月二十五日にも、彼女は「心臓が苦しいから病院に行く」と言い出したことがあった。

妻と私は、その晩に入っていたスケジュールを取りやめ、義母を車で病院まで運んだ。精密検査のデータは義母の異常を発見できなかった。

「お母さんは、とても神経質な方だから、時々こうなるけど、心臓は大丈夫ですよ」

義母は精神的に落ち込んでしまうと、本当に心臓が苦しくなる厄介な病気である。その症状は苦しいと痛みだけでなく、時に発作を起こす原因ともなる。だから、わがまま病だと決め付けると後で取り返しのつかないことになる。

検査結果に目を通した担当の医師は、私と妻に病状を語った。彼は義母を担当して二年になり、精神衛生科医であくと同時に心臓外

科医でもあった。そんな私は、二年間で義母の症状や性格を熟知していた。

「本当に心臓が苦しいのなら、胸を冷やせば収まります」

妻はその時の担当医の言葉を思い出し、冷やしたタオルを義母の胸に当てた。

「今度もまた、精神的におかしくなっているから、苦しいだけなんだ」

だが、冷やしたタオルは効かなかった。午後六時になると、義母がいよいよ苦しみだしたので、妻は病院に電話を入れた。すると、病院の医師は、「今日の検査では何ともなかったのだから、暫く様子を見るように」という返事だった。

しかし、七時を過ぎても義母は苦しみ、痛い痛い」と連呼する。

その晩は再度来客があったが、その人に事情を説明して帰ってもらい、義母を病院に連れていった。病院に行く車の中でも、病院についても義母は「痛い痛い」と連呼して、取り乱れていた。余りに動くので、点滴の管を入れることもできないし、心電図の電極も振り払われてつけることができない。

「この人は普段から精神的に不安定な人なんでしょうか」

「はい、すぐ興奮すぐ落ちます」妻は即答した。

「そうですね。ああ、べらべらしゃべられたら正確な検査なんかできないよ。静かにしろって言ってもきかないんだから。かといって、鎮静剤も怖くて打てないし」

救急治療室から出てきた当直の医師は、心臓外科から回ってきたカルテを見ながら、その妻に確認すると、また部屋に戻っていった。暫くすると、救急治療室が静かになった。

そして、十五分ほどが経った頃、当直の医師が出てきた。

「最初はカルテの通り、精神的な病気だと思っただけで、あんまり騒ぐので少量の睡眠薬を売って静かにさせて検査したら、どうも本物の心筋梗塞みたいだ。それも、あんまりよくない状態」

義母に手こずらされた医師は苦笑したが、妻は一転深刻な表情になった。

「お母さんを殺すのに刃物はいらさないよ。極端に怒らせたり、悲しませたり、喜ばせたり

すれば、それだけでコロっと行くから。何よりも、淡々とした生活が良薬だね」

二年前、心臓発作で担ぎ込まれた病院の心臓の専門医に言われた言葉を妻は思い出した。

静かになった義母には、何本もの管が体につけられていた。病院に義母が運ばれ、応急処置と一通りの検査が終わるのに二時間が経過していた。

一息ついた医師は、廊下の長椅子のところに椅子を持ち出し、義母の病状を私と妻、そして、姉の青木栄子に説明した。

「お母さんの病名は心筋梗塞で、現在危篤状態です。お母さんは心筋梗塞の発作を起こされ、一時的に心臓の血管が詰まり、心臓の一部に血液が回らなくなりました。今は心臓の血管を広げる薬を投与しましたから、心臓全体に血が回るようになりました。とはいえ、発作の時に血が回らなかった部分のダメージと不意脈、そして四十一度の高熱があり、依然として予断を許さない状態です。また、お母さんは持病として糖尿病を持っているので、血管も弱くなっていますし、肺に水が

溜まっているのも心配です。峠は、この二三日といえるでしょう。しかし、危険な状態はひとまず過ぎ、安定した状態になりました。ご家族の方はどなたか一人残ってくださいれば、かえって下さって結構です」

妻は、入院に必要な義母の身の回りのものを家に取りに行かなければならない。その夜は、私が集中治療室の廊下に出ている硬い長椅子に残ることになった。

三日経つと義母は集中治療室から一般病室に移ることができた。しかし、酸素吸入用のマスクをしつかり付けていたので、目でお互いを確認することはできても、会話することは難しい。

入院から四日目、義母はかすれ声ながら、やっと妻に意思を伝えることができるようになった。

義母の病室で私は妻に、「帰りに病院の前にある牛タン屋に行こう」と話した。病院の前にあるその牛タン屋はいつもたくさんの人で賑わっている。私はその勢いよく出ている煙とその匂いに誘われるが、いつも混んで

いてなかなか中に入れない。だが、開店間近かのこの時間なら、今日は中に入れるかもしれぬ。看病でふたりとも疲れも溜まっているから、焼肉でも食って疲れを吹き飛ばそうと思ったのである。その話を横で聞いていた義母は、「看護婦さんに、私も焼く肉を食べに行つていいか聞いてきて」と、妻に頼んだ。妻は「まだ、点滴もついているのに、お母さん何言ってるの」と、呆れたが、義母の回復振りに私と付き添いの交代にやってきた義母の栄子は安堵した。

結局、牛タン屋は私と妻だけで行き、家についたのは午後八時をまわっていた。私は焼肉の臭いを鎮めようとお茶を飲み、久しぶりに寛いだ気分テレビのリモコンを操作した。

日曜日のこの時間、Z大の大河ドラマを観ない人にとっては退屈である。素人を巻き込んだお笑い番組や、子供が大人のメイクをして演歌を歌う奇妙な番組、そして、お決まりの時代劇などが並んでいる。しかし、つまらないからといって、大河ドラマを観ても、途中からは訳が分からない。私は仕方なくパ

ラパラとチャンネルを回した。すると、宜保愛子という霊能者が登場するスペシャル番組をやっていた。このテレビ局は金曜日にスペシャル番組の枠を設けているが、この人気霊能者を利用して視聴率を稼ごうと特番を組んだのだろう。

人気霊能者を中心にすえたスタジオには、大物女性演歌歌手がゲストとして登場していた。彼女はこの前年に父親を亡くしたことがワイドショーで大きく報じられていた。きつと今回の出演のきっかけも、父親の死と関係があるのかもしれない。

宜保愛子は、スタジオで演歌歌手の霊視を行った。宜保は歌手の自宅の様子を話し始める。

ヒット曲を何本も飛ばし、年末の音楽賞の常連だった彼女の自宅は豪華そのものである。

「玄関が少し狭くて、風通りがあまりよくないようですね。それから何でしょう。蝶の羽根をたくさん並べて作った額があるのではないですか？」

宜保の指摘に演歌歌手は頷いた。

「その額にどうも問題があるようですよ」

歌手の話では、この額は彼女がブラジルに公演に行ったとき、日系人の後援者からお土産に貰ったものだという。彼女は、虹色に輝く蝶の羽根がとても美しかったので、家に来る誰の目にもとまる玄関にその額を飾った。

番組の女性アナウンサーが呼びかけると、歌手の自宅前に待機していたレポーターが画面に登場した。テレビカメラが映し出した映像には陽がさんさんと差し込んでいたから、この番組が生放送でないことが分かる。したがって、スタジオでビデオに収録した後に、出来事の順番を入れ替えたり、さまざまな処理をすることも思いのままである。

路地の奥に見える歌手の家は壁面に茶色のタイルが貼ってあり、家というよりはビルに近い。地価の高い都心部のため、隣の建物との間はほとんどない。

宜保が指摘した玄関の狭さは、一階に駐車スペースを作るためにそうなったのだろう。玄関を開けてテレビカメラが中に入っている行くと、虹色に輝いた蝶の額が姿を現した。

「これですね。とても綺麗なものですね」

「はい」

演歌歌手は怪訝そうに頷いた。

「でも、この蝶は自分のことを余り人に見て欲しくないって言うてますよ。だから、この額はどこかあなただけが見れる大切な場所に置いてあげたほうがいいと思いますよ」

「宜保さん。物にも魂があるんですか？」

アナウンサーは問いかける。

「そうですね。よく大切な人が亡くなった時に、形見分けてやりますでしょ。それって、とても重要なことなんです。靈感のない方も、形見を使っていると、その人のことを思い出したり、亡くなった方が自分のことを守ってくれると感ずることがありますよ。霊的に見ても、人が大事に使ったものには確かにその人の気持ちや乗り移っているんです。ですから、そうした自身の品をそんなに扱おうというのは避けたいものですね。この蝶の場合も自分のことを見られるのが恥ずかしいと思うたんですよ」

テレビカメラは玄関を後にして、階段を昇っていき、立派なサイドボードの中にある数々のトロフィーや表彰額が飾っているり

ビングへたどり着いた。テレビカメラは家のいたる所で、宜保の霊視を実証していく。だが、本当にこれで霊視を実証したことになるのだろうか。スタジオには科学者の姿はない。出ているのは、科学とは縁遠い売れっ子のアイドルやクイズ番組の解答席を常連にしているテレビタレントばかりだ。私らは宜保の言葉を鵜呑みにし、関心ばかりしている。たまに、宜保がタレントたちの守護霊について述べると、身を硬くするばかりだ。

「最後に何か、宜保さんに伺いたいことはありますか？」

女性アナウンサーは、演歌歌手に尋ねた。「実は、昨年亡くなった父のことを知りたいんですが…」

宜保は、ほんの少し宙を眺めたとおつと、親しみの表情を満面に現した。

「お父さんはとてもあなたのことを可愛がっていらっしやいましたね」

「でも、私が歌手になることで、父にはとても心配をかけてしまいました」

「そうですね。お父さんは今でも、とてもあなたのことが心配だとおっしゃっていますよ」

「ほんとうですか」

「ほら、今もあなたのすぐ後ろに立っただけです」

演歌歌手に亡き父が立っている場所を振り返る余裕はない。大きな彼女の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

「いつの間にか、隣に妻が座っていた。」

「いい加減だよな、こんなこと。事前にマネージャーが何か取材しておけば、全部話を作れるようなことばかりじゃないか」

レギュラー回答者の高い回答率が、実は事前にスタッフから答えを教えてもらっているからだという噂の立つテレビ業界である。

テレビ局は視聴率が取れるためなら、何でもやりかねない。私はそう思っている。

テレビでは、宜保が演歌歌手に語りかける。

「お父さまはおうどんが好きだったでしょ」

「はい。特に私が手打ちで作ったうどんにおぼろ昆布を載せたのが好きで、私が作る時も父はお代わりをしていました」

「お父さまが時々仏壇に好きだったおうどんを供えて欲しいとおっしゃっていますよ。そうすれば、もつとお父さまはあなたのことを守ってくださいますよ」

「はい、わかりました。そうさせていただきます」

テレビの画面に貰い泣きをしたのだから、妻の眼は潤んでいた。女性演歌歌手の霊視が終わると、宜保は他のゲストの霊視を次々にこなして行き、九時前に番組は終了した。

九時になると私は寝室に上がり、お笑い番組を見始める。妻は食事の後片付けを終えるところがってきた。

「ねえ、私、気になっていることがあるの。ちょっと来て」

屋根裏の収納スペースから妻が出してきたのは、真鍮でできた大黒様の置物である。

「立派な大黒さんだね」

「お引越しの時に片付けたまま放っておいたの、これは亡くなったお父さんが買ってきた飾っていたんだけど、家を洋式に建て替えたでしょ、だから飾っていません」

「ひょっとして、この大黒さんがさっきの蝶と同じだっというの？」

「そんなことはないと思うけど、でも、何が原因でどんなことが起こるかなんて、誰にも分からないでしょ」

物置に仕舞いっぱなしの大黒天の置物が寂しがっているなんて、とてもセンチメンタルなストーリーである。私は幼い時に読んだ鉛の兵隊の話を連想した。

絶対絶命の危機だった義母が今、なんとか持ち直して病院にいる。だが、いつ、義母の状態が悪化したとしても何の不思議もない。人は寿命とか宿命とか呼んで、人生の長さを納得しようとする。私にとっても死は神秘的なストーリーに呆れることもできるが、大黒天を飾ることで起きるデメリットは何もない。ならば、何で躊躇する必要があるのか…。

「それと、もうひとつお母さんが気にしていたことがあるの」

「まだ何かあるの?」

「お母さんは、私さんが刈谷の姓になっても、それと、あなたも三沢の姓を捨てることでも

あるよね」

「ああ」

「お母さんは、あなたが刈谷の家に着たからといって三沢の家の墓参りを疎かにさせるのは申し訳ないって。だから、それは妻である私の務めだから、お金がかかってもいいからしっかりやりなさいって」

「三沢の家って短くて、親父もおふくろもまだピンピンしてるよ」

「そうじゃなくって、ご先祖のお墓のこと」
三沢の墓は福井県敦賀市にある。東京に暮らしていると、墓参りのためだけにわざわざ福井まで行くという発想はなかなか起きない。両親が郷里を離れてから十年が経つ。その間、私は三沢家の墓参りをしていなかった。その年の春の彼岸に、妻と義母に連れられて刈谷家の墓参りに行った。

刈谷家の墓は、大森の浄縁寺にある。私は、お彼岸の時期に父や母の郷里にいたことはなかったから、お彼岸の墓参りは生まれて初めての経験だった。私は妻の父の遺骨が入っているお墓に神妙に手を合わせ、線香を手向けた。

「この人が新しい息子だよ」

義母はお墓に話しかける。

義母はけっして信心深い方ではなかったが、先祖供養だけはきちんと行いたいという希望をいつも持っていたし、それを実践していた。さらに六年前に夫を亡くしてからは、その思いが一層強くなったようだ。

「お墓参りもちゃんとやらないといけないですね」

帰りの車の中でなんとお母さんに義母に語りかけた。その時、なぜそういう気持ちになったのか、その理由を考えてもみなかった。だが、妻が義母のために三沢家の墓参りをしようと言いつつ、私は初めて明確な目的を持って墓参りをしようとした。

義母の言葉を実行することが、死の床にいるかもしれない義母に対して、今私ができる唯一のこと。このまま何もせぬまま義母がこの世を去れば、私には後悔だけが残る。

次の日の朝、私は会社を休み、妻とともに新幹線に乗った。

第三章：敦賀での墓探し

新幹線を米原で降り、特急しらすぎ号に乗り換えると、敦賀まであと三十分である。左側の車窓には暫くの間、琵琶湖が姿を現していたが、それも長くは続かない。列車は次第に山の中に入って行く。山は険しさを増していったが、それも長くは続かない。列車が峠にたどり着くのにさしたる時間はかからない。再び車窓から田んぼがひとつたつと見えてくると、たちまちあたりは田園風景になる。車内に敦賀到着のアナウンスが響いたので、私と妻はデッキに向かった。

敦賀はかつて上方と蝦夷地を結ぶ交通の要所であり、松前貿易の港として古代から栄えた港町である。私の父は金沢大学を卒業すると東京で就職したから、もう東京での生活の方が長い。父は福井にどこか雪が降ると、雪掻きのために帰省していたこともある。私も小学生の頃、夏休みのほとんどをその町で過ごした。年の近い従兄弟に連れられて、近所の小川にメダカやザリガニを取りに行った。蝉取りをする。週末になると、祖父母や

伯父夫婦が加わって、松原海岸という海水浴場にも出かけた。

今考えると、海と砂浜しかない場所で、どつやつて一日が過ごせたのか不思議。そんな短いようでも長かった小学生の夏休み。私はお盆になると祖母に連れられて墓参りに行った。

海水浴は一族郎党で大勢だったが、なぜか墓参りは祖母と私の二人きり。私は祖母に言われるままにお墓に水をかけると手を合わせた。子供にとって墓参りはつまらなかつたし、なんでこんなことをするんだろう。と思っていた。

敦賀駅の改札を抜けると、駅前のレンタカー会社の門をくぐる。

「一番安いタイプの乗用車を。あと、市内の地図も借りたいんですが」

しばらくして事務員から渡された地図は、地元の観光協会がつくった観光名所の絵がたくさんはいったものだった。敦賀は関西から一番近い日本海の街だから、観光地としても人気がある。毎年、梅雨が明けると、関西方面の若者たちで街は賑わうのだ。

渡された地図はそのためのものであり、彼らが行きたいと思う海水浴場や景勝地が書き加えられているが、私がこれから行くとする墓地の情報には乏しい。私が行こうとするのは、祖母の実家である垣坂家と祖父が葬られている三沢家の墓である。

三沢家の墓地は、幕末に非業の死を遂げた水戸藩士武田耕雲斎の墓の近くだから、地図に載っているその場所を頼りに行けば、なんとか見つかるだろう。問題は垣坂家の墓地である。お寺の名前だけは、昨夜、母に聞いて私は知っていた。

私には、幼稚園の運動場の片隅にある水道で水を汲んで、お墓参りをした記憶がある。そのお寺は幼稚園をしていたはず。私はレンタカー会社の事務員に寺の名前とその寺が幼稚園をやっていることを伝えると、事務員は地図の上に赤い丸を書いてくれた。車が用意され、車体の傷を確認すると、私と妻は車に乗り込んだ。車を発進させようとする、先ほどの事務員が雨が降ると大変でしょうと、傘を渡してくれた。

まず垣坂のお墓へ行くことにして車を走らせた。しかし、その前にお供物とお花をどこかで買わなければならない。売っていそうな店を探しながら車を走らせると、歳月を感じさせない町並みが広がっていることに驚かされる。車が市立病院の前を通り過ぎようとする、右側にスーパーマーケットがある。病院の前の店だからお見舞い用の花ばかりでなく、仏花も売っているに違いない。

お供物は亡き祖父が好きだった栗まんじゅう。そして、久しぶりに敦賀に来た懐かしさから、地元の水菓子である水洗まんじゅうを買った。水洗まんじゅうは敦賀独特の夏の和菓子である。外見は東京の葛桜そっくりだが、味はもう少しさっぱりしている。

幼い頃敦賀を訪れると、伯母は流しっぱいに水洗まんじゅうの入ったお猪口を並べ、水を流しっぱなしにして冷やしていた。お猪口からお皿に移された水洗まんじゅうは冷たくて口に入れると最高においしかった。私が行儀良くお皿を使って食べていると、従兄弟は水につかたまんじゅうを拾い上げ、お猪口のまま、ツルリと口の中に流し込

む。きっとそのようがおいしいに違いない。私もそのように食べてみたかったが、伯母の手前できなかった。あれから二十年が経ち、水洗まんじゅうは、ビニールにパックされスーパーの店頭に並んでいた。

垣坂家の菩提寺は、敦賀湾に注ぐ小さな川のとりに建っていた。遠くから見ると幼稚園にしか見えない近代的な建物だったが、裏に回ると墓地もあり、ここに垣坂家の墓があるのだと私は思った。車を降りて、微かな記憶を辿りながら垣坂家の墓地を探す。記憶では、幼稚園の建物の間を抜けて行ったところに墓地があったような気がする。

「僕は奥から順に探してくるから、君は手前から順に探してきて」

私と妻はひとつひとつの墓石を確かめていった。だが、サッカーコートの半分位の広さのこの墓地に、垣坂家のお墓はなかった。「おかしいな。このお寺のはずなんだけど」お寺の名前は確かだったが、あたりの風景に私は確証が持てない。

「ご住職に尋ねてみたら？」
探すのをあきらめた妻に言っ。

今回の墓参りの動機を考えると、できれば誰にも知られないで行いたい。人が死にそうだからと墓参りすることなど、なんとも説明がつかない。たとえ説明がついたとしても、ご都合主義で泥縄の印象は拭えない。とはいえ、お墓が見つからないのでは仕方ない。

「垣坂のお墓なら、山門の道路を隔てた反対側にありますよ」

相撲取りのような恰幅のいい僧侶は山門の向こうを指差した。そう言われて素直に従うと、二十個ほどの古いお墓が並んでいる。近づいてみると、その中の五つの墓標に垣坂家と刻んであった。

お墓には櫛が飾られている。そういえば、今日は七月十五日である。地方では旧盆の八月十五日に墓参りを行うところも多いが、敦賀では新盆に行つらしい。ひからびた櫛にもまだいくぶん緑が残っていた。

私と妻は墓を掃除して水をかけ、ご供物を供えて線香を手向けると合掌した。

墓石には真ん中に、先祖代々精霊と刻まれていたが、その周りには 信女や 大姉 という女性を表す戒名や、 童子という子

供が葬られていることを示す戒名がいくつも彫られている。祀られた日付は一番新しいのが明治十四年、そのほかで年号が読み取れるのは、嘉永や万延といった江戸時代の年号のものだ。中には男性の戒名もあったが、それにしても垣坂家は大変な女系家族である。

垣坂家は、松前貿易で栄えた敦賀の廻船問屋だった。自分の祖先には一体どんな人がいてどんな生活をしていたのだろうか。私にふつふつと興味が湧いてきたが、江戸時代の垣坂家の暮らしを知り手立てを私は持っていないかった。

「脚が痛い」

「え？」

「早く行きましょ」

妻は、私を置きざりにさつさと車に乗り込んだ。

私は墓参りで出たゴミを片付け、桶を水道のところへ返すと、車を走らせた。

「やっと脚の痛みがとれたわ」

車が垣坂家の墓地から四、五百メートル離れたところで、妻は口を開いた。

「どうしたんだよ」

「あのお墓に脚が痛くて亡くなった人がいたの」

「お墓にいるときに痛くて、お墓を離れたら痛くなくなったからといって、どうしてそれがお墓に脚が痛くて亡くなった人がいるっていう結論になるんだよ」

「だって、そうなんだもの」

「お墓を探して疲れたから脚が痛くなって、車に座って落ち着いたら痛みがなくなったっていうのが普通だろ。それに三十分も歩いてないじゃないか。きつとお母さんの看病の疲れが脚にきたんだよ」

私の言葉に妻は無口だった。そのことが反って私を不機嫌にする。

もし、妻の言うように本当に脚が痛くて亡くなった人が居たとしても、墓石の年号からいえば百年以上も前に死んだ人のことになる。たとえ、お化けの仕業だとしても、そんな古いのは聞いたことがない。変なことを言うものだと思つたが、その時はそれほど気に留めることもない。私は武田耕雲齋のお墓の近くに車を停めると、三沢家の墓を探し始めた。記憶では、武田耕雲齋のお墓の脇を通つ

て行ったところに共同墓地があり、その左奥に立っている大きな松の根元に三沢家の墓がある。共同墓地は全体でサッカーコートぐらいの広さがある。しかし、探すのは至って

簡単である。墓地の入り口に立って、祖父の勢いのある字をもとに三沢家の墓と刻んだ墓標を探せばいい。この探し方はお墓を作ったときに誰かが見つけ、これは分かりやすいと親戚たちに広がったものだ。事実、十年前の夏休みに、当時のガールフレンドと二人でお墓参りに来た時も、お墓の場所を見つけたことが出来た。ならば、今日も簡単に見つけられるはず。だが、墓地の入り口に立って左前方を見ても、三沢家と刻まれた墓標は見つからない。

「おかしいな。ここから三沢家っていう墓石が見えるはずなんだけど」

「本当にここなの？ お墓はここじゃないわ」

「何言ってるんだ。お墓の場所も知らないくせに」

私はななかば怒りながら三沢家のお墓がありそうな方向に歩いていく。お墓は雑然と並

んでいて、墓地の中に道があるわけではない。他所のお墓を跨ぎながら、目標の松らしき大木の下に近寄ってみた。しかし、三沢家の墓はない。

「お墓の近くに松の木はあるけど、もっと開けたところよ」

「お墓に来たこともないお前がどうして分かるんだ」

妻の言葉を無視して、私はお墓をしらみ潰しに探しはじめた。お墓の探し方がないとすると墓探しは大変である。一見したところ、どのお墓も似たり寄ったりだ。このあたりは江戸時代からの寺町で周囲には、お寺やお墓が多い。見当がなければ三沢家のお墓を見つめるのは難しい。妻はあきらめ顔で、道端の石の上に腰掛けた。

自分の記憶違いということもあると考え、何度も武田耕雲斎のお墓へ戻り、記憶を辿りながら探していく。車を停めてからお墓を探し始めてすでに二時間近く経っている。しかし、私はどうしても見つけることができなかつた。

「三沢家のお墓はここじゃないわ」

途方にくれてる私に、再び妻は話しかける。「この間、夢で三沢家のお墓を見たの。もっと開けたところで、松の木が近くにあったわ」

「松の木？ そうだよ。三沢家のお墓は確かに松の木の下にある。だから、一生懸命探してるんじゃないか」

私も妻の正夢に頼りたい気分だ。だが、近くに砂防用の松林があるくらいだから、いたるところに松の木がある。

「どうせ見るなら、もっとしつかりした夢を見てくれよな」

昼飯を食べるのは、墓参りがすんでからと思っていたが、時刻はもう三時を過ぎようとしている。妻はお腹が空いているから怒っているのかもしれない。

「ねえ、お母さんに電話してみたら」
行き詰った私は、妻の提案に同意して長野にいる母に電話することにした。

「お墓の場所は私もうる覚えだから分らないけど、お寺さんは確か浄勝寺といったから、そこへ電話してみたら」

敦賀には伯父も伯母も暮らしているから

そこに聞くのが一番だ。しかし、故郷との縁を断っている母は、親戚に聞くのは避けて欲しい。

「分かった。浄勝寺に電話してみる」

「それから、申し訳ないんだけど、ことぶき荘のおばあちゃんに会ってきて欲しいんだけど、あれから十年経つけど、きっと元気に生きていると思う」

心ひそかに気になっていたことを母は口にした。ことぶき荘は、特別擁護老人ホームである。祖父・安太郎の死後、老人性痴呆症になった祖母のふきが入っている。母は祖母と生活をともにしたことはないが、祖父が病気で入院すると、ひとりぐらしになった祖母の生活の面倒を見るために何度も敦賀に帰っていた。

祖父の死後、親戚同士が揉めて敦賀と縁が切れた。風の頼りで、祖母が老人ホームに入ったことを死んでも、母は祖母のために何もすることができない。母はそれがずっと気がかりだったのだ。

しかし、妙なことを言う。「おばあちゃんに何かがあったら、絶対に分かるはずだか

ら」。連絡も取らずに離れて暮らしているのに、そんなことが分かるのだろうか。彼女は、自分の母が亡くなったとき何かを感じたらしく、同じような義母が亡くなるときも、必ず虫の知らせが来ると信じている。自分の母が亡くなったとき、折悪しく旅行に出ている死に目に会えなかった母は、出棺ぎりぎりまで告別式に駆けつけた。そのとき、母の耳に「間に合ってよかったねえ」という声が聞こえたという。そして、祖母は突然死んだため、「押入れの中の整理がしていないのが恥ずかしい」と続けた。母以外に死んだ祖母の声を聞いた兄弟はいない。母は亡き母の声を聞いて実家の押入れの整理を始めたが、兄弟たちは遅れてきた母が形見を探そうと押入れをかき回していると勘違いし責めた。私の祖母が亡くなったのは、私が小学生の頃であった。

母への電話を切ると、私は電話ボックスの電話帳で浄勝寺の電話番号を探すと、電話を入れた。だが、いくら待っても浄勝寺は出ない。しかたなく、電話帳に載っている住所からお寺に行ってみることにした。

浄勝寺は建物の正面こそお寺の本堂を思

わせたが、その右側は引き違いの玄関があって、普通の民家と変わらない。私は玄関のプザーを押ししたが、呼び出し音が続けばかりで中から誰も出てこない。

住職は寺業の傍らどこかに勤めているのかもしれない。それなら、平日の午後三時に寺にいないのも仕方ないのかもしれない。夕方になれば必ず誰かが帰ってくる。私と妻は食事を取ることにした。

敦賀市の給食センターがやっている街道沿いのレストランで、私たちはお刺身定食を食べた。お刺身定食は全国どこでも食べられるが、当地のお刺身定食には、敦賀特産の蒲鉾が付いている。角皿に盛られた刺身も、東京で食べている太平洋産の魚よりも味が深い。

「お寺さんがいないんだったら、伯母さんに電話してみたら？」

私の両親の親戚つきあいの気まずさを知らぬ妻は言う。

「ああ…。それより、おばあちゃんにまず面会に行ってみよう。その後でもう一度、お寺さんに電話をして、それでも駄目だったら伯

母さんに電話するよ」

「それしかないわよね」

「さっき正夢を見たって言ったけど、何時見たんだよ？」

「ひと月前ぐらいかな。実は私、それからずっと三沢家のお墓に行かなきゃって、思ってたの」

「え？　じゃ、昨日、宜保さんの番組を観たから今日敦賀に来たんじゃないのか」

「そう。新婚旅行もまだ行ってないのに、あなたがわざわざ福井までお墓参りに行くわけがないって思ってたから、昨日、あなたが宜保さんの番組を観て感心していたから、これはいい機会だなって」

私は一瞬だまされたような気になった。しかし、そんなことはどうでもいい。会社を休んでまで福井まで来た以上、どうしても墓参りを済ませなければ私の気がすまない。

十分ほどで食事を終えると、妻はレジでお金を払い、私は浄勝寺に電話を入れた。呼び出し音が十回鳴らしたが、応答はない。私は虚しく受話器を置いた。

ふたりはことぶき荘に行くことにした。こ

とぶき荘の場所はすぐに分かった。建物の前

に車を止め、中に入っていく。玄関の右手に受付があり、面会者が記帳するノートが置いてある。私は、祖母の名前である三沢ふきのページを探した。帳面をめくっていくと、三沢ふきと書かれたページが現れた。この老人ホームで祖母は元気に暮らしている。

面会者の欄には伯母の名前の他に、私に見覚えのない名前もある。きつと従兄弟の妻や子供たちのものだろう。ここまで来て名前を隠す訳にもいかない。私はすでに刈谷姓だったが、三沢私と記帳して現在の世田谷の住所を書き込んだ。

「どなたへのご面会ですか？」

「三沢ふきなんです」

事務所からやってきた女子職員は帳面を覗き込むと、

「東京からですか。それはお疲れ様です」

と言い、私たちを祖母の病室へ案内した。

「ついこの間、部屋が変わったとこなんですけど、どこだったかな」

このホームでは、入所者に刺激を与えるために、一定の期間を置いて部屋が替えをする

という。

「あつ、ここだ、ここだ。どうぞ」

職員に促されて、ふたりはおずおずと部屋に入っていた。

ベッドの足元のネームカードには三沢ふきとマジックで書いてある。足元から視線を移すと、祖母は眠っていた。祖母は昭和天皇のお后と同じ歳だから八十歳をとうに越えている。私と妻は暫くの間、うたた寝をすく祖母の横顔を見ていた。

入れ歯が入っておらず、髪の毛も洗いつばなしだったが、紛れもなく祖母の姿だった。うとうとと昼寝をするその姿は、ホームでの暮らしが私女にとってとても安らかなものだと感じられ、私にはこみあげるものがあつた。

暫くすると、先ほどの職員が面会者用の椅子を持って現れた。

「三沢さん。東京からご面会の方ですよ」

職員は祖母を揺り起こした。祖母は寝ぼけた顔をして、「二度瞬きをすると、大きな眼をしっかりと見開いた。

「東京の博彰の息子の私です」

「そうか」

「これが妻の妻です」

妻は祖母をじっと見つめると、親しみを込めて会釈をした。

「そうか。もうお昼は食べたんか？」

「あ、はい。今さっき近くの食堂で食べました」

「そうか」

祖母の受け応えが自分の言葉を理解してのものなのかどうか。私には分からない。だが、彼女が機嫌よく微笑んでいるだけで、幸せを感じることができた。私は祖母の枕元に座っていたので、祖母の視線は足元に座っている妻に向かって行く。

「はいからさんやなあ」

祖母は敦賀の廻船問屋・垣坂家のお嬢さんである。若い頃は何人もの女中に世話をされ、きつとお洒落に暮らしていたに違いない。だが、今はホームに入ってお洒落ができない。とはいえ、服装や髪型に関する興味は元気な頃と少しも変わらない。祖母は妻が来ている派手なプリントのサマードレスを見て、「はいからさん」と思ったのだらう。

妻が祖母の手を握ると、祖母は私女のカールした前髪に手を触れた。

「はいからさんやなあ」

どうやら、祖母がはいからだと思ったのは、妻のヘアスタイルのようだ。

「東京から来た私の妻の妻です。おばあちゃん、はじめまして」

「そうか、東京から来たんか」

「さつき、おばあちゃんのご実家の垣坂のお墓参りに行ってきました」

「……」

祖母は外の景色を見たまま、にっこりしている。

「おばあちゃんも大変な人生でしたねえ」

妻の言葉に、祖母が黙ったまま眼を潤ませたと感じたのは、私だけだったらうか。妻に促されて、私も祖母の手を握る。祖母は静かに窓の外の風景を見ている。祖母の手は思ったよりごつごつしていたが、綺麗に手入れがなされ、微塵も老醜を感じさせなかった。病室には十五分もいただらうか。私たちは同室の老婦人たちに挨拶するとホームを後にした。

「おばあちゃんは呆けてなんかないわよ。だって呆けていたら、人のお腹の心配なんかするはずないもの」

車が行り出すと、妻は私に訴えた。

正直なところ、私は祖母に話しかけてみて、手ごたえのなさを感じ、これが老人性痴呆症なのか。と想っていた。しかし、妻が祖母に話しかけているのを見ると、二人の間に確かなコミュニケーションが成立しているのを感じる。妻は、祖母がイエスと頷ける質問を巧みに選んで、祖母に投げかける。祖母は瞳を潤ませながら何度も頷くだけが、二人の心の交流を通じて、あたりに暖かい雰囲気気が広がって行く。

呆け始めた頃の祖母を私はかろうじて知っているが、病院で老人性痴呆症と診断された後の祖母に会ったことはそれまでなかった。痴呆症は人間が痴呆になってしまう病気ではなく、他人とのコミュニケーションが取れなくなってしまう病気なのではないか。言葉になって体の外に溢れてくることはないが、祖母の中には、楽しかったときの思い出がぐるぐる巡っている。人を恨んだり、悔し

く思う感情もどこかに消え去り、まるで仏様のようだ。

妻には、外に現れない祖母の感情を感じる能力があるのかもしれない。感じ取ったものを使って、祖母とコミュニケーションを成立させる。祖母と孫の嫁という年齢を超えた女同士の微妙な感情の触れ合いは、男には計り知れない。

私は男である自分の無力さを痛感した。

ことぶぎ荘を出ると、私は電話ボックスから浄勝寺にもう一度電話を入れた。三度目にして、ようやく浄勝寺の住職が電話口に現れた。

「三沢さんのお墓ですか？ 三沢さんのお墓なら、光が丘霊園にありますよ」

「ご住職の話では、三沢家は三年程前にお墓の場所を移したという。新しいお墓の場所は、私が今電話をかけていることぶぎ荘から眼と鼻の先である。」

「だから、最初っから私の言うことを信じてれば、こんな無駄な時間を過ごさないうで済んだのに」

光が丘霊園に着くと、時計はもう五時にな

ろうとしていた。

「松の木が生えている開けたところって言うたよね」

西向きに広がる斜面に新しく造成された霊園には、松の木などどこにも立っていない。しかし、遠く見下ろすと、斜面のずっと下のほかに松の木が一本立っているのを妻は見逃さない。

「あそこに、ほら」

「ホントだ。じゃ、あの松の木の下から手分けして探そう」

私たちは、碁盤の目のように整然と区切られた霊園をひとつひとつ探すことになった。しかし、この霊園は結構広くて、段々になった霊園が三段。それも左右に分かれて広がっている。

私が最初に探しに行った松の木に一番近いブロックに、三沢家の墓はなかった。続いて、段々坂を登るようになり、ひとつひとつの墓標を調べていく。しかし、なかなか見つからない。このままではお墓が見つからない前に日が暮れてしまう。私はもう一度浄勝時

に電話した。住職は何で親戚に聞かないのですかと怪訝そうにしながらも、霊園の駐車場に一番近いブロックに三沢家の墓があることを教えてくれた。

住職に教えられたブロックは、人の背丈よりも高い大きな墓標が集まっている場所だ。そんな大きなお墓ばかりの場所にこじんまりとした三沢家の墓があるはずはないと思いい、いい加減にしか探していなかった。

ようやく三沢家の墓を見つけると、私は思わずその場所にへたり込んだ。陽はとっぷりと西に傾き、あと十五分もすれば陽は暮れてしまいそうだ。お墓の前で何もしないで呑気に休んでいる場合ではない。私は桶に水を汲んで来ると、ふたりで墓標に水をかけ、栗まんじゅうと水洗まんじゅうを供えてから線香に火をつけ、手を合わせた。

「どうも長い間ご無礼を申し上げました。はじめまして、純之助さんの妻の友美です」

妻は合掌をして墓に語りかける。私は、納得されている祖父の安太郎と伯母の敦子のことを思った。

遙かかなたの松の木にも西日が当たって

いる。

「君が夢で見た松の木があんなに向こうにある。これじゃどう見たって、松の木のすぐそばにお墓があるなんていえないよ」

「でも、開けているところだし、確かに松の木も見えたでしょ」

妻が夢で見たイメージは、開けていて松の木があつて、三沢家の墓があるというもの。しかし、それを絵にしても、あまりに現実とはかけ離れている。私には、妻の夢が現実と符合しているとは思えない。確かなことは、武田耕雲斎のところではないと、最初に言い切ったことだけである。

桶を流し場に片付け、再び車に乗り込むと、もう辺りは真つ暗だった。

「墓参りだけで、これだけ大変だとは思わなかったよ」

「今まで十年間も不義理してたんだもの、お墓参りするのにこれぐらい苦労したってバチは当たらないわよ」

光が丘霊園を後にして、駅前でレンタカーを返すと既に七時を過ぎていた。レンタカーの清算を済ませ、駅で帰りの切符を買つと、

お財布の中には数千円しか残っていないかった。お土産を買おうにも、銀行はとつくに閉まっている。考えてみれば、日曜日の夜に敦賀行きを突然決めて、そのまま新幹線に飛び乗ったのだから当然である。銀行にも行かないで、よくもここまでお金がもったものだ。敦賀駅の売店で、妻は東京駅から家までの交通費を残して、駅弁と蒲鉾、そしてビールを買った。

考えてみると、久しぶりの敦賀だったが、食べたのはお昼のお刺身定食だけ。ゆっくりと日本海を眺める時間もなかった。しかし、今回の旅行の目的を考えれば、それでよかったのだらう。

義母の入院をきっかけにした敦賀への小旅行は、本当に観光とはかけ離れた墓参りだけの旅になった。

財布の中の小銭を使い果たし、私たちはようやく世田谷の自宅にたどり着いた。

風呂に入って旅の疲れを落とし、ようやくベットに入ったのは、深夜の一時を回っていた。ベットにもぐり込んで眼をつぶると、妙な気持ちになった。眼をつぶると昼間見た墓

場の風景が迫ってくる。気味が悪いので明かりをつけたまま眠ろうとしても、眼をつぶると墓場のイメージが襲ってくる。半日近く墓場を彷徨っていたのだから、私のイメージに墓場が強く植えつけられても不思議はない。「ごめん、俺、気味が悪いから、電気をつけたまま寝るよ」

「どうしたの？」

「今日一日お墓にいただる。だから、なんかこのままだとうなされそうで」

「あなた不成仏霊をつれてきちゃったんでしょ」

「何だよ、その不成仏霊とかって？」

「エッ、知らないの？ 亡くなってお骨がお墓に入っても成仏できないでふらふらとこの世を彷徨っている霊のことよ」

「そんな非科学的なこと言つなよ。一層気味が悪くなるじゃないか。俺は一日お墓を歩き回ってたから、お墓の映像が目の裏に焼きついただけなんだから」

「実は、私もさっきからちょっと肩が重い。わたしはお墓ではなくべく霊に寄つてこられないようにしてただけだよ、やっぱり誰か

がおぶぎつっているのかもね。ねえ、ちょっと背中をはらってみて」

「ええ……」

「何でもいいから、早く」

私は、妻の言つがままに、私女の背中をはらった。

「おい。これでいいのよ」

妻は二、三度肩を上下に動かすと、首をぐるりと回した。

「ありがとう。とても楽になったわ」

「ほんとがよ。で、俺はどうすればいいんだよ」

「怖かったら、電気をつけっぱなしにして寝ればいいでしょ。」の弱虫

私には返す言葉はない。恐怖の原因は、私の中にある墓場の記憶にあるに違いない。だが、電気を消すと暗闇から魑魅魍魎が突然襲ってくるような予感がしてならない。暫く、眼をしばたてながら起きていると素敵なアイデアが浮かんだ。お墓の強烈なイメージを打ち消すために、十年ぶりに会った祖母のイメージを脳裏に焼き付けるのだ。

私は眼をつぶって、ことぶき荘の光景を必死に思い出そうとした。しばらくすると、伝統の明かりをほのかに感じるまぶたの裏に祖母の笑顔が次第に広がってくる。イメージの中で祖母の笑顔が定着したころ、ようやく私は眠りの淵に落ちていくことができた。

第四章：義母の死

敦賀から帰った翌日、私は横浜のホテルに
行った。私の仕事は企業向けビデオのディレ
クターである。そして今、コンピュータメー
カーのセミナーで移される映像の制作を担
当していた。

ホテル側の担当者イベントのスタッフ
だけがいるセミナーの開かれる宴会場は、が
らんと静まり返っている。一週間後、こ
の場所にテレビで顔を打っている有名エコ
ノミストが登場し、メーカーの販売代理店や
ユーザーのサラリーマンたちを相手に講演
する。会場には、一万近くの人衆が集まる
が、広い会場の後ろの席からでは、壇上のエ
コノミストの姿は豆粒にしか見えない。そこ
で、このイベントでは、会場内にビデオカメ
ラを設置し、舞台後方にスクリーンにエコノ
ミストの姿を映し出すという演出が採用さ
れていた。

イベントの進行に合わせて、テレビの技術
スタッフを指揮するのが私の役割である。打
ち合わせは午後三時に終わった。私はその足

で義母が入院している病院に向かった。

マジックで刈谷まきと書かれた個室に入
って行くと、義姉の栄子が丸椅子に座ってい
た。彼女は私に気づくと、唇に指を添えて、静
かに」と合図した。

「どうも」

私は小声で話しかける。

「早いわね」

「横浜で仕事が終わったんだけど、わ
ざわざ新宿の会社に戻るのも面倒でしょ。だ
から、いまさっき、この病院のロビーから、た
った今打ち合わせが終わったんで、これから
帰っても六時を過ぎますから直帰します」つ
て、会社に電話したんですよ」

「それはお疲れさま」

栄子は呆れたように微笑んだ。

着替えの衣類を持って妻が入ってきた。

「あら、仕事はもう済んだの？」

「ああ」

「じゃ、一緒に帰れるわね」

この病院は完全看護である。したがって、
家族が二十四時間病院に詰めている必要は
ない。家族が病院に詰めていなければならな

いのは、病状が急変する可能性があり、医師
が家族の同意を必要とする手術の可能性が
ある場合など。病状が安定すれば、家族の承
諾が必要な事態もなくなる。そうならば、家
族は身の回りに必要なものを切らさないよ
うにして、あとは患者を精神的に支えるため
に病院に顔を出すだけだ。

「お姉ちゃん。お母さん、もう大分回復して
きたから、明日から大部屋だつて」

「ほんとに。それはよかったわね」

「年寄りが一人部屋にいと刺激がないか
ら、呆けが進んでよくないんですつて。リハ
ビリのために大部屋に移すつていうことは、
病状が回復に向かっているつてことですよ。
先生もお母さんの回復力の強さにびっくり
してたわ」

「やつぱり、墓参りが効いたのかな」

私は妻に話しかける。

「だといいわね」

姉の栄子は、妹夫婦の福井への墓参りのこ
とを知っている。しかし、姉はとりたててそ
の話題に加わろうとはしなかった。

人の気配を感じたのだらうか。義母が眼を

覚ました。義母は窓の外が見たいと訴えたので、妻は看護婦の了解を得ると、ベッドの角度を十五度ほど持ち上げた。

「お母さん、この窓から花火大会が見れるんですって」

声にならない声で、義母は頷いた。

「今年は家から花火大会は見れないけど、このほうが花火大会の特等席だわ」

その話をしたとき妻は、母がその花火大会を見ることはない。と、直感したという。そして、その予感が現実のものとなったのは、その六日後のことである。

その日曜日、初夏を感じさせるさわやかな朝だった。前日にコンピュータ会社のイベントを終えていたし、義母の容態も安定していたから、私は久しぶりに寛いだ気分ですることができた。遅い朝食につくったそうめんが、気持ちよくのどを通っていく。

「もう、梅雨が明けたのかもしれないね」

「今年の夏は暑いのかしら」

まばゆい朝の日差しは、これから猛暑がやってくることを予感させる。

「一息ついたら、お母さんの病院に行こう」

そう思っていた矢先に、義姉の栄子から電話がはいった。電話の内容は、義母の容態が急変したというものだった。義母の病状は安定していたが、その日の午前三時頃、義母のいる大部屋に急患が入ってきたという。義母のデリケートな精神は入院騒動にシヨックを受け、心臓発作を再発させた。

妻と病室の中に入って行くと、それまでの回復がまるで嘘のように、義母は汗びっしょりになって呼吸を荒らげている。義母の普段の動作は七十過ぎの老人のものだったし、六年前の怪我がもとで入れた人工骨陶のせいで歩き方は至極ゆっくりだった。だから、これほど躍動的に義母の肉体が動いているのを私ははじめて見た。

義母が必死に生きている。義母は意識不明の状態だが、確実に生きているんだと私は実感した。

病室を出ると、廊下で栄子が眼を真っ赤にして呆然と立っていた。

「先生が連絡しなければならぬところには、連絡してくださいって」

義母が危篤状態になったのは、この六年間

に三度あった。しかし、その度に義母は奇跡的に回復してきた。悄然とする姉を前にして、妻はうるたえるところか逆に肝が据わってみえる。

「妻、お姉ちゃんに連絡しなきゃ」

栄子が口にしたお姉ちゃんとは、妻たち三人姉妹の長女、川越寛美のことである。私は妻との結婚を決めた後、一度寛美の家を訪問していた。私と妻の結婚式に川越一家も出席していたから、私が寛美に会うのは、これが三度目である。

実は、妻が結婚を決めるまで、寛美と義母は絶縁状態だった。義父が死んだ後、すべての財産を妻に託すという遺志の遺書が発見された。父が亡くなったら長女の自分が跡を継ぐんだと思っていた寛美はそのことに腹を立て、遺産相続の同意書に何年も判子を押さなかった。たとえ他家に嫁いではいても、長女が跡を継ぐのが当たり前という意識が彼女の中で大きかったのだろう。それとも単純に遺産が欲しかったのか。だが、寛美が義母と絶縁までして自分の意思を主張した理由はもうひとつあった。彼女は父が亡くなる

十年前に甲状腺腫瘍の摘出手術を受けていたのだ。甲状腺を手術すると精神のバランスが崩れ、性格がきつくなったり、精神的に不安定になるといふ。甲状腺の手術と自分が長女だという責任感が、その後の寛美の言動に深く影響しているのかもしれない。

「あたしがお母さんの病院に行くと、お母さんが興奮して病状が悪化するから、あたしは遠慮しとくわ」

以前、寛美は妻にそう電話してきたことがある。

実は義母も甲状腺の手術を経験していた。精神病理学的にみても、精神的に不安定な寛美と義母が顔を合わせることは、避けるべきだったに違いない。

「お母さんには会わないほうがいいですよ。それは、あなたのためではなくて、お母さんのためです。あなたがお母さんに会うと、お母さんは狂ってしまふんです」

甲状腺の手術の後、寛美のカウンセリングをしていた医師は、彼女にそう助言していた。だが、目の前の患者を差し置いて、精神科の医師が患者の母親の精神の暗転のことを心

配するとは考えられない。一方、義母を担当していた心臓内科の医師は、「お母さんが興奮するようなことは、極力避けたほうがいいですね」と、妻にアドバイスしていた。

「その娘さんに会うと、お母さんも辛い思いをしなければなりませんし、お姉さんもきつと精神的に不安定になってしまいますね」

精神科の治療のためには仕方のないことだとしても、血を分けた母と娘が同じ東京に暮らしながら何年も顔を合わせないのは、世間的に見れば異常事態である。だが、医者の言葉に逆らってまで無理やりふたりを逢わせようと、妻はしなかった。

以前、義母が入院していた時に、寛美の代わりに私女の夫・仁志が病院にやってきたことがある。仁志は寛美の精神的な病気を一日も早く回復させるためには、何か用事があつた時に妻が直接寛美と連絡を取るのではなく、仁志の勤務先に電話を入れてくれるように懇願した。妻は言われるまま親戚の法事がある度に、仁志の勤務先に連絡を入れたが、その連絡を聞いた寛美が法事に現れることはなかった。そうこうするうちに六年が経つ

たのである。

妻の結婚によって、義母と寛美は六年ぶりに顔を合わせたのが、ゆっくりとふたりが話す機会はとうとう訪れなかった。

「あの子は、とても嫌な感じになったね」
寛美と会って数日が過ぎた頃、義母はふと妻にもらした。六年の時間は、義母と寛美の感情を何も変えていなかったのだ。とはいえ、私との結婚により、妻は寛美に直接連絡を入れるようになった。今回の入院でも、妻は寛美に義母の経過報告を入れていた。しかし、この時まで寛美は病院に現れていなかった。
「お母さんは、もつ誰が来てるか分からない状態だから」

妻に説得によって、寛美が病院に現れたのは、その日の午後遅くだった。自分の家族を従えて、義母の病室に入った寛美は、今にも肉親が死ぬかもしれないという時に娘が見せる表情とは明らかに違っていた。感情が平衡感覚を失っていることを体のどこかが感じていたらしく、その違和感を隠すためか、はにかんだような薄笑いが表情に表れていた。私女は腕を組んだまま、意識不明の義母

をしばらく眺めていた。

「みんながいるから、私がいたってしょうがないわね」

寛美は義母の病室から出ると、妻に一万円札を手渡した。

「あたし、何もしてないからね」

一万円で何をしろというのだろう。お金を無理やりつかまされた妻は憤りを隠しきれなかったが、寛美はその表情を感じ取ることはできなかった。

「あなたも、お母さんに振り回されて大変ね。膝から下に紫斑が出ていたからもうすぐ死ぬわよ」

そう言い残すと、寛美は家族を吹っ切るように帰っていった。寛美の家族は帰っていったが、依然、義母の病室の廊下には、栄子の夫と義母、専門学校に通っている長女、高校生の次女と長男、それに妻と私が残っていた。時計はそろそろ深夜の十二時を回るころだったが、義母の死を認めたくないという強い思いが、私らを病院から離れさせなかった。妻は自分の予感が外れてくれればいいと思っただ。

「どうする？ みんなでこうしていても仕方がないし、『熱さえ下がってくれば』って、お医者さんも言っていたけど、誰かが残って、一度仮眠しにそれぞれ帰った方がよくない？」

妻の予感が外れるとなると、家族も長期戦に備えなければならない。

「じゃあ、私が残るから、みんな一度帰って。この分なら、今日はなんとかもちそうだから」

栄子は泣きはらした目をして、妻に言った。「そつ。じゃあ、私といたん家に戻るけど、お風呂に入って少し横になったら、また来るからね。お姉ちゃん、後よろしくね」

私と妻は、仮眠を取るために家に戻った。栄子からの電話で眼を覚ました時、まだ病院を離れてから三時間も経っていなかった。病室から寛美の家族が消えてから十二時間後、寛美の言ったとおり、義母はこの世を去った。

私たちが病院に駆けつけると、既に栄子の家族が遺体との対面を終えて廊下に立っていた。

「お疲れさま」

そう言ったとき、栄子は何も言葉にならず妻に寄り添った。

「お姉ちゃんこそ」

廊下に集まった栄子の家族は、一様に眼を赤く腫らしている。私が病室に入って行くと、看護婦が義母の遺体から医療器具を外していた。気道確保のための切開こそしていないものの、点滴や心電図の端子などが一週間の入院生活でつけられていたから、取り外すのも結構な仕事量である。看護婦は器具を外しながら、遺体の消毒を行っていた。酸素マスクが取り除かれると、義母の死に顔が現れた。それまでの苦しみが嘘のように取り除かれた安らかな死顔である。義母の肉体から何者かが立ち去った。私は祭りの後のような寂寥感を感じた。最後の数ヶ月間しか知らなかったが、義母の人生はお祭りのように賑やかなものだったろうと私は思った。看護婦は私たちに気づき、義母の遺体から離れた。「お母さん。辛かったねえ」

妻は義母の遺体に話しかける。私は初めて義母に合掌をした。病室から出るとあたりは

白々と明けてきた。私は、病室の義母の荷物を車に運んだ。病院のロビイを通って通用口から外へ出ようとした時、寛美たち一家が入ってきた。

私は両手に荷物をぶら下げたまま直立し、小さいが、しっかりと口調で、「亡くなりました」と一言いい、寛美に頭を下げた。

寛美は腕組みをして手を頬に当てたまま、私の前を通り過ぎ、エレベーターに入っていた。寛美以外の家族は私に気づいて、軽く会釈を返していたから、寛美に私の視線が感じられなかったはずはない。肉親の死の悲しみを共有しあう相手として、私は認められなかったのだらう。寛美は私の視線を感じたからこそ、私を無視して通り過ぎていったに違いない。

病院が紹介してくれた葬儀社と相談して、義母の通夜はその日の午後七時から、告別式は翌日の午後十一時からと決まった。

亡くなったその日にお通夜というのも忙しいが、これは自宅界隈で花火大会の交通規制がしかれて翌日にお通夜ができないことと、翌々日をお通夜にすると、今度は告別式

が友引と重なってしまふというふたつの事情を重ね合わせて考えた結果である。

暑い夏の時期、遺体を何日も家に置いておくことはできないし、冷蔵庫に閉まっておくのも忍びない。少しきついスケジュールだが、かえって慌しくお通夜と告別式をするほうが、精神的にも肉体的にも楽なのかもしれない。通夜と告別式は自宅で行われることになった。

「喪主は誰がやればいいんでしょうか」
妻は葬儀を取り仕切るミニミ祭礼の亀井に尋ねた。

「お母様のご遺族はどうなってますか？」

亀井はまるで自分の仕事为天職といった優しい表情で、目の前にある祭壇のパンフレットを閉じながら話し始めた。

「母は連れ合いに先立たれ、上の姉と下の姉はそれぞれ嫁いでいます。ですから、刈谷姓を名乗っているのは末っ子の私です」

「ああ、それなら喪主は妻さんでよろしいでしょう」

「でも、長女が喪主を務めるとというのが普通

なのは

「そんなことはないですよ。長女であること末っ子だろつと、名前を継いだ方が喪主になれるのが普通ですね。そうは言っても、男兄弟の場合は、苗字が結婚しても同じですよ。それならば、必ず長男が喪主をなさるかといえはそうとは限らない。たとえば、長男が大学を出られて東京で暮らされている。次男の方が故郷で家業を継ぎ、ご両親様と同居されている。そういう場合、かなりの確立で次男の方が喪主を務められていらつしゃいます」

「そうですね」

「刈谷さまの場合も、妻さんが喪主を務められ何の問題もございませんよ」

「はい」

「でも、もし大切になさりたい方がいらつしやるのなら、その方に葬儀委員長をお願いしたら如何でしょうか」

妻は亀井の言葉に頷いて、寛美に相談を持ちかけた。

「お姉ちゃん。お義兄さんを葬儀委員長にお願いできないかしら」

「そんなこと気にしないでいいわよ。お母さんのことは、あんたがみんなやっただから、最後まで自分の思う通りにやればいいのよ」

結局、義母・まきの葬儀の喪主は妻、葬儀委員長は立てられないことになった。

まきの葬儀には、ほとんどの親戚が集まった。昔、刈谷家の一族は品川区の大森近辺に住んでいたが、今ではそれぞれが関東一円に散らばっている。親戚の長老たちは、久しぶりに懐かしい顔に合えた嬉しさと、義母の死に対する悲しさの狭間で、泣いたり笑ったりを繰り返していた。その親戚たちの輪の中で、寛美は世間話のように語る。

私は母と折り合いが悪く、妹の妻に母老後の世話を押し付ける形になってしまったことを残念に思っている。そして、妻がまきの世話をしたこと感謝している…。

寛美は、妻の学生時代の友人関係の甲問客が来るたびに、「妹がいつもお世話になっております」と、深々と頭を下げた。

七月二十四日午前十一時から、義母刈谷まきの告別式が行われた。

雲ひとつない梅雨明け直後の初夏の日差

しは、参列者の喪服に容赦なく照りつける。焼けるような暑さの中で、告別式から火葬場そして、自宅に戻って初七日の法要と続いていった。

慌しいスケジュールの中だったが、妻は寛美と栄子と一緒に行動をともにして、父が亡くなって以来の家族の一体感を感じた。それまで、寛美と音信不通だったのは、遺産相続が原因だった。遺産といっても、両親が住んでいた約五十坪の土地と建物。それと有価証券が少しあるだけ。民法では、残された遺産を兄弟で均等に分割するのが原則である。だが、五十坪の土地を三つに分けても建蔽率の制限があり、家は建たない。土地を売り払い現金化するしか三分割する方法はないが、慣れ親しんだ土地を手放すことを亡くなった両親は悲しむに違いない。

妻は残された現金を土地を相続しなかった姉たちに渡し、それでも足りない分を自分の預金を足しても姉たちに渡すつもりだった。

「あなたはお母さんの老後の面倒を総てみてただから、あなたが住んでいる土地の権

利はあなたのものよ。民法では均等分割が原則だけれど、個人に対する寄与分というものがあるのよ」

そう、妻に助言する友人もいた。しかし、妻は姉たちの生活のことを思つと、姉たちに対して自分の母に対する寄与分を主張する気にはなれなかった。一方、生前の母は寛美が相続のことで妻を苦しめるのではないかと考え、遺言書をのこしていた。

母の書いた遺言書の内容は、財産の一切の処理を妻に任せるといったものだった。妻はその遺言をはじめて見た時、この遺言書を見れば、寛美は間違いなく逆上すると確信した。それは甲狀腺手術の影響を受けている寛美の精神にとって取り返しの付かないことになる。

たしかに民法には遺言という制度はある。しかし、実際には遺言書といえども、相続人の同意が得られなければ効力を発揮しない。そのことは、父の書いた遺言書に寛美が同意せず、長い間母と寛美の間が絶縁状態になった経緯から、妻は身をもって知っていた。

遺言書が重要に泣くのは、相続問題が家庭

裁判所に持ち込まれた時のこと。妻は、一家のことが裁判沙汰になることなど、想像しにくかった。そして、裁判になることを前提にして、母の遺言書がこの世に存在することが許せなかった。結局、妻は母の書いた遺言書を破り捨てた。

寛美は、母の葬儀の最中ずっと母の面倒をみてくれた妻に感謝していると、参列者に話していた。寛美の精神状態も安定して、だいぶ快方に向かっている。案外、ことはすんなりと決まるのではないかと、妻は思った。

四十九日の法要の後、親戚たちが帰ると、三人姉妹だけが集まって義母の形見分けが行われた。母が普段使っていた宝石などの形見分けが終わったあと、妻は税理士に作らせておいた義母の、財産目録を寛美と栄子に見せた。しかし、妻が遺産相続の書類を出したとたん、状況は一変した。

「あんたたち、わたしに感謝料をちょうだい」

寛美は母の遺産の他に、妻と栄子から感謝料を貰いたいと言っ。

「栄子。あんたが一歳で大きな病気をした時、お母さんがあたしに栄子のためにりんごを買ってきなって言うの。とつても寒い冬の夕方だから、あたしは行きたくなかったんだけど、お母さんがそう言うものだから、仕方なくあたしはお使いに行ったわよ。かじかんた手でお母さんにりんごを渡したら、お母さんはそれを栄子に擦って食べさせた。それなのに、わたしには少ししかくれなかった。わたしはそのことを今でも恨みに思っている。それは、あんた栄子のせいよ」

寛美はそれから四十数年の間に刈谷家で起きたひとつひとつを細かく話し、その出来事の中で、いかに自分が傷ついたかを訴えた。妻は、姉が遙か昔のことをこれほどまでに正確に記憶していることに驚いた。そして、何で数十年前のことが、これだけ憎しみをもって語られるのか、不思議だった。

十年も経てば、家庭内のいざこざなど、笑い話になるものだ。それに、栄子が病気になるのは一歳の時のことで、その責任を栄子に取れというのは、狂気を越えて滑稽でもある。

結局、相続とは関係のない両親と栄子と妻に対する恨みを寛美が訴えるものだから、遺産相続の話はまったく進まない。

「あたしはお母さんの葬式の喪主になりたかったんだ」

寛美は妻に毒づいた。

「あんたはたまたま離婚して、刈谷姓に戻ったから喪主ができたんだ。あたしだって、去年離婚するはずだったんだ。そうすれば、あなたなんか喪主はさせなかったんだ」

「あたしは、私さんが刈谷を名乗ってくれてっというから、刈谷姓なのよ……」

このままでは、三人姉妹の傷が深まるばかりだ。

栄子の夫の昭と私、そして、寛美の夫の仁志は隣の部屋で、三姉妹の会議の様子を伺っていた。しかし、三時間も経つと、さすがに自分の妻の聞くに絶えない発言に業をにやしたのか、仁志が会議の中に割って入った。義母の相続問題は何の結論も見出せぬまま、その夜は散会することになった。

第五章：霊能者を探せ

四十九日忌から一週間が経った。

妻は寛美の精神状態があれからどうなったか気になっていたが、彼女の病気のことを考えると、精神的に治まるまで、静かに待つしかないだろうと思った。遺産相続の申告期限は六ヶ月である。その間に相続手続きをしないと加算税がつく。まだ、三ヶ月以上話し合いの時間は残っている。しかし、四十九日の法要のような寛美では、これ以上、姉妹が話し合っても結論が出るとは思えない。そうこうするうちに数ヶ月が経ち、相続税の申告期限が迫ったある日、家庭裁判所からの召喚状が妻に届いた。

寛美が弁護士を立てて、家庭裁判所に刈谷まきの遺産相続について異議を申し立てたのだ。訴えられたのは妻と栄子。私は苗字は変えたが、まきの養子ではなかったので訴えられなかった。

家族のことが裁判所で争われるのは褒めた話ではない。裁判所で争われるといっても、ドラマに登場するような、被告席があつて、

検察側と弁護側が争うのではない。この場合、訴訟ことは調停の場で争われることになった。調停員には判決を下すような権限はないが、第三者の中立的な立場の人間を介して行われる話し合いは、血を分けた姉妹の泥仕合を避けられる。妻は寛美が自分を訴えてくれたことを内心感謝していた。とはいえ、これから法廷で争うことは妻にとっても、寛美の精神状態にとっても辛いことに違いはない。

妻はこの時期、定期検診に通っていた。

「あなたを検査して得られた検査値は四。この検査値が五に何たら癌が発症したことになります。つまり、今あなたはいつ癌になってもおかしくない状態です。きつと、お母さんの中年の看病疲れが出たんでしょ？」

妻は母の世話をしなければならぬから自分が病気で倒れることはできなかった。医者に入院をすすめられたことも何度もあった。だが、その度にそれを拒み、薬だけで凌いできた。

「この際、ゆっくり入院してみますか？」

母の死を知っている医者は妻に提案した。しかし、裁判を上手く切り抜けなければ、家

も土地もなくなって住宅ローンの借金だけが残る。

「私が癌かもしれないこと、寛美姉ちゃんがおかしくなったことには同じ原因があるの」

「何だよそれ」

私が予想もしないことを妻は口走る。

「刈谷家にはいろいろな因縁があって、それが私の体にも、お姉ちゃんの影響にも影響しているの」

今自分たちが置かれている状況が辛いこととは分かる。だが、それが先祖の因縁のせいだといわれても、私にはとつてい納得することはできない。

「因果応報って言いつのかな。先祖からの霊的な因縁があるのよ」

「でも、だからってびびりすぎやいいんだよ。墓参りだったら、ちゃんとやってるじゃないか」

「ずっと思ってたんだけど、誰か信頼できる霊能者に私を見てもらわなければいけないと思ってるの」

「それって、テレビに出てる宜保さんのこ

と？」

「そう。あと、尼さんの格好で出てくる人もいたわよね」

「おいおい。なんかそれって、恐山のいたことに物を聞くよつで、なんだか嫌だな」

「インチキ臭い霊能者も多いけど、尊敬できる、信頼に足る霊能者はいるのよ」

「やつぱり、宜保さんか……」

「そつね。宜保さんに見てもらえれば一番でしようけど」

ちようどその頃は、テレビでは臨死体験のドキュメンタリー番組がつくられたり、月刊誌にも臨死体験の連載があったり、ちよつとした臨死体験のブームだった。私が勤めていたプロダクションでも、このブームに乗かって臨死体験のセルビデオの制作が始まっていた。

私はその作品に直接携わることはなかったが、私の直属の上司の蔵原がプロデューサーだった。

「だったら一度、撮影現場に顔を出すとい

い」

アシスタントとして臨死体験ビデオの現場に付き合った。

セルビデオのタイトルは、『湯原トクオの臨死体験の世界』と予定されていた。

湯原は日本霊能者学会の主宰者である。お盆が近くなると、民放各局は心霊や会談を扱った番組を組むが、私はそんな番組の良心的な霊的現象の解説者として重宝がされていた。

この作品のディレクターは、臨死体験者の取材と臨死体験の再現。といっても、もう一度臨死体験をしてもらうことはできないから、再現ドラマ化。そして、研究者のコメントや実験で六十分ほどのビデオを構成させようと考えていた。

レンタルビデオ店に並ぶことを目的にしたセルビデオの予算は、テレビ番組とは比べ物にならない程安い。予算はそのまま作品の内容に関わってくる。そんな低予算作品に箔をつけるのが、お茶の間でおなじみの湯原トクオの役目である。

私が加わった撮影では、湯原氏と臨死体験の研究で世界的に認められている新進気鋭

の学者・ミハエル・ラップマン氏との対談だった。

ラップマン氏は、癌の末期患者といかに接するかというターミナルケア(末期医療)に宗教者として立ち会つ中から、臨死体験という奇妙な現象があることを知り、その研究に手を染めていった学者である。臨死体験をした患者は、その殆どが体験以後死ぬことが怖くなくなったと告白している。

だとすれば、ターミナルケアの現場で臨死体験から類推される死後の世界を語れば、患者を勇気づけることができるかもしれない。臨死体験が単に脳の中に起きる現象に過ぎないのか。それとも、死後の世界の存在を証明するのか。それが臨死体験の最大の課題である。

ラップマン教授は、臨死体験が死を宣告された人を勇気づけられる事実が重要であり、臨死体験から死後の世界を論じることはできないと考えていた。私の研究分野はあくまでも人間が生きている世界であって、死後の世界ではない。死後の世界について私見を述べることはあっても、学者としての研究の対

象にすれば、自分の立場が危うくなることを私は理解している。

一方、湯原は臨死体験を数ある霊現象の中のひとつと捉えている。私が臨死体験に興味を覚えるのは、薬物の影響や脳のダメージを科学的に解析することではなく、一度死ぬことになった人間がもう一度生きることになった原因となるその人の因縁や宿命だった。とはいえ、そうした考えを一般に普及するためには、科学的な分析が欠かせないことも、私は十分承知していた。

湯原は一般的に認知され始めた臨死体験を糸口に霊的世界に話を持っていくと語る。だが、ラップマン教授は湯原氏の企てを感じ、巧妙に話題をそらす。結局、臨死体験から霊的世界の本質に迫るといふ対談の目的は遂げられなかった。

湯原とラップマンはお互いに社交辞令を述べると、あっけなく対談は終了した。「いやあ、大学の研究者なんて所詮あんなものだよ」

ラップマンを見送った湯原はディレクターにつぶやいた。

「先生。こんな対談を設定して申し訳ありませんでした」

「いいんだよ。私なんか、こういう嫌な思いは日常茶飯事。こんなことにめげたら何もできません。こんなことをしている間にも、霊的なことで真剣に悩んでいる人は日本中に沢山いるんですから」

湯原は多くを語らなかった。

プロデューサーの蔵原は湯原と出演料の交渉をするはずだったが、この雲行きでは憚られる。

「先生。これはうちの会社の刈谷っていうんですが、ぜひとも先生に信頼できる霊能者を紹介して欲しいって言ってるんです」

蔵原に押し出されて、私はおらずおらずと湯原に名刺を差し出した。

「実は、宜保さんを紹介して欲しいんですが」

「宜保さんねえ。彼女のことはちっちゃい頃から知っているけど、この頃は有名になり過ぎちゃったからねえ。僕も会う人ごとによく頼まれるんだけど、私女は職業霊媒師ではないし、最近は一切霊視を受け付けていないよ

うなんだ」

「そうですか。先生のお力を持ってしてもダメですか…」

「そういわれてもねえ」

「ところで君。一体どういう相談なのかね」「先日、妻が癌かも知れないと医者から宣告されまして、それから、妻の姉が半年前になくなった義母の遺産相続の問題で家庭裁判所に訴えまして…。それで、妻が『これは何か霊的な因縁が原因に違いない』と申しまして」

「そう。それは深刻だね。でも、まだ奥さんが癌と決まった訳ではないだろう」

「まあ、そうですが…」

湯原氏は腕を組んだまま天井見上げた。

「刈谷君といったかな」

「はい」

「霊能者を紹介してくれと言われても、実はこれは大変難しいことなんだ。君はよくテレビに出ている宜保さんの名前をあげたけど、有名だからといって訳じゃない。たとえば、人が病気になるたしよ。歯が痛い人は歯医者に行くし、眼を病んだ人は眼医者に行く。

世の中に、歯が痛いのには眼医者には馬鹿はい

ない。別の言い方をすれば、歯医者には眼の悪い患者は治せないってことだ。霊能者についてしまったく同じことがいえるんだ。霊能者にも得手不得手がある。神秘的なものになまじっか興味を持った信じやすい人ほど勘違いしやすいんだが、世の中に万能な霊能者なんていないんだよ。なのに、ひとりの霊能者がブームになると、その霊能者だけがもてはやされる。宜保さんは確かに眼を見張るほどの霊能力を持っている。でも、その使い方が重要なんだ。その使い方によって、霊能者は霊能力を失っし、生命の危険を伴う。これは霊能力の力を借りる側も同じ危険を伴うんだよ。いまの宜保さんはテレビに出ることが自分の霊能力を使うにふさわしいと思っ

ているんだと思う。だから、僕は今の宜保さんをそつとしておいてあげたいんだ。分かるかな、君」

「は、はい…」

純未知の分野の大家の言葉は私の理解を越えていたが、マスコミにさらされて窮屈な思いをしている宜保さんのことを思う私の

気持ちは分かった。

「ちよつと遠いんだが、京都に白桜志津という霊能者がいる。この先生は共善会という団体を組織してスピリチュアルコンサルティングを行っている。そこを訪ねてみるのが一番いいかもしれない」

「スピリチュアルコンサルティング？ それって新興宗教か何かですか」

「新興宗教ねえ。いやあ、そんなたいしてもんじゃないよ。その先生に会ってみりゃ分かるけど、気さくな下町のおばちゃんって感じだ。大丈夫、湯原トクオの紹介する霊能者に間違いはない」

湯原は自分の名刺の裏に共善会へのメッセージと電話番号を書いて私に差し出した。

湯原と会った翌日、私は共善会に電話を入れた。

「東京の刈谷私と申しますが…」

そして、自分の妻の状況を説明し霊視を受けた旨を電話口に出た男に伝えた。

「先生の霊視は週に二回行われているんですが希望者が多くて、スケジュールは一年先

までいっぱい詰まっているんですよ」

「実は私、日本霊能者学会の湯原トクオ先生に紹介を受けてお電話を差し上げているんですが、何とかならないのですかね」

「そういうことをおっしゃられても、はっきりいって困ります。現在も何百人もの方がお悩みを抱えながら白桜先生に霊視していただけ、日を待っているんです。会員の方を分け隔てしないというのが先生の方針なんです」

「分かりました。では、どうすれば先生に霊視していただけるんですか？」

「はい。それでは、こちらから入会のご案内を郵送いたしますので、「ご住所を」

それから数日経って、共善会から入会案内の書類が郵送されてきた。B5版につくられたパンフレットには次のような内容が書かれていた。

『次の事項に思い当たる方は、ぜひ一度我が共善会にご相談ください。

原因不明の病氣、精神的いらだち、自閉症、事故や病氣が多い、幻覚・幻聴に悩まされる。

夫婦間・親子・兄弟の不和。三角関係。夫や妻の浮気……など。

つまり、白桜志津は病氣や事故、争いごとなど、人間を苦しめる総ての災いから人を救うことができるというのだ。

ページをめくると、今までに白桜が予言した中した事件や事故が並べられていた。日航機の墜落事故や大島三原山の噴火など、誰でも覚えている天災や人災があげられている。ページをめくると白桜の霊視によって、不幸から脱することができた共善会の会員の手記が顔写真入りで紹介されている。霊視と予言がどのようなつながっているのだろうか。これでは、まるで白桜志津という霊能者はスーパーマンだ。

私はパンフレットの文字を眼で追いながら、とんでもないペテンに会うのではないかと不安になった。最終ページには、次のような表が載っていた。

共善会の入会金 金二万五千元

月会費 金 一千元

霊視料(一回) 金五万円

「おい。霊視ってこんなに費用がかかるのか？」

「そうかしら、一回五万円なんて安いほうよ。こっつて良心的だわ。こういうのはお志といって霊視の金額を明らかにしない霊能者も沢山いるのよ。だから、藁にもすがる思いで、霊視をしてもらいたい人は何百万円と霊能者に支払うの。五万円は私たちにとっては高いかもしれないけど、それで信頼できる霊視が受けられるなら、けっして高くはないわ」

「そうかな」

私には妻の金銭感覚に納得できない。

「考えようによっちゃ、貧乏人もお金持ちも同じ金額で霊視を受けられるなんて平等でいいじゃない」

世の中には興信所に何百万円も払って夫の浮気調査をする主婦がいる。それと比べるなら安い。勿論、霊視で本当のことが分かるとしての話なのだが……

癌で死ぬかもしれないこと。借金が残ったまま、住む家を追い出されることを考えれば、

それくらいの出費は仕方ないことか。問題はこの共善会を主宰する白桜志津が湯原トクオが言うように本物の能力を持っているかどうかだ。湯原は、「霊能者には得手不得手があることを忘れないように」と言っていた。しかし、その彼が大丈夫といった共善会のパンフレットを読むと白桜はまるでスーパーマンのようだ。私はスピリチュアルな世界について、次第に、その存在を否定しないまでに理解を深めていた。だが、共善会に入会するかどうかについてはきわめて懐疑的だった。

妻はボールペンで申し込み用紙に記入していく。

「おい。本当に申し込むのかよ」
「申し込むわよ。だって、白桜先生って湯原さんが間違いないって推薦してくださったんでしょ」

「それはそうだけど…。おい、本当に共善会に入るのか？」

「霊視を受けるためには、とにかく入会することが前提なんだから当然でしょ。大丈夫。もし、おかしな宗教団体だったとしても、そ

れは一度霊視を受けてみれば分かるわ」

妻は自分の名前と生年月日を書類に記入すると、その日のうちにポストに投函した。

申込書を投函して一週間が過ぎた頃、共善会から電話がかかってきた。電話をとったのは私である。

「来週の日曜日に白桜先生の霊視が決まりましたが、刈谷さんのご都合はよろしいでしょうか」

一年先でないと受けられないという白桜志津の霊視が一週間後と聞いて私は素直に喜んだ。これなら裁判が始まる前にすべて解決できるかもしれない。私は妻のスケジュールも聞かずに、二つ返事で出席を表明した。しかし、受話器を置いてから、後悔しはじめた。それは、妻のスケジュールも聞かずに霊視を承諾したからではない。

一年先までスケジュールが詰まっているという霊視者が、こちらが申込み書を送ったとたんに、どうして一週間後に霊視が決まるのだろう。もしかすると、霊視のスケジュールはガラガラで、霊視の料金を高くするため嘘をついたのではないか。インチキ霊媒師

ならやりそうな手口だ。

買い物から帰ってきた妻に、霊視が決まったことを告げる。私はふつふつと沸き起こってきた共善会への疑問も打ち明けた。

「霊能のある人なら、申込書の名前と生年月日を見れば、だいたいのことは分かるのよ」
「霊能者って、霊の世界を見るだけじゃないのか」

「霊っていうのは死んでる人だけじゃない。生きてる人も持っているの。よく生き霊っていうでしょ。きっと霊能者の先生には私たちの切羽詰った状況がすべて見えているのよ」

妻の解説を聞いても、私の疑問は増すばかりだった。

人間は亡くなると霊界に行く。近親者の葬式に出る度に、そのことを確信しているのかのような別れの言葉に接する。

「あの世でゆっくりと休んでください」
「もうじき私も行きますから、あの世で待っていてください」

真剣に死者に語りかける年長者の言葉を聞いて、「あの世なんて存在しない。そんな

第六章：霊視

のは作り話さ」と、言い切れる人はいない。その理由を、年長者への優しさゆえに公言できないに過ぎぬ。と、考察する人もいるだろう。現代の最先端の科学であっても、あの世の存在を誰も確かめることはできないし、学校教育は死んだら後は何も無い。宗教とは思想体系のひとつであり、たんなる物語・ストーリーだと教えている。それにもかかわらず、世の中のほとんどの人が、体感のどこかであの世を感じている。

だから、私もあの世の存在、霊界の存在を否定できないと思い始めている。だが、どうして京都にいる人間が手紙を見ただけで、東京にいる人間のことが分かるのだろうか。霊視というと、恐山のイタコのような世界を思ってしまう。だが、実際の霊視は、マジックやスプーン曲げと同じジャンルに含まれるのかもしれない。と、ふと思った。

二月に入った最初の土曜日、東京には雪が降った。これでは新幹線のダイヤが乱れて、京都にたどり着けないかもしれない。私と妻は予定の一時間以上前の列車に乗ることにした。

「これは珍しく積もりそうだ」

私はスノートレニングシューズを履いて家を出た。

私たちを乗せた新幹線は、東京駅を定刻より十分程送れて出発した。新幹線は雪が舞い散る東京を恐る恐る走っていたが、小田原を過ぎる頃になると、雪も雨に変わったため、いつものスピードを取り戻した。京都駅にいた時には薄日がさしている。私はスノートレニングシューズを履いてきたことを後悔した。

新幹線を降り、みやげ物屋で賑わうコンコースを抜け、私鉄に乗り換えたのは正午を少し回った頃。私鉄に十五分ほど乗ると目的の駅で降りる。私は地図を見ながら歩き出した。駅前の商店街を抜け、バイパスを右に曲が

り暫くすると、大きく共善会と書いたコンクリートの三階建てが見えた。畑の中に忽然と存在するその建物に私は一瞬とまどった。あたりに建物がないから、この中で悲鳴を発しようとする誰も助けに来てはもらえぬ。

「町工場のような建物だな。大丈夫かよ」

「いいんじゃない。建物にお金をかけてないのは好感が持てるわ」

私は恐る恐るインターフォンのボタンを押した。

「どちらさまでしょうか」

「東京から来ました刈谷です」

「いらっしやいませ。どうぞ、お二階までお上がりください」

階段を昇って二階に上がると、やせぎすの体に作務衣をまとった下地が現れた。

「刈谷さん。遠いところお疲れ様でした。新幹線はどうでした。混んでましたか？」

「いえ。それほどでも」

私は待合室の壁一面に張られている説明図を好奇心いっぱい眺めた。

「ここに霊視を受けるにあたって守っていただきたい事項が貼られていますのでよ

く読んでおいてください」

背後から下地が語りかける。

壁の一番右側には、霊視の原理の説明図が貼ってあった。霊能者に向かって相談者の姿があり、相談者の頭上には霊界という大きな円が描いてある。隣には、霊障。つまり霊によつて起こる障害について、その原因の種別があげられている。

不成仏霊と因縁霊。不成仏霊とは成仏してない霊。つまり、亡くなっても彼岸に行こうとしない霊のこと。因縁霊とは、生きている人にとつてかかわりの深い霊のことである。それらが自分たちの存在や思っていることを原因にして起こるのが霊障だという。

霊障の原因となる霊が成仏し、現世から離れ私岸に行けるように努力するのが霊能者の役目であるが、相談者も霊能者に協力しなければならぬ。

霊能者に協力すると言っても、それは霊的能力を持たぬ人にもできること。別に難しいことではない。具体的には、素直な気持ちになること。雑念を取り去ること。そして、霊能者のことを絶対に疑わないこと。

霊能者のことを疑ってはならぬ。などいえば、詐欺師が自分を疑うな。というふうなもので、私は懐疑的な気持ちになった。

掲示には、霊能者を疑つと、相談者に危険が及ぶと書いてある。勿論、霊能者にも危険が及ぶ。と。

霊視によつて生じる危険とは一体何なのだろう。私にはまったくイメージできない。

「刈谷さん。時計はデジタル時計ですか？」

「いえ、アナログ時計です」

「それならいいんですけど」

「なんでデジタル時計はいけないんですか？」

「デジタル時計って機種によっては時報でピッピッって鳴るでしょう。霊視の最中にああいふ電子音が鳴ると、先生の精神集中が乱れて、とても危険なんです」

「危険って一体どうなるんですか？」

下地は私の懐疑的な気持ちを感じたのか、少し不機嫌になった。

「白桜先生は、霊視に自分の命をかけていらっしやいます。その命を懸けた霊視が妨げられるのですから、命が危なくなるんです」

「そうですか。僕もクラシックのコンサートなんかで、あのピッピッっていう電子音が鳴ると、無神経なやつがいるもんだって腹が立ちますよね」

「それでは、しばらくお待ちください」
少し不機嫌になったことを床を叩くスリッパの音で感じさせながら、下地は待合室から消えていった。

これから霊視が始まる緊張感のためか、私は何度もトイレに立った。待合室とトイレの往復をしている間に、いつの間にか二組の相談者が待合室に現れた。その相談者は、二組が二組とも、精神と肉体に障害を受けている子供をつれていた。

そうこうするうちに三十分が過ぎ、下地が呼びに来た。

狭い階段を昇って行くと、「霊視室、関係者以外絶対立ち入り禁止」という貼り紙が眼に入る。霊視室の入り口で私と妻を迎えたのは、共善会ナンバー2の神州専務である。神州は、百キロを越える巨体を修験者のような衣に包んでいた。

「ご主人が立会人で、霊視をお願いされてい

るのは奥様ですね」

私が頷くと、神州は奥の間に二人を招き入れた。

奥の間は、十六畳の広さがある。

部屋の奥には祭壇が作られ、蝋燭がともり、榊が飾られている。祭壇の前には小机があって線香がたかれていた。祭壇といっても仏教のようにご本尊があるわけではない。かといって、神道のように鏡があるのでもない。ただ、梵字が書かれた掛け軸が下がっているだけだ。掛け軸の両側に無数のお札が並べられている。すでに白桜は祭壇に向かって座っていた。暗闇の中で白桜の長い黒髪が印象的だ。神州の指示によって、妻は祭壇に向かって正面に、私は白桜と妻を横から見ると、白桜は祭壇に背を向け妻と向かい合った。

白桜は私がいままで見たこともないような長い数珠をギリギリと鳴らしながら、合掌した。妻は手を正座した膝の上に置き、頭を垂れて白桜に向かっていた。

白桜は胸の前で合掌していたが、暫くするとゆっくりと合掌した手を頭上に持ち上げ

た。持ち上げた手はゆっくりとしたに降ろされると同時に広げられる。広げられた両手の間には、数珠がピンと張られている。そのしぐさはまるであや取りのようだ。

霊能者は両手に連なる数珠を通して、妻の姿を見ている。白桜の両手は、妻の輪郭に沿ってゆっくりと降りていく。これが白桜の霊視のやり方である。数珠を使って相談者の体をトレースする。その仕組みは発光体を走らせて画像を得るコピーの機械に似ていた。

霊視室の明かりは祭壇の蝋燭しかない。線香の煙は蝋燭の明かりに反応して、紫色の筋を幾重にも作り出している。白桜は祭壇の蝋燭を背にしているため、蝋燭の光が作り出す筋がまるで、後光を纏っているように私には見えた。

「友美さんでしたっけ」

「はい」

「あなた、とっても緊張してるでしょ」

「はい、……はい」

「ま、それは初めてだから仕方ないでしょう。でも、あなたがもっとリラックスしてくれなくっちゃ、私には何も見えないのよ」

白桜の言葉に妻に一層身を硬くした。

「まあまあ、別に取って食おうっていうんじゃないんだから。さあ、気を楽にして」

白桜は妻に近寄ると、妻の肩を両側からつかんで上下させた。

「はい、力を抜いて深呼吸」

「二、三回深呼吸をすると妻の緊張が解けていく。」

「はい、その調子。それじゃ、もう一回やりましょう」

白桜は祭壇の前に座りなおすと再び数珠をかき鳴らし、合掌した手をゆっくりと頭上から下げていく。再び、彼女は両手をひろげたまま、半眼で妻に相対した。ピンと張られた数珠の向こうに霊視者は何を見ているのだろうか。霊視室は蠟燭の明かりだけの薄暗い世界である。だがそこはお化け屋敷のおどろおどろしい暗さとは違い、緊張感がみなぎっている。

私には何かを見ることは勿論何が起こっているのか想像することさえできなかった。白桜は、目の前の何かを見ているというよりも、全身の神経を使って、何かを捉えようとして

している。

健常者が考えるほど、盲人は日常生活に苦勞していないという。何故なら、彼らは視力以外の感覚器官を十二分に働かしているから。視力を除いた感覚には、第六感といわれる霊感もあるだろう。健常者は視覚に頼るあまり、その他の感覚を鈍らしてきた。霊能者に視覚障害者が多いのも、そのことと関係があるのかもれぬ。霊感を働かせる場合、視覚情報は雑音でしかない。得体の知れぬ空間です過ぎす沈黙の世界は、時間の概念を忘れさせる。風の強かったこの日、窓が突風に煽られてガタガタいつている音だけが、私をうるうじて現実の世界に押しとどめていた。

「はい」

白桜が黙想していたのは五分に満たない。

白桜の声に神州は反応して電気スタンドを点灯した。神州は霊視の進行係兼記録係である。彼は大きな手には不似合いな小さな紙の束を取り出した。それは新聞のチラシでつくったメモ紙である。最近では両面印刷のチラシも多いからメモ紙をつくるのも大変だろう。

「とつても珍しいことが起きました」

白桜はゆっくりと、そして、しっかりとした口調で話し始めた。

「あなたを霊視していたら、私は湖の底に沈んでしまいました。こんなことは私もいるいるな人を霊視してきましたが初めてです。湖の水はとても冷たく、私の体は芯まで冷えてしまいました」

「実は私も先生に霊視していただいている間、寒くて寒くて体の震えがとまらなかつたんです」

「そうですね」

電気スタンドの明かりが灯っているとはいえ、霊視室の中は薄暗い。その暗さの中で、妻は臆せず白桜に話しかけた。

「そちらにいらっしやるのはご主人ですよね」

霊能者の言葉に私は身構えた。

「霊視に立ち会われるのは初めてでしょう」

「あ、はい」

「それでは説明してあげましょう。霊視というのは、映画のように、つまり、暗闇でスクリーンを観るように、いろいろなものが見え

るんです。それが、あるときは亡くなった人の姿だったり、お墓だったりする」

「そのスクリーンはいつたいどこにあるんですか？」

私は恐る恐るたずねた。

「ご主人はチャクラというのをご存知ですか？」

「何ですか、そのチャクラって言うのは」

「チャクラとはインドのヨーガでよく使われる用語ですが、簡単にいえば頭のてっぺんとでもいうんですかね。この場所を通して体のエネルギーが外に流れて行くんです。普通、霊視の時に神経を集中すると、そのチャクラに映像が現れるんです。しかし、あなたの、奥さんの場合は違った。私があるまま湖の底に沈んでしまった。まるで、映画の中に入ってしまったような感じだった。ところで、ご主人にはラップ現象は聴こえましたか？」

「ラップ現象？」

「先生。ラップ現象は盛んにありました」

神州は私が現象を知らぬことをなじるように言った。

「そうでしたねえ。ご主人、ラップ現象とは

天井がパチンパチンと音を立てる霊現象のことを言うんです」

「友美さんは聴こえましたか？」

「はい」

妻はラップ現象の存在を以前から知っているようだ。

「そうですね。それでは、こういうことも珍しいから、もう一度やってみましょう。ご主人、よく見ているんですよ。今日はひよっとして、ポルターガイスト現象が見られるかもしれない。神州、しっかりと記録しなさい」

神州が電気スタンドを消すと、白桜は再び数珠をかき鳴らし、霊視を再開した。

ポルターガイストといえば、ステイプン・スピルバークが製作した映画のタイトルでもある。あの映画の中では、異次元への扉がぱっくりと開き、悪魔が現れて少女を別の世界に引きづり込もうとした。

本当に嵐のような出来事が目の前で起き、ポルターガイストに対して白桜がエクソシスト(悪魔祓い)の役を演じるのだろうか。

突風に煽られて、依然窓はガタガタと鳴っ

ている。私には、窓が作りだす音とラップ現象の音を区別することはできない。

二度目の霊視も五分ほどで終了した。

「やはり、何も起きませんでしたね。ポルターガイスト現象が起き来るなんて口にするのと、霊の方でもおっかながって何処かへ隠れてしまうものなんです」

白桜は少し残念そうに、数珠を懐にしまった。

「友美さん。二度目の霊視でも、やはりあなたは特別な因縁を持って生まれていらつしやるのが分かりました。それ水の因縁。私は今、もう一度冷たい湖の底に沈んで体が震えるほどに凍えてしまいました。今見えたことからストーリーを作ろうと思えば、それは霊能者でなくてもできるとも簡単なことです。たとえば、お墓がダム建設か何かで水の中に沈んでいるとか、もっともらしい話はいくつも拵えることができます。しかし、私はそういつつくり話は嫌いです」

白桜の物言いは、確かなものを感じさせる。

「私は、あなたのために行をします。行をするうちに、からまりあつた意図が解けていく

ように、次第にいろいろなものがはつきりと見えてくる筈です。あなたもご主人と協力して、一生懸命にいろいろなことをやってください。霊視の結果が少し物足りないと思うかもしれませんが、これが事実なんです」

「いろいろって、一体何をやるんですか」

「そうですね。まずは、ご先祖で水が原因で亡くなった方がいらっしやらないか調べてもらいなさい。霊障を起こすのは、その多くが百年前までに亡くなられた方の因縁です。百年というとても昔のことと思うかもしれませんが、そんな昔のことではないんです。たとえば、今七十歳の人が二十歳の時に、七十歳の人が二十歳の時にの話聞いていたとすれば、百年前の話は難なく語り継がれるんです。百年前のことも、今生きている人に詳しく話を聞けばそのいきさつが分かるはずですよ。それから施餓鬼をやってもらいましょう」

「先生。もう施餓鬼ですか？」

神州は、共善会に初めて霊視にやってきた人が、すぐその後施餓鬼をする例がなかったのとまどった。

「大丈夫。この人はしっかりしているから。それじゃ、あとで詳しい施餓鬼のやりかたを専務から聞いてください」

「分かりました」

妻は白桜の言葉に頷いた。

「では、これでよろしいかな」

「あの……」

「何かあるのかな、ご主人？」

「いえ、実は、妻は一ヶ月後に家庭裁判所の調停を抱えています、医者からも癌かもしれないと宣告されているんです。このままでは、財産も命もなくなってしまっというから、わざわざ京都までやってきたのに、湖の底が見えるって言うだけなんて……」

「ご主人。何か考え違いをされているようですね」

白桜のいままでとは比べ物にならない鋭い語氣に私は縮みあがった。

「確かにご主人がここに来たきっかけは、目の前の不安・問題を解決するためかもしれませんが、しかし、それはきっかけであって目的ではないのです。共善会のスピリチュアルコ

ンサルティングの目的は、生きている人間の不幸や不安を解消させるなどという目先のことではありません。人間の不幸は結果であって、けっして原因ではない。共善会の白桜志津が目指すのは、霊の因縁を解くこと。つまり、不成仏霊を成仏させ、幽界から霊界に送り出してあげることです。そのことがきちんと出来たら、生きている者の幸福など、自然に後からついてくるものです。最近では、怪しげな霊能者がテレビに出て除霊を行っています、あれほど恐ろしいことはありません。憑依されている人から無理やり不成仏霊を取り除いても、居所のなくなった例は別の人に憑依するだけです。これでは世の中の不幸を増やすばかりで、けっして世の中のためにはならないのです。必要なのは、不成仏霊を説得して光の方向に進んでもらうこと。そして、生きている者が不成仏霊に憑依されないような清らかな生活をするということです。世の中には霊に憑依されると、やれ、霊媒体質だ、悪霊だといって騒ぐけど、根本の問題はその人が正しい行いを普段から行っていたかどうかなんです。それさえやっていけば霊

に取り付けられることなど、絶対にありません」

私は霊能者の迫力にたじろいだ。

「ご主人。今日は奥様の霊視をしました。ご主人にも同じ因縁が見えています。その因縁では、男女が交互に発狂していて、今度は男性の番です」

「それじゃ、次は私が狂うんですか」

「いや、そう決まった訳ではありません。普段から清く正しい生活を心がければ、そういうことにはならない筈です」

確かに私には五年ほど前にノイローゼで自殺した伯母がいる。その前に発狂した親戚を知らないが、次に狂うのが自分だと言われると、私は妙に納得した。

「ご主人のご出身は北陸ですね」

「何故分かるんですか？」

「ご主人を見てみると、後ろに日本海の岩に叩きつける荒波が見えるんです。ご主人。墓参りはちゃんと行ってくださいな」

白桜に北陸と言われて私は驚いた。

共善会に送った申込書には、私の父が福井県出身とは書かなかつたし、東京生まれの私

の喋り方には福井弁のかげらさえない。妻ならまだしも、白桜が私の出自を事前に調べたとは考えられない。私は義母が亡くなる十日前ほど前に福井県の祖父の眠る三沢家の墓と祖母の実家の垣坂家の墓に参っていたが、それから一年近く経っている。

白桜には日本海が見えたというが、霊視では映画のように見えるのだとすれば、日本海には日本海と書かれた立て看板があつたのだらうか。それに、三沢家の墓も垣坂家の墓も日本海が見渡せる場所にはない。そう思ったとき、私の脳裏に父親から聞いた平貴家のことが浮かび上がった。父方の先祖の平貴家は江戸時代中期から明治の末年まで北前貿易で栄えた名家である。北前貿易は日本海を中心にした航路貿易のことだが、平貴家の場合は北海道との貿易・松前貿易を主にしていた。

いまの北海道、当時の蝦夷・松前藩で海産物を買ひ上げ、上方の京都や大阪で売るといふ商売だ。もちろん、空荷では商売あがったりなので、上方で仕入れたぜいたく品を東北や北海道で売る。

私の曾祖父の寿太郎は、その貿易船の船頭つまり、船長だった。私が操つたのは長幸丸という乗組員が十五人ほどの弁才船である。平貴家は、観光名所として知られる東尋常から南に五十キロほどある小さな入り江に代々屋敷を構えていた。松前から運ばれた昆布や肥料はその小さな入り江から陸路、京都や大阪に運ばれて行く。荷揚げのもうひとつの港が敦賀であり、そこが私の父親の故郷だった。時代がすすむと松前貿易は陸路を使わず海路のまま大阪に荷を運ぶようになり、明治になると、平貴家の本家も兵庫県の芦屋に移し、この入り江の村はいつしか忘れられていく。

私の曾祖父は嫡流ではなかったから、三沢を名乗っていた。私は壮年になると船を降り、敦賀で海産物商と塩の専売商を営む。敦賀の豪農から養子に入った祖父も塩の販売を引き継いだ。三沢家は嫡流ではなかったが、平貴家の中で冷遇されたのではない。平貴家は財閥といってよく、三沢家も一族の商いの中で活動していたのである。

私は少年時代から幾度となく敦賀に行つ

ているが、一度も平貴家の墓に参ったことはなかった。敦賀から二十キロほど離れた入り江の村にその墓はある。村はかなり小さいというから、平貴家の墓から日本海が見える可能性は高い。

私のイメージの中で、白桜が見たという日本海の岩と旅行番組でよく見かける東尋坊の岩場が重なった。

「友美さん。まだまだ先は長いようですが、一緒に頑張りましょうね」

白桜の問いかけに、妻は大きく頷いた。

霊視室から私と妻が出ると、神州はガラス障子を開け、ふたりを事務所に招き入れた。座卓を間に三人が向き合って座ると、神州は部屋の隅から重たそうな灰皿を持ってきた。「失礼して」

神州は懐から出したマイルドセブンに火をつけると、気持ちよさそうに深く吸い、ゆつくりと煙を吐いた。そして、未練がましく小刻みに何度か吸うと、残念そうに灰皿の上でもみ消す。

「いやあ、白桜先生があのようにおっしゃるのには、正直言って私も驚きました。」

神州は、チラシの裏に書いたメモを確認している。

「刈谷さん。水の因縁で何か思い浮かぶことはありませんか？」

「水ですよ」

「たとえば、水漏れだとか。あ、そうそう。水道工事の予定があったら、とりあえず延期してください」

「水道工事の予定は特にないんですが、台所の流しの下に水が垂れてきて、置いてあったフライパンが錆びたので水道屋さんと呼ばうかと思っていたところなんです」

「そうですね。それは霊障かもしれませんね」

神州は体の恰好と同じような丸まっこの字で、妻の話をメモしている。

「そういえば、床の間の壁に水が沁み込んだような跡が来ています。これは工事屋さんを呼んで調べてもらったんですが、結局、原因不明なんです」

「水が漏ったところをよく観察してください。そうすれば、何か手がかりがつかめる筈です」

「水っておっしゃったけど、車の底に水が溜まるっていうのも霊障ですか？」

私はおそおすと切り出した。

「車ですか？」

「うちの自家用車がおかまを掘られまして、バックトラクを修理したんです。修理が終わって車が帰ってきたら、何日も雨が続いた後、車内の床の上がじとっと濡れている。これはおかしいなと思ってバックトラクの底板をはがしたら、金魚で帰るくらいに水が溜まっていたんです。これは修理ミスに違いないと思って、修理屋さんを呼びつけたら、案の定、修理が終わってから防水用のゴムのパッキングの取り付けを忘れたことが分かったんです。修理屋さんは、こんな初歩的なミスは考えられないといって、平身低頭だったんですが、これもそうなんですか？」

「で、その車、今でも走っているんですか？」

「まあ、なんとか」

「そうですね。世の中の人は偶然と言って済ませることが多いのですが、この世の出来事には総て理由があるんです。私も白桜先生と一緒にいろいろな体験をさせていただく」

ちに、本当にそうだなあ。と、思うようになりました。それでは施餓鬼の説明をしましうか」

神州は引き出しから赤茶けたわら半紙を取り出す。わら半紙にはガリ版で施餓鬼の手順が印刷されていた。

【施餓鬼のやり方】

歯を磨き、手を洗って、身だしなみを整える。

米一合を炊き、十三個のおにぎりを作る。おにぎりを仏壇に供え、般若心経を写経する。

仏壇に向かって般若心経を一回唱える。川へおにぎりを流しに行く。(この道中、般若心経を唱え、何があってもけっして振り向かないこと)

干潮の時刻に般若心経を唱えながらおにぎりを十三個川に流す。

家に帰ってくる時も般若心経を唱え、何があってもけっして振り向かない。

家に入ったら仏壇に向かい般若心経を一回唱える。

注意：施餓鬼の間は沈黙を守ること。

施餓鬼の最中に人に会っても、目礼程度で済ませること。おにぎりを流す干潮の時刻から逆算して、施餓鬼を始める時刻を設定すること。

「何かご質問は？」

並べられた項目を読んだだけでは質問のしようもない。

「あの…、施餓鬼というのはどんな意味があるんでしょうか？」

「施餓鬼をご存知ないですか。それは失礼いたしました。施餓鬼はさまざまな宗派で異なつた形で行われていますが、目的はひとつです。施餓鬼とは、餓鬼に施すと書きます。つまり、昔は白いご飯も食べられずに死んでいった人も多かつた。そうした、慰めされていない死者の霊の供養のために川におにぎりを流すんです」

「でも、それが何で干潮の時刻になるんですか」

「人は満ち潮の時に生まれ、引き潮の時にこの世を去るといふのをご存知ですか？」

「私、その話をどこかで聞いたことがあります」

妻は施餓鬼を知っていたようだが、私は聞いたことがない。

「死んだ人というのはなかなかこの世への未練が捨てきれないものです。だから、死んだ後もいつまでも自分がお腹が空いていた時の食べ物への執着を持っているのです。だから、自分の先祖ばかりにお供え物をしていくと、子孫に供養してもらえない他所の霊がやきもちを焼くんです。子孫が施餓鬼をすることによってご先祖の霊もあの世で肩身の狭い思いをしないで済むんです」

「で、それはどれくらいの期間やればいいんですか？」

「まず、練習で一週間やってみてください。上手くできるようになったら、今度はお彼岸の月初めからお彼岸明けまでの二十一日間行ってください」

二十一日と聞いて、私は共善会に来たことを後悔した。

「あ、それから干潮の時刻ですが、釣りの雑誌を見れば載っていますから、それで調べて

ください。あと、刈谷さんの家系図を書いていただけますか」

「家系図ですか？」

「はい。先祖の因縁を調べるには家系図を作ってみるのが、話を整理するのに手っ取り早いです。家系図を書いて、もし変な死に方をした人や発狂した人が出てきたら、その人が霊障を受けていたり、霊障の原因になっている場合が考えられます。先ほど、白桜先生がご主人が発狂する番だとおっしゃいましたが、そうした因縁も結構、家系図を書くことで分かってくるんです」

「やはり、僕は狂うんでしょうか」

「私は先生ではないので良く分かりませんが、でも、ご主人の心がけひとつで発狂が避けられることは確かでしょうね」

「心がけですか……」

「ええ、まず自分の我をあまり張らないこと。そして、嘘をついたり、人を傷つけるようなことをしないことです」

「それって、清く正しく美しくの愛媛みかんみたいですね」

妻は私の話に割って入った。

「愛媛みかんか、こいつはいいわ。でも、私は清く正しく美しくといえば、タカラヅカだけだね」

妻と神州は和やかに笑っている。ふたりの笑いの中で、私はどう表情をつくっていいか分からなかった。

「あ、それから刈谷さん。これから行を進めていくといるようなことが起こると思います、特に太鼓のような音がドーンとしたら、すぐに電話してきてください。真夜中でも一向に構いませんから」

神州は、共善会の緊急の電話番号を書いた紙を差し出した。

ドーンと太鼓の音が鳴ったとき、一体何が起きるのか。その時こそ、異次元の扉が開き、映画「ポルターガイスト」のようなことが起きるのではないか。これから起きる出来事を思うと、私はとても不安になった。

新幹線は黄昏の京都駅を発車した。揺れる車内で私は指定席券の番号を確かめながら、自分たちの座席を探していった。座席が見つかりシートに腰を降ろすと、いままで如何に緊張していたかが分かった。窓外の風景がト

ーンを落としていくスピードに呼応するように、私の緊張も解けていった。

「純ちゃんも食べよ」

妻は私の座席の前のテーブルを開き、缶ビールと駅弁を置いた。私は缶ビールをプシューと開け、ぐいっと飲む。

「ねえねえ、純ちゃんも一緒に食べようよ」
妻に既に京都駅名物のうなぎめしをパクついている。私も駅で鯖の姿寿司を選んでいった。しかし、過度の緊張から解けた直後だったから、もりもり駅弁を食べる気にはなかなかなれない。

「ねえ、さっき白桜先生に言われたこと気にしてんですよ」

「え、先生にっつて、何を？」

「純ちゃんが狂うかもしれないってこと」

「いや、そんなことないよ。もしそうだとしたら、そんなことしたいして重要じゃないさ」
「そうかしら、でも、妻の私にとってみれば、大変なことよ」

妻はうなぎが入ったままの口をビールですすぐと、私の前の鯖寿司の包みを解いた。
「これ、一緒に食べようね」

「ああ」

私はビールをぐびりと飲む。

「確かにそうかもしれない。でも、今日はそんなことを知るためにわざわざ京都までやってきた訳じゃない。今日は友美の抱えている、いや、刈谷家の抱えている問題を解決しよう」と京都までやってきたんだ。それが、湖の底に沈んだから珍しいなんていうのが結論だなんて、金をとって霊視しているくせに、あまりにも無責任だよ」

妻は私の前の鯖寿司の包みを開けると一切れ口に放りこんだ。

「純ちゃんも少し食べたら...」

私の機嫌が悪いのは空腹のせいだといわんばかりに、妻は箸につまんだ鯖寿司を強引に私の口の前に持ってきた。

「あーん」

この状態のまま議論しても仕方がない。妻の策略に降伏し、私は口を開いた。

「わたし、今日、白桜先生にお会い出来て本当によかったですと思ったの。先生は、少しもの足りないと思うかもしれませんが、想像でお話を作るのは嫌이었다おっしゃったわよ

ねえ」

「ああ...」

「それってとても重要なことなの。霊能力って精神の集中を必要とするとてもデリケートな能力のはずよ。だから、霊能者だって何もみえないこともあるの」

「でも、それって霊能者の能力が弱いってことじゃないの？」

「たとえば、どんなに眼のいい人でも、あたりに霧が立ち込めていたら何も見えないわよね。最初の霊視の時、先生が私の肩をゆすって、もつとリラックスしなけりゃ駄目だって仰ったでしょ。あれって、先生を怖がる私の気持ちがバリアーとなって霊視ができなようにしていたの。先生は確かな霊能力を持っているからこそ、自信を持って何も見えないって断言できるのよ」

「確かに理屈としては、そうなるかもしれないけど...でも、何も見えないって言えるのがちゃんとした霊能者っていうのも、おかしな話だ。でも、何でそんなに詳しいんだよ」「昔、お母さんがそういうことを好きだったの。それで、私は子供の頃とても病弱だった

から、よく群馬の霊媒さんに見てもらっていたの。ある時なんか、お父さんが病気で入院して医者から『あと一週間で死にます』って言われたから、母その霊媒さんに父が死なないで済むように頼んだの。そしたら、お父さんのことは神様に頼んだから大丈夫だって、何日かして母に電話してきたの。すると病院のお父さんも医者が信じられない回復をして、それから二十年以上も生きることが出来たの。そんなことがあったから、お母さんはだんだんその霊媒さんに頼って生きて行くようになったの。お母さんが霊媒さんに支払った費用は、家が一軒買えるくらいよ」

家が一軒...。私は驚いた。それと比べれば共善会の費用などたいした額ではない。

「でも、その霊媒さんが亡くなって、お母さんは頼りにするところがなくなってしまうたの。そして、お母さんが六十歳を過ぎて怪我をした時には、教祖が難病でも何でも霊的治療で治してしまうことで有名な新興宗教と関わりあうことになったの」

「霊的治療って、よくフィリピンでやるような心霊手術のことか？」

「そういうのじゃないけど、ハンドヒーリングというんだけど、日本語でいえば、手かざしよね」

「よく、手当てっていうから、手には不思議な能力があるのかもしれないけど、それで何十万も取ったら詐欺だよな」

「それでもないのよ。私はその団体の教祖様に会ったことがあるんだけど、その方は人間的にも、霊的にもとても素晴らしい人よ。でも、その団体は信者さんが一万人を越える大きな組織だったから、なかなか教祖様に会えないし、霊視を受けるといっても、その教祖様のお弟子さんにしか会えないの。そのお弟子さんの霊視相談の時、家の住所や因縁についての資料を渡したら、家が悪い因縁を背負っているっていうの。確かに、昔墓地だったなんて因縁だけじゃなくて、木を切れば木の魂が騒ぐ。その教団では、新しく家を建てる前に土地の魂を鎮めるために地鎮祭をやる。でも、その時に、家と土地を売らせてその代金を教団に寄付させようっていう、そのお弟子さんの魂胆を感じたの。その教団と手を切るのは大変だったけど、その苦心の中で教団

の悪い部分があるのを見ると見えてきて、自分の考えが間違っていなかったことが分かった。そんな経験があったから、何も聞かないし、たいしたことと言わない白桜先生が信頼できると思ったの」

「でも、何も言ってくれないんじゃないよ、どうしたらいいんだよ」

「私の抱えている因縁は、きっと長い間の悪い因縁だから、テレビでやっている除霊みたいに簡単に解けるものじゃないんじゃないかな」

「じゃ、この先どうなるんだよ」

「そうね。先のことは分かんないけど、少しづついろいろなことが分かってきて、因縁が解けていけばいいわね。でも、それは私たちが一生かかってもやり遂げられるかどうかという問題のような気がするわ」

新幹線は暗闇の中を確実に東京に向かって走っている。だが、私は自分たちがこれからどこへ向かっているのか不安になった。

第七章：施餓鬼

京都へ行った日、東京には二十センチ雪が積もった。明け方の冷え込みで積もった雪は凍ってしまったので、近所の家はどこも昨日のうちに雪かきを終えていた。家が雪に埋もれているのは刈谷家だけ。私は門の前に積もった雪にホースで水をかけた。

手足はかじかんで鼻の先も赤くなってくが、青空に反射して青く光る雪は私を新鮮な気持ちにさせた。一仕事終わったところで、施餓鬼について辞書で引いてみることにした。

施餓鬼「仏」：餓鬼道に落ちて、飢餓に苦しむ亡者や無縁の霊に食物を施す法会。

餓鬼道「仏」：六道のひとつ。生前に欲の深かった者が死後に行くところ。ここに落ちた亡者は常に飢えと渇きに苦しむという。

六道「仏」：この世の報いで人間が生死を繰り返すとされる六つの世界。地獄・書き・畜生・阿修羅・人間・天上の各道。

(集英社・国語辞典)

施餓鬼(せがき)：仏教儀式のひとつで、餓鬼に施すために行われる法会。浄土真宗を除いて、ほとんど各宗で行われる。盂蘭盆会に祖先の霊を供養ために行われる場合が多い。禅宗では特に施餓鬼を重視し、生飯(さば)の儀式を毎食前に行っている。

(ブリタニカ国際大百科事典)

仏教事典や宗教事典などの専門辞書ではなく、国語辞典や百科事典に載っているくらいだから、施餓鬼はとても一般的な行事なのだろう。しかし、辞書のどこにも干潮の時におにぎりを川に流すとは書いていない。

遅い朝食を終えた私と妻はストップウォッチを片手に家から近くを流れる多摩川まで歩いてみる。玄関を出てから約五分で多摩川の土手についた。ふたりの前に河川敷が広がっている。土手から川の流れにたどり着くには雪の河原を百メートル以上歩かなければならない。雪の河原に足を踏み入れると、一、二歩あるだけで靴の中に雪が入ってくる。それでも仕方ないと河原を進んで行く

と、ようやく岸辺にたどり着いた。川辺に立って見回すと、コンクリートのブロックを並べた護岸施設が水際に向かって組まれている。斜面は角度としては緩やかだが、十三個のおにぎりを乗せたお皿を持ったまま降りることは難しそうだ。水際に降りないでおにぎりを川の流れに落とすとすれば、おにぎりを野球のピッチングのように投げ込まなければならぬ。

「この場所は駄目よ。私、自信ないわ」「もっと上流の端のところへ行ってみようか。あそこだったら橋の欄干からおにぎりが流せるよ」

私と妻は雪の河原を上流に向かって歩いて行く。河原には雪遊びをすることもたちや犬の散歩にやってきた大人が何組も散らばっていた。上流の橋につくと、数十台の車が橋の上に行列をつくっていた。東京都と神奈川県を結ぶこの橋は渋滞の名所でもある。橋の上を歩く人の姿もある。

「こんな賑やかなところでおにぎりを流すなんて、恥ずかしいな。どうか他の場所によろしく」

「恥ずかしいなんて何言ってるの。事態は深刻なのよ」

この橋は車道と歩道はガードレールで分けられていて安全には安全だが、妻にも自動車の排気ガスと車の中の人の視線が気になった。

「ここもあんまりよくないわね。やっぱり、誰にも邪魔されなくて静かに施餓鬼を行える場所を探すのが一番だわ」

妻は突然ひらめいたように歩き出した。私女が選び出した場所は、家の裏を流れる川幅が三メートル程の用水路である。一級河川の多摩川とは比べるべくもないが、どぶ川と読んでもおかしくないようなこんな小さな川にも、世田谷区は名前をつけていた。

「確かに川には違いないけど、こんなのでいいのかなあ」

「水が生みに流れ込むような川ならいいって、神州専務がおっしゃっていたわよね」

確かにこの川はいつも干上がらずに流れている。

「でも、この水は本当に海に流れて行くのかなあ。どっかの浄水施設に注いでいるんじゃないか」

「まずいんだろ」

「もう少し下流のところまで多摩川に注いでいたはずよ。あとで地図で調べてみて」

「分かった。この川でOKだったら、楽勝だもんな」

この用水路に渡された小さな橋から二分ほどで家に着く。この場所なら駅から離れているから通行人もあまりいないだろう。とはいえ、この用水路にかけられた橋は車の抜け道になっていて交通量は多い。ガードレールもない小さな橋にたっていると人目につくことは確実である。水深が一メートルもないようなこの橋で身投げをする人もないだろうが、何も知らない人たちにとって、おにぎりを投げる姿は怪しい存在であることは間違いない。

「もう少し下流の橋にしようか」

私は二十メートルほど下流の橋で、おにぎりを流すことを提案した。

「ほんと、ここがいいわね」

この橋なら人目にもつかずおにぎりを流せるし、家からの道順もひとけの少ない狭い路地を歩いていける。裏道を歩いて家まで帰

ってみると、最初に行った橋よりも近く感じる。家の玄関から約二分だった。

私は地図で確かめてから、車で下流まで確認しに行った。おにぎりを流す川は途中で土管になるところもあるが、五キロほど下流で多摩川につながっていた。

おにぎりを流す場所が決まれば、あとはおにぎりを流す時間である。釣り雑誌には、港別に満潮と干潮の時刻が記載されている。干潮の時刻は通常一日に二回あるから、どちらかの時刻で施餓鬼をすればいい。施餓鬼をする週の干潮時刻は、十九時〇四分、二十時十六分、二十一時十四分、二十二時〇四分、二十二時四十九分、二十三時三十分と日ごとに約一時間遅れていく。

最終日の干潮の時刻は、午前十一時四十分の一日一回だった。私の仕事はビデオの撮影や編集という社外で行う作業もあるし、集中を必要とする企画書や台本を書くことのように自宅作業が許されるものもある。つまり、上司とさえ連絡が上手くとれてさえいれば、時間の融通は普通のサラリーマンよりもつく。上司の蔵原は、共善会を紹介してくれた

張本人でもあるから、理解を求めるのは簡単だ。私は施餓鬼と仕事のスケジュールの調整を会社には内緒で行った。

次は、共善会に送る家系図の制作だ。妻の父・光晴は、江本家から刈谷家に養子にはいなかった。戦前は子沢山の家が多く、家を継ぐという意識も強かったから養子縁組は盛んに行われていた。養子縁組は、血のつながった家同士で行われる場合もあるが、光晴の場合は品川の地縁によるものだった。光晴の義理の母は刈谷ヨシという。ヨシは子供を生まないまま夫・福次郎に先立たれた。そこで、子供の頃から勉強が出来た江本家の次男坊の光晴は、その優秀さをかわれて近所の刈谷家に養子に出た。

したがって、光晴は養父と会ったことはない。光晴は養子に入るとすぐに妻の母・まきと結婚した。それから一年ほど経って、ヨシは他界した。刈谷家は親戚つきあいも全くなく、ヨシも多くを語らずに亡くなったため、刈谷家のルーツは殆ど失われてしまった。残ったのは、妻の両親のわずかな記憶と福次郎とヨシのお墓と位牌だけだ。位牌といえば、

妻には気になることがあった。刈谷家の仏壇の中に、福次郎とヨシの位牌の他に浜月姓の位牌が十数柱残されていた。ただし、十数柱といっても、ひとつの位牌の中にいくつもの位牌が入っている練り抜き位牌というものだ。練り抜き位牌は、いまの言い方でいえば、ダウンサイジングを実現したモダンな位牌ということが出来る。何故、刈谷家の仏壇に浜月家の位牌があるのか、妻の母も疑問に思ったらしく方々に当たって調べた。だが、彼女が死ぬまで、その辺りの事情を知る人に出会うことはできなかった。

「おじいちゃんの福次郎さんは若い時に浜月家に養子に行ったの。でも、何かの事情でまた刈谷家に戻らなければならなかったの。それで浜月家の位牌がうちの仏壇に入っているのよ」

妻の母は位牌の経緯は辛うじて知っていたが、その位牌の仏様が入っているお墓の場所は知らなかった。浜月家の位牌に手を合わせることはできても、お墓参りはできない。彼女にはそのことが終生気がかりだった。

妻の両親も刈谷家の親戚とまったく付き

合いがなかったから、福次郎に兄弟がいたのかさえも分からない。妻よりも一回り上の姉の栄子にしても、自分の先祖について妻以上に知らない。

「でも、何でそんなこと聞くの？」
栄子は妻が何故先祖のことを聞くのか不思議がった。

「ご先祖を調べても、刈谷の家とは血がつながってないんだから、調べても意味がないわよ」

体質や性格が遣伝子によって親から子に受け継がれていくことは、学校でも習うから誰でも知っている。養子縁組で名前だけが残った刈谷家のことを調べても本当のルーツを探したことにはならないというのが、栄子の意見だ。

「どうせ調べるんだったら、お父さんの実家の江本家とお母さんの実家の宗像家のほうを調べたらどうなの？」

「ええ。それは勿論やるんだけどね」
自分の先祖の話聞くというのは、実際にやってみるとかなり神経を使う、骨の折れる作業である。先祖の話聞く本当の訳を話し

たら、先祖の話を書くところではなく、先祖の手は、こちらが怪しげな宗教にはまったと誤解される可能性もある。かといって、突然自分の先祖に興味を持ったというのもし少し不自然だ。妻は自分の記憶だけを頼りに、父方の実家の江本家と母方の実家の宗像家の家系図を完成させる。とはいえ、刈谷家は三代前。江本家は四代前。宗像家は四代前までしか遡ることができなかった。

家系図を書けば、次は自分が狂う番だという因縁が分かるかもしれない。家系図を書く妻を見て、私も自分の家系図を書いてみたくなかった。私は長野にいる母に電話をして、父の先祖・三沢家と母の実家の萩原家の先祖の話聞き手、それを家系図に仕上げていった。父と母の記憶をもつて分かったのは、せいぜい四代前、曾祖父の代までだった。伯父や伯母ならば何度か会ったことがある。だが、祖父の兄弟となると顔も見ることがない。家系図に人の名前を並べることが出来ても、並べられた人たちの人生まで想像することは出来なかった。

共善会の白桜は、この家系図を見ただけで、

先祖の因縁がたちどころに分かるのだろうか。

白桜は私と妻が同じような因縁で結ばれていますと言っていた。家系図で見ると、妻の両親が両養子で、私の祖父母も両養子だったことが分かる。それが白桜の言う同じような因縁ということだとすれば、ことは単純だが、それ以上に深い因縁があるとしたら、これからどうなるのか。私には想像のしようもない。

初めて施餓鬼をする干潮時刻は午後七時四分だった。仏壇の前で般若心経を一回唱えてから、裏の川まで歩いていく時間を余裕を持って十分、般若心経を写経する時間をたっぷり一時間。おにぎりを握る時間を二十分と予想して、干潮の一時間半前。五時三十四分に妻は炊飯器の蓋を開け、おにぎりを作り始めた。私は施餓鬼の同行者だから、おにぎりはつくらない。おにぎりを流すのも妻だけである。私は神州専務から渡された共善会の電話番号をポケットに忍ばせていた。「ドーンと太鼓の音がしたら、すぐに電話してください」

ドーンという音は地獄の釜の蓋が開く音なのだろうか。私は太鼓の音の意味を神州に聞けずにいた。

施餓鬼に邪念は禁物である。私は太鼓が鳴った後のことを考えまいと必死になった。炊きたたのご飯を十三に分けてしまえば、正確に十三個のおにぎりは出来る。しかし、お釜とバットにはこびりついた飯粒が残る。おにぎりにならない飯粒があったのでは一合のお米からおにぎりをつくったことにはならない。お釜とバットの飯粒をひとつ残らず拾い集めるのは根のいる作業だ。

般若心経の経文は全部で二百六十六字ある。私は書店で般若心経についての本を買っていた。その本で経文にはふりがながふってあり、訓読と口語訳が添えられていた。私はふりがなをふってある経文をコピーして張り合わせ、掌サイズのカードを作った。

般若心経を理解しようとして、口語訳を何度も読んだ。だが、仏教の基礎知識がないから意味がつかめないし、経文がどこで区切れるのかさえも分からない。二百六十六をおにぎりの数の十三で割ると二十である。私は二十字

ごとに経文に印を付けていった。読経のとき、この印のところに来たら、おにぎりを川に流せばいい。おにぎりは十分ほどで握られ、写経も十分ほどで終わった。私と妻は三十分も無言で待たなければならなかった。何を考へても何をしてもいけない状態での三十分は辛い。雑念にとらわれるよりも、お経のことを考えているほうがかもしれない。私は般若心経のカードを見て、経文を覚えようとした。だが、意味が分からないので、なかなか覚えづらい。

「お経なんて呪文なんだから、意味を一生懸命考えたって仕方ないわよ」

前日、般若心経を前に困り果てている私に妻は言った。とはいえ、意味の分からない物を書いたり、読んだりしていると、いい知れぬ不安が襲ってくる。その得体の知れない感じは、時刻表を持たずに見知らぬ町を旅しているときと、ある意味似ているのかもしれない。もっとも、時刻表を持たずにぶらりと旅に出るのが好きな人も世の中にはたくさんいるのだから、これは単なる私の性分に過ぎぬのかもしれない。

ようやく干潮の十分前になったので、仏壇に向かって読経をすると、ふたりは川に向かった。胸にチョウチンアンコウのように豆電球をつけて般若心経のカードを照らしながら路地を歩いて行く。近所の手前もあって、読経は口の中でもぞもぞと呟く程度になった。

橋の上に立つて腕時計を見ると、まだ七時二分。干潮の時刻にはまだ二分ある。東京の二月十三日は真冬だが、スキー用の防寒服を切れは寒さなどたいしたことではない。だが、雨や雪、そして風が吹けば、施餓鬼は辛いものになるだろう。

定刻の七時四分。私の合図で妻は読経をしながらおにぎりをひとつずつ川に落としていった。私は妻の持っている般若心経のカードをペンライトで照らした。川におにぎりを流している最中、川沿いの道路を二、三台の車が通り過ぎていった。無事、おにぎりを十三個流し終えると、私と妻は後ろを振り返らないように注意しながら早歩きで家へと向かった。

家に入り、仏壇に向かって読経すると、お

互いに「ご苦労様でした」と挨拶し、安堵した。

口には出さなかったものの、私も妻も太鼓の音がするのではないかと内心びくびくだったのである。一方、同じ時刻、刈谷家のために京都で施餓鬼をしていた白桜のほうは大変だった。施餓鬼の最中の白桜の体は先日の霊視の時と同じように、凍えるような寒さで体がガタガタと震えたという。

霊的な現象が何も起きなくても、手順通りにおにぎりをつくり、時間通りに写経と読経をして、干潮の時刻にきつちりと川におにぎりを流すのは難しい作業である。そのうえ、精神を集中して無我の境地にはいつて行わなければならない。

私には太鼓が鳴らなくてよかったという安堵の気持ちと無事施餓鬼を終えられたという満足感があつたが、流したおにぎりを亡者が食べる場面を実感することはまったくできなかった。干潮の時刻に亡者の魂が現れておにぎりを食べるなんて、言い伝えか伝統行事に過ぎぬ。だが、白桜は施餓鬼を生きている人から教わったのではなく、死者の霊か

ら教わったのだという。彼女には、亡者がおにぎりを食べる姿を見ることができると言えるのだろうか。

施餓鬼の練習はそれから六日間何事もなく続き、とうとう七日目の最終日がやってきた。

この日、おにぎりを流すのは、午前十一時四十分。私と妻が初めて太陽の下で行う施餓鬼だった。世の中の宗教行事はどうしてもクレークスクランのような怪しげな秘密結社の秘儀を連想させる。だが、二月とはいえ、日差しの暖かかったこの日、おにぎりをもつて川まで歩いて行くと、そんなおどろおどろしい雰囲気とはかけ離れたなんとも安らかな気持ちになった。

川に到着すると、野鴨が二羽遊んでいる。いつものように妻がおにぎりを川に落とすと、おにぎりは川の流れに沿って川下にコロコロと転がっていった。野鴨はおにぎりが流れてくるのに気がつき、食べようとしてつついた。

私には餓鬼道に落ちた亡者がおにぎりを食べる姿は見えないが、野鴨に亡者の魂が乗

り移っておにぎりを食べるというイメージが脳裡に浮かんだ。だが、そうイメージした瞬間、私は、あまりにメルヘンチックで非科学的な自分の考えに深く反省する。私にそう思わせたのは、春の近さを予感させる明るい日差しのせいに他ならない。

第八章：ふたたび霊視

一週間の施餓鬼を終えた四日後、私と妻は二回目の霊視のために京都を訪れた。

インターフォンを押して二階に上がると、待合室にはすでに二組の人が白桜の霊視を待っていた。あらためて待合室を見回すと、なんとも雑然とした作りである。テーブルの上には、手垢にまみれた白桜の記事を載せた何年も前の女性週刊誌と湯原トクオの単行本が置かれている。その、雰囲気はどこか裏寂れた集落の公民館を思わせる。しかし、掃除だけは行き届いている。トイレに入ると、便器の上に吊るされたパラソールの臭いがツーンと鼻をつく。

三十分もすると下地が順番であると告げにやってきた。私たちは前回と同じように、霊視室の前で神州専務を迎えられた。

神州に促されて薄暗い霊視室に入ると、白桜は懐かしそつに妻を見た。妻は祭壇に向かつて正面に、私は向かつて右の立会人の座布団に座った。

前回同様に、白桜は数珠をかき鳴らした後、

しばらく合掌する。次に、合掌した両手を頭上に持ち上げると、ゆっくりとそれを下に降ろしながら開いていく。開かれた両手の間には数珠がピンと張られている。私は今度こそラップ現象やポルターガイスト現象が起きるのではないかと、暗い部屋の中で眼と耳に神経を集中した。

妻の頭と白桜の手の間に紫色の筋が見える。これは、霊の物理化現象の一種かもしれない。前回の霊視のとき、ラップ現象の存在さえ知らなかった私は、その後、オカルトに関する本を数冊読んで、さまざまな霊現象について調べていた。

本の中にはラップ現象の他、さまざまな超常現象のことが書いてあったが、その中に物理化現象というのがあった。

物理化現象は、突然ドアが開いたり、机や茶碗がガタガタ動き出すという、いわゆるポルターガイスト現象や、日本の怪談に火の玉や光の玉として登場する霊的な存在が光球や光の帯になって見える現象のことを言う。霊的な存在が幻覚ではなく、現実の世界に現れるので、物理化現象とそれらと呼ぶ。

ところで、オカルトとは、「隠された物」という意味である。私はそれまでオカルト映画を観てはいたが、それを単なる想像の産物としかみていなかった。悪魔は悪を誰にでもイメージできるように作られたキャラクターに過ぎない。しかし、こうして実際に妻の霊視に立ち会ってみると、オカルトの世界と現実の世界が重なり合っていることに気づく。

とはいえ、悲しいかな、私には目の前の紫色の筋が幻なのか、それとも物理化現象なのか区別が付かない。もし、幻だとすれば、それは幻覚が作り出した虚像ということ。基本的にマリファナなどの麻薬で見るとつい幻覚症状・脳内現象にすぎない。

仮に、これが物理化現象だとしたら、どういう解釈が成り立つのだろうか。霊的存在が物理的存在に転化しているなら、物理法則にしたがっているはず。私はなんとかしてオカルトの世界から現実の世界への糸口を探していた。確かに、白桜の手の間から妻の頭に向かつて紫色の光の筋が見える。だが、考えみると、白桜の背後には蝋燭の光があり、

霊視室の中には線香の煙が充満している。これは舞台演出でよくやるスモークを焚いて、スポットライトで照らすのと同じ効果だ。私は霊能者の演出にまんまとはまったのかもしれぬ。だが、次の瞬間、祭壇に線香と蠟燭はどこでも見られる月並みな取り合わせだと思う。

そんなものが巧みな演出とも考えられない。

「はい」

白桜は納得したように合掌した両手を離し、数珠を膝の上に置いた。白桜に呼応して、神州は電気スタンドを点灯する。

「今日もやっぱり冷たい湖の底に沈んでしまいました。しかし、今度は大勢の人の声が聞こえます。その方たちはみんなバラバラにそれぞれが好き勝手なことを言っています。ある男の方は、自分にお金を貸してくれとばかりに無心していますし、ある女の方は自分の着ている着物を見てくれとせがんでいます。その方たちは狂ったように自分の言いたいことを言っただけで、私があなたは誰なの

か。そして、ここはどこなのかと聞いても誰も応えてくれないのです」

妻は暗闇の中で頷いた。

「友美さん。施餓鬼をやることで少しづつ因縁が解けてきましたね。前回の霊視の時は、その湖で人の気配はするけれど、何も聴こえなかった。それが、施餓鬼をするうちに声だけでも聞こえるようになったのですよ。これからもご主人と一緒にがんばってくださいね」

「ありがとうございます」

「ところで、私は自分の着物を見てくれってしきりにこびている女の方のことが気になっっているんですが、心当たりはないですか？」

優秀な霊能者のはずの白桜が名前を見ただけで大概のことは分かるというのなら、白桜がどうして妻が送った家系図から問題の女性を割り出せないのだろう。

「先生。お送りした家系図はご覧になりましたか？」

私はおぼろげと切り出した。

「ご主人、家系図は先生にはお見せしていな

いんですよ」

神州が私の疑問に答える。

「先生がお忙しいのは分かりますが、送ってから一週間も経っているのに、先生がご覧になっていないのは、どういことなんでしょう」

「ご主人。前回の霊視の時に、私は話を作るのは嫌いだと言ったのを覚えていらっしゃいます」

「はい」

「資料にあたって事実関係を調べるのは相談者の方と神州の仕事です。私はあくまでも霊視で見たことだから診断を下すのが務めだと信じています。ですから、如何にご主人が苦勞して作られた家系図であろうと、それは無心になつて霊視をする霊能者にとつては雑音でしかないのです。家系図を書きなさいと頼んでいるのに、こう言つのも失礼な話ですが、家系図は自分たちの悲しい思いや子孫に知って欲しくない恥ずかしい事実には触れていないものです。しかし、そういう悲しい出来事。辛い出来事が霊障の原因になっている場合が殆どなんです。だから、私は

悲しい思い出を封じ込めてしまったような家系図は、けっして見ないことにしています。とはいえ、家系図が過去の因縁を探っていくための重要な手がかりであることは間違いありません。だから、家系図をつくってもらったのです。それに家計図をつくることによつて、忘れられていたご先祖さまも、話題にしてもらつて、思い出してもらつて、きつと喜んでいただくでしょう」

「そうなんですか」

妻は白桜の言葉に納得したが、私には彼女の霊能力がどれほどのものなのか推し量ることはできない。とはいえ、一切資料を見ないで判定を下す姿勢に、潔いものを感じたことは否定できない。

「湖の底にしばらくいたら、今度は場面が変わつて一本の道が見えてきました」

白桜は霊視の結果について話を続けた。

「場面が変わるといふのは、映画のシーンが変わるように突然やってきました。まっすぐに一本伸びた道の周りに家は見えませんが、道端には道しるべが立っています。道しるべに刻まれている文字を読めばそこがどこだか

分かると思い、私は一生懸命眼を凝らししました」

私は霊能者の話に引き込まれていった。その道しるべの文字さえ読めれば、白桜から初めて具体的な事柄が述べられることになる。

「でも、どうしても、その道しるべの文字が読めないのです。でも、その場所は四国どこかでしょうね。私はストーリーを作るのが嫌いだと思いますが、やはりご先祖のお墓が湖の底に沈んでいることだけは確かですね」

「先生。どうしてその場所が四国だと特定できるんですか？」

「そうですね、ご主人。道しるべの文字が読めないのに四国だと分かるはずはない。ごもつともです。しかし、ここが霊能者の能力の不思議なところなんです。霊能者は霊視する時だけ霊能力を働かせているわけじゃないんです。ごく普通に生活している時も霊的な世界からさまざまなメッセージが言葉や映像になつてやつてくるんです。霊能者は次第にそういうメッセージに敏感になつていって、その沢山のメッセージの中から自分に

正しい助言を与えてくれる声の存在に気づくのです。確かに野中の一本道を見ただけでは、そこがどこだか分かるはずありません。しかし、ここがどこだろうと考えると、どこからかテレパシーが聞こえてきて、そこが四国だと教えてくれるんです」

「でも、もしそういうことだったら、何でそのテレパシーの主に総てを聞かないんですか？」

「ご主人。物には順序、人生には機というものがある。人間はそれがいかに大切なものであつても、それが簡単に手に入ったのであればあるほど大切に扱わないものなんです。今は少しずつ努力を続けることが大切なんだと、その声の主も言いたいのだと思いますよ」

結論を簡単に出してしまうと、明日からの飯の種がなくなる。白桜の論理は一流の興信所が使うやり口に似ていると思った。

「ところで先生」

「何ですか。友美さん」

「実は亡くなった母のことがとても気になつているんですけど」

「そうですか。そうですね」

白桜はにっこりと笑いながら、義母の話を始めた。

「あなたのお母さまは、とてもあなたのことを可愛がってらしたでしょ」

「ええ」

「あなたのことが心配で心配で仕方がないとおっしゃってますよ。そして、お母さまは亡くなった今でも、あなたのことを守るのは自分だと張り切って、あなたの周りをうるうるしていますね。それにお母さまは自分の娘はあなた一人だけだと思っています」

「そうですね。母の晩年の世話をしたのは私ですし、私は母が歳を取ってからの子だったので、そう思っても仕方がないことかもしれない」

「お義母さんが守ってくれるなんて、これほどよいことはないですね」

私は素直に頷いた。

「でも、それはあまりよくないことです。亡くなってしまう方にはあまりパワーがありませんから、お母さまは娘のことを守って

るつもりでも、この世の災いの種を増やすことに繋がりがありません。それに、このままあなたの周りをうるうるしているといつの間にか不成仏霊になって、自分の力ではあの世にいけなくなってしまつんです」

「あの世って、死んだら誰でも行けるんじゃないんですか？」

「ご主人。誰でもあの世に行けるなら、霊能者なんか必要ありません」

「でも、だったら人は死んだらどうなるっていうんですか？」

「人は死ぬとまず、幽界に放り出されます。そして、大きな眩いほどの光と出会います。その光のある方向が霊界です。幽界の幽は幽霊の幽です。つまり、光の方向に進まなかった霊が幽界に留まっているのが幽霊というわけです。この世に恨みや未練を残した人が幽霊になって現れるという怪談が沢山ありますが、そういう話は、この世に執着するあまり、光の方向に進んでいかなかったために起こったことです」

「でも、何で光の方向に進まないのですか。私が読んだ臨死体験の本では、その光はとっ

ても魅力的で、誰でも思わず行ってしまいたくなるそうですよ」

「確かに光の魅力は素晴らしいものです。しかし、その光があまりに素晴らしいものだから、死んだ人はいつまでも光の方向に行けると思ってしまう。そして、この世に未練や恨みがある人はいつまでも光の方向に進んでいかないのです。そうこうしているうちに今まであんなに大きく輝いていた光はいつの間にか小さくなって、あたりは真っ暗になっています。こうなってしまったら、死んだ人がいくら光の方向に向かって進んで行きたいと思っても、光が小さくて方向が分からず、もつ自分の力では光の方向に行けなくなっているんです。そういう死んだ人を光の方向に導いて行く手助けをするのが霊能者の役目なんです」

「母はどうなんでしょう」

「お母さまは今、あなたを守ろうと一生懸命です。そこで、私はお母さまを説得するために、まずお母さまのお話を聞いてあげるところです。お母さまは今、あなたが子供の頃の話なさっています」

「母は話が長いから大変でしょう」

妻の心遣いに白桜は苦笑した。

「ということは、お母さんはまだ成仏してないんですか？」

私は白桜に疑問をぶつけた。

「成仏という言い方をすれば、そういうことになるかもしれませんが」

「三途の川の向こうが彼岸って言うくらいだから、あの世のことですよ。確か三途の川を渡るのは四十九日忌でしたよね」

「三途の川の渡し舟の渡し賃を棺桶の中に六文銭を収める風習があるくらいですから、死者が三途の川を渡るといふのはとても一般的な考えですね。しかし、霊的な世界を信じていない僧侶がいかにも呪文を唱えようと、その呪文のパワーが弱いのは当然です。四十九日忌に三途の川を渡れなくても仕方のないことかもしれませんね。友美さん、お母さまはなくなってから誰に話しかけても返事をしてくれないので、とても淋しい思いをされています。しかし、私と話をするうちに少しづつ心が解けてきています。霊界に進まれる日もそう遠くないはず。友美さん

ご主人もお母さまのためにお仏壇に手を合わせてくださいね」

「はい。わかりました」

「それではよろしいですね」

白桜に深くお辞儀をすると、私と妻は立ち上がった。

「ところでご主人。今日は日本海が見えませんか」

「あ、はい。今日は、この足で福井に墓参りに行くんです」

「そうですね。それはよいことです。もうお墓に来てくれることが分かっているから、日本海は見えないですね。しっかりとご先祖のご供養をおやりなさいね」

霊能者は私の肩を親しげに叩いた。

第九章：松前貿易

京都駅から湖西線に乗り、敦賀駅に着くとあたりはもう真っ暗だった。私は旅館での夜食用に、駅弁の鯛寿司と敦賀名産の蒲鉾と竹輪を買った。敦賀を訪れるのは義母の死の直前だったから八ヶ月ぶりだ。

冬の北陸は蟹の季節である。私と妻は気比神宮に程近いとある旅館の門をくぐった。

「こういう建物にお金をかけていない旅館の方が、板前さんは材料にお金を使えるはずよ」

妻の言つとおり、夕食に並んだずわい蟹は、東京ではお目にかかれぬ極上品だ。

「鍋に入れるのはもったいないよ」

私は鍋用の蟹足のうち何本かを、そのまま刺身として食べた。蟹の鮮度は確かめるまでもなく、つるりと口の中を楽しませる。

「やっぱり、本場で食べないと本当の味は分からないのよね」

妻は、釧路沖で獲れる花咲蟹が一番おいしいと決めていたが、敦賀に来てからは、この蟹もなかなかのものだと認めるようになる。

つた。たしかに東京に暮らしていると毛蟹やたら蟹が殆どで、なかなか北陸の蟹は食べられない。私と妻にとって、敦賀で蟹を食べることも今回の墓参りの重要な目的のひとつだった。とはいえ、今回の墓参りの最大の目的はあくまでも、日本海に面しているという平貴家の墓参りである。勿論、敦賀にある三沢家と垣坂家の墓参りも欠かすことはできない。

翌朝の八時三十分、私たちはレンタカーで垣坂家と三沢家の墓参りをスタートさせた。最近北陸も暖冬で、二月というのに雪は山には残っているが、平地には積もっていないところはほとんどない。この時期に雪かきもしないで墓参りができるのは幸運である。二件の墓参りが済むと、時刻は十時を回っている。これから国道八号線を北上し、平貴家の墓がある入り江の村に向かう。

村は敦賀から二十キロほど北にある。私は入り江の村のことを父から聞いていた。

平貴家の菩提寺は松香寺という。ちいさな集落だから、地図や番地がなくても行けば分かるというのが父の意見だ。父も幼い頃に何

度かその村を訪れたことがあるだけで、大きくなってからは一度も訪れたことはない。だが、その村のことはともかく、父は自分が平貴家の末裔であることを、祖母から嫌というほど聞かされて育った。

国道八号線を左に曲がり、海岸沿いの有料道路に入る。日本海の波打ち際に作られた自動車道を十分ほど走ると茶色のレンガの大きな建物が見える。私は、村役場とは思えないほど立派な建物の中に入ってしまった。

「松香寺さんを訪ねてきたんですが」

「松香寺さんですか」

奥からやってきた役場の職員は、観光用のパンフレットを差し出した。

「松香寺さんなら、ここに載ってます」

手渡されたパンフレットには、『北前船の歴史村』と、その村のキャッチフレーズが書いてある。そして、この村の一番の観光名所として北前船主の館・平貴家の写真が掲載されていた。

「すごいじゃない。あなたの家の本家が観光名所よ。ねえ、行ってみる？」

「ほんとだ。でも、とにかく松香寺に行つて

墓参りをすませるのが先決だよ」

私と妻は、役場の駐車場に車を停めたまま、パンフレットの地図をたどって松香寺まで歩くことにした。

海岸線に沿って埋め立てて出来た国道より五十メートルほど山側に、昔のこの村のメインストリートが走っている。その幅が二間ほどの狭い道だが、当時としては大通りだったのだろう。海と山に囲まれた狭い平地に、二十軒ほどの家が集落をつくっている。その家のひとつひとつは古びてはいるが、その造りはしっかりとっていて安普請ではない。家の造り以上に、あたりにめぐらされた石垣の立派さが百年以上前のこの町の繁栄を想像させる。豪壮な造りの家々の中でもっとも立派なのが、一般公開されている平貴家の本家である。松香寺は本家から四、五軒離れた場所にあった。松香寺は寺院ではあるが、山門をはいつて行くと鐘楼があり、本堂にぶつかるといふような本格的な造りではない。町屋に並んで本堂が建っている。そんな簡素なものだ。

私は普通の家と間違えて通り過ぎてしま

った。

松香寺の本堂の脇に勝手口があり、これが松香寺の住職一家の玄関となっていた。私は表札の下のブザーを押した。

「どなたさますか？」

「私は、東京から来た刈谷といいます。平貴家の墓参りにまいりました」

「そうですか、東京からですか。それはわざわざ遠いところを」

住職に通された本堂の中は、往時の平貴家の繁栄がしのばれる立派な仏像や仏具で飾られていた。平貴家は江戸時代の後期から明治の末年まで百年以上も松前貿易で栄えたという。日本海をめぐる航路を一般的に北前貿易と呼ぶが、その中で蝦夷・松前藩と交易する松前貿易は大型の船を必要とし、その分儲けも大きい。

長い期間栄えた家柄のせい、選ばれ仏像や仏具の趣味はとても上品で嫌味がない。成金趣味とは無縁である。

私と妻は、松香寺のご本尊に参拝した。

「刈谷さんとうかがいましたが」

「はい。私は今、刈谷という苗字を名乗って

いますが、結婚する前は三沢という苗字です。私のひいおじいさんが平貴家の庶子。つまた妾腹の子だったんです。ですから、敦賀の三沢家は平貴家の分家なんです」

「そうでしたか。それじゃ、あなたのひいひいおじいさんのお墓をお教えしましょう」

人のよさそうな松香寺の住職は、私たちを平貴家の墓地に案内した。

「ここが平貴家のお墓です」

立派な石塀の外に立って私と妻は啞然とした。平貴家の墓地は、墓地というよりも日本庭園と形容したほうがふさわしい。墓地の間口は約十五メートル。立派な石塀の向こうには枝ぶりのいい松が何本も植えられている。裏木戸をくぐって敷地の中に入ると石灯笼がたっていて侘びた世界である。飛び石を踏んで歩いていくと、人間の背丈を越える大きな石碑が二基立っている。石碑に刻まれた文字は、平貴家の栄光を讃えている。さらに進むと墓地は雑壇のように三層になっている。

最下層には分家のお墓が七つ。中段に最近立てられた墓誌がある。そして、一番上の段

には上品な肌色をした背伸びをしてようやく水がかけられる程の高さの墓標が三つ立っていた。

真ん中が平貴家累代の墓。向かって左側が十代目当主夫妻の墓。そして、右側が私の曾々祖父の九代目当主の墓である。

「まいったな。こんな立派なお墓だなんて」平貴家のお墓の大きさは私たちを圧倒した。そして、何よりもコンピニで買った仏花は不釣り合いだ。

妻は、仏花の束を解いて、一本づつお墓に供えていった。後は線香を手向ければいいが、この墓には線香がない。お墓に神が飾られているところを見ると、お寺といえども神道の影響を受けているのかもしれない。私は仕方なく、線香をお墓の前に寝かせることにした。

「ご本家の方々は、よくお参りにいらっしやるんですか？」

妻が住職に尋ねた。

「毎年、お盆の季節になると、皆さんで東京からいらっしやいますよ」

「そうですね。さすがに松前貿易で栄えた平

貴家ですね。こんなに立派なお墓を見るのは初めてです」

「立派なご先祖を持って、幸せですね」

住職にそういわれて私は鼻白んだ。確かに平貴家は由緒正しい金満家で誇るべき先祖かもしれない。だが、私は父から、平貴家は貧乏人から搾取して財産を築いた悪者だと聞いていた。

「昔は人間だけでなく、船にも赤紙が来たんだ。日露戦争が起きたとき、平貴家の貿易船にも赤紙が来て戦争に参加することになった。本家の人たちは、平貴家の船は貿易船だから戦場に物資を運ぶ補給船に使われるのかと思っていたんだ。だが、戦争が始まってみると、平貴家の蒸気船はなんと旅順港封鎖作戦に使われて、海軍の手で旅順港に沈められちゃったんだ。本家の人たちは船が無くなって呆然としたんだけど、当時の政府は、船を供出した功績により、平貴家に植民地になった中国の土地に縄を張れば、そこがすべて自分の土地になるという特典を与えたんだ。それで、欲に眼がくらんだ平貴家の人たちは、中国で縄を持って走ったっていうんだ。植民

地になったとはいえ、その土地を耕して暮らしていた中国人にとってはひどい話だろう」

父は、自分たちの欲のために中国大陸で奔走した自分の先祖たちを誇る気持ちはなれなかった。先祖を否定するその気持ちは、父を共産主義運動に誘い、学生運動へと駆り立てた。学生運動に走ったことは、父のその後の就職活動にも響いたに違いない。父がそうした思いならば、息子の私が平貴家の墓参りをしたことがないのも当然のことかもしれない。

妻が住職に語りかける。

「栄える家のご先祖の霊を大切にいらっしやるんですね」

「そうですね。ご立派なことです。ところで、ご本家のお屋敷の方はもういらっしやいましたか？」

「いえ。まずはお墓参りが先だと思ったので」

「そうですね。だったら、是非ご本家のお屋敷にいらっしやい」

平貴家の墓参りが住んで、私と妻は晴れ晴れとした気分になった。

北前船主の館・平貴家は墓地から歩いて二、三分のところにある。住職は館の入り口にある窓口に平貴家の親戚が東京からやってきた旨を説明した。

「入場料はおいくらですか？」

妻は住職に尋ねる。

「何をおっしゃるんですか。村の方がお屋敷をお借りして商売をしているのに、ご親戚の方からお金なんかいただけませんよ」

「でも、うちは明治の頃に分家で分かれて、ずっと親戚付き合ひもしていないんですよ」

住職は私に笑顔を見せたまま、けっしてお金を受け取るうとしない。「二、三百円のことですったもんだするのもつまらない。私は入場料を払うのをあきらめ、屋敷の門をくぐった。

玄関を入り土間で靴を脱いで板の間に上がると、部屋の真ん中に囲炉裏がきつてある。百年前以上前、弁才船から陸にあがった水夫たちが、この囲炉裏を囲んで暖を取ったに違いない。この部屋と板戸を隔てて畳敷きの大広間が続いている。大広間のさらに奥には茶室があり、枯山水の庭園が造られていた。

私は奥座敷に座って庭を眺めたが、どこもなく居心地の悪さを感じた。振り返ると、座敷から一段下がって板の間があるのが見える。板の間はもう一段下がって土間に続いている。

ご当主だった曾々祖父は茶室の主でもあっただろう。だが、曾祖父の寿太郎はこの屋敷のどこに居ることを許されていたのだろうか。妻の子として辛酸を嘗め土間にはいつくばっていたのか。それとも、船長として当主から大事にされ、奥の間に通されていたのか。実際の曾祖父がどの立場にいたのかは分からない。だが、この居心地の悪さは曾祖父がこの屋敷で感じた居心地の悪さと同じ種類のものだ。私には感じられた。とはいえ、それは私が父から平貴家の言みを悪行として刷り込まれていたことの当然の結果かもしれない。家の段差から一族の封建的な上下関係をイメージし、階級闘争の立場から指弾する。父が好んだイデオロギーの思考法である。

屋敷の壁には、平貴家が持ち船の安全を祈願して神社に奉納した船絵馬が沢山飾られる。

ている。その中の一枚には、曾祖父が船長を勤めた長幸丸も描かれていた。屋敷を見学し終えると、私と妻は日本海を見下ろす丘の上で、西洋館に昇った。

パンフレットによれば、この洋館は和洋折衷の別荘で、昭和六年に米国人が設計して建てたという。洋館の二階のバルコニーに立つと、日本海が一望できた。

「この海だわ」

「何だよ」

「だから、白桜先生が純ちゃんを霊視した時に見えたところ」

「何で、それが友美に見えるんだよ」

「本当のことを言うと、私も白桜先生のところへ行くずっと前から、純ちゃんを見ていると日本海が見えることがあったの」

「何言ってるの？ 突然」

「え…。実は、私にも昔から霊感があったの」

私は、妻が霊能に詳しいのは単なる好奇心だと思っていた。ほとんどの女性なら多少の霊感を持っている。友美はその典型だと思っていた。だが、白桜にきわめて近いレベルの能力があるのだというのだ。

「いつ、自分にそんな力があるって分かったんだよ。今まで言わないなんてずるいじゃないか」

「仕方がないでしょ。純ちゃんはお母さんのこととかいろいろなことがあったから、今は霊能力って聞いても別に变なこととは思わないかもしれないけど、藪から棒にそんなことを聞いたら、きつと私のことを奇人変人扱いしたはずだもの」

「そうかな。ぼくはそんな力があつたら便利でいいなって思うけど」

「世の中には霊能力を持っていても、誰にも言わないで隠している人はいっぱいいるの。だって、霊能力を持っていると仲間はずれにされたり、好奇の目で見られてしまうもの。だからみんなそのことを隠しているの」

「僕だったら、絶対に黙ってられなくなつて、みんなに喋つちゃうだろっけ」

「それは、本当に嫌な思いをしたことがないから言えるのよ」

「そんなものかな」

「最近、直保さんがテレビに出ること、大分世の中の人の目も変わってきたのかも

ね。でも、かえって面白半分で霊の話をする人が増えたのかもしれない」

私には霊能者然とした直保と妻のイメージがなかなかつながらない。

「でも、白桜先生のように修行をしている訳じゃないから、たいしたことはないのよ」

「そんな力があるんだつたら、何で他人に霊視してもらわなきゃならないんだよ」

「これは不思議なことなんだけど、自分のことは自分じゃよく分らないの。やっぱり自分のことには、欲とか邪念が入るのかしらね」

「床屋が自分の髪をカットできないのと同じ原理かね」

「私に霊能力があるんだなつて確実に思ったのは、昔、知り合いの紹介で夫婦ものの霊能者に霊視してもらつたときのことなの。その霊能者は私を見るなり、あなたはこの世とあの世の両方からとても強い力で引つ張られていて。そして、その力があまりに強いからあなたを霊視することはできないつて言うの。私はそのとき、この人たちは私よりも霊能力がないんだなつて、直感したわ。

私と関わりあつと自分たちが危険になつて感じたのね」

「危険になるつてどついうことだよ」

「つまり、霊能力がなくなるとか、病気になるとか。だから、白桜先生がわたしのことを何も言わないで見てくれたとき、ああ、この人は素晴らしい能力の持ち主なんだつて思ったの」

私はそれまでの出来事を振り返つてみた。すると、そのすべてにおいて、妻が霊能力を使つて行動してきたよつに思えてくる。妻はそれまで正夢とか直感という言い方をしていたが、それらはすべて霊視によつて獲られた情報に違いない。

私と妻の眼下に日本海の家が穏やかに広がつている。奇石も無ければ、海岸の景色も格別なものは何も無い。だから、白桜と妻が見たという海岸がここではないと疑つのは簡単なことである。だが、そんな無邪気な反論をする気持ちに、私はなれなかつた。

「やつと平貴家の墓参りもできたし、これだよ」

「でも、霊障を起こすのは、供養されていないお墓に入っていない霊なのよ」

霊能力があると知ってしまった今、妻の言葉はそれ

までとまったく違った響きを持って私のところに響いた。

第十章：ルーツをたずねて

敦賀から帰ってきた私はルーツについて考え始めていた。一日の仕事を終えたベットのの中で、平貫家の本家でもらった『海への祈り』という本を開いた。百五十ページほどの色刷りの本には、船絵馬の写真が多数掲載されていた。船絵馬とは、船主が持船の航海の安全を祈願して、神社に奉納するものである。木製の額の中に海があり、まっ赤な日が出が上っている。その穏やかな海の中に、積荷を満載し帆を大きくはらんだ弁才船が描かれている。弁才船は江戸から明治のはじめにかけて盛んに使われた交易船である。帆柱が一本だけなのは、鎖国政策をとっていた幕府が複数の帆柱を禁じたためだ。七福神が乗っている宝船をイメージすると、弁才船の形がつかめるだろう。ページをめくる度に船絵馬に描かれている船の様式がしだいに変わってくる。

弁才船から、ブリガンチン型と呼ばれる西洋帆船。そして、鉄でできた汽船へと、明治以降の平貫家の持船は激しく代わっていく。

船絵馬も時代が後になると絵筆で船を描いたものから、実際の船を写真に撮ったものが使われている。それは大概が入水式のものであり、船には水夫たちが居並び、満艦飾で彩られていた。

カラーページの最後に乗っている一際大きな船は北陸丸といい、日露戦争で旅順港に沈められた平貴家の誇るイギリス製の鉄鋼製の船だ。この船が沈没することによって、平貴家に莫大な富がもたらされた。

巻末には、地元の郷土史研究者による松前貿易と平貴家の歴史に関する記述があった。『口伝によれば、平貴家は伊予の国守護・河野通治の流れをくみ、南北朝の戦いに際し、通治の一族は南朝方・新田義貞の傘下となつて、西暦一三三七年金ヶ崎の戦いに参戦、その後、この地に土着、故あつて家名を平貴と改名し今日に至る』

『平貴家の家紋である井桁三紋は、伊予の河野家の角切り三紋の変形である。この井桁三紋は平貴家の旗印として馴染み深いが、当屋敷には河野家の紋所・角切り三紋の入った由緒ある品も現存する』

平貴家は南北朝で河野通治に従い、南朝側の新田義貞とともに金ヶ崎で戦った。金ヶ崎は敦賀の北に突き出した小さな岬である。この地で足利軍に敗れた平貴家の先祖は、もう四国に帰ることはできぬと思い、金ヶ崎から約二十キロ来たの入り江に落ちのびたのだから。名前が河野のままでは、足利軍の追手から身を守ることはできない。そこで家名も変えた。一族の名前は村落の名前として残ることになる。

「僕のおじいちゃんもおばちゃんも両方とも養子だから、血のつながりなんてないだろ。本当は平貴家のことを調べても自分のルーツを探したことにはならないんだよな」
「そつかしら」

荒い物を済ませた妻が上がってきた。
「だって、血は水よりも濃いって言つじやないか。上様の隠し種とか、ご落胤とかの話は沢山あるよね。それって、血が一族の伝統を守る重要な要素だって、みんなが認めていたからじゃない」
「そつとは限らないようよ。確かに血の問題はあるけど、それだけじゃない。大事なのは

亡くなった人たちの思いなのよ。想念っていうのかな。よく、守護霊とか背後霊とかいうけど、その多くはご先祖様の霊無きよね。ご先祖様は子孫に財産を残すけれど、お墓や仏壇の供養も同時に任せるのよ。亡くなった人の中には、自分があれば苦労して拵えた財産を子孫たちに残したのに、子孫たちはそのありがたみが分からないで、財産にあぐらをかいて怠けていたり、年寄りが死んだをいいことに、先祖の供養を大切にしないと嘆いているの。あの世にいる靈魂っていうのは、いつてみれば思いの塊でしょ。だから、大きな財産を残した人ほど、財産を継いだこの世の人への思いが大きいのも当然よね」

「たしかに、あの世があつて、人の思いが死んだ後も存続し続けるんなら、その理屈も成り立つけど…」
「そう考えることができれば、血縁なんていう生物学的なつながりよりも、誰が家の跡をとつたかっていう繋がりのの方が重要だってことが理解できるでしょ。私、昔いろいろなものが見え始めたときに、これは何だろうって、フロイトの夢判断やユングとか心理学の

本を沢山読んだことがあったの。フロイトの夢判断はあんまり参考にならなかつたんだけど、集合的無意識で有名なユングは、科学的な遺伝の他に心理的な遺伝があるって書いてるの。無意識っていつのは意識を超えた世界だから、限りなく霊の世界に近いと思うわ。これは私の直感だけど、ユングが集合的無意識で言いたかったのは守護霊や背後霊の影響のことなのよ」

「フロイトにユングねえ……。でも、最近の医学では遺伝子の組み換えで病気を治療できるところまで研究がすすんでるだろ。顔の形や性格が染色体によって受け継がれるのは中学生でも知っている」

「でも、こつこつ話があるの。ある家系で四人の女性が原因不明の病気で早死にしたんだって。四人が四人とも原因不明で若死にしたってことは、何か今まで発見されてない遺伝病があるのかもしれないって考えるでしょ。遺伝病じゃないなら、一緒にくらしているための伝染病・生活習慣病ということも考えられるわよね」

「ああ」

「でも、その家系の人たちはそれぞれ別々に暮らしていた。だから、伝染病ってことはありえない」

「じゃ、遺伝病なの？」

「それも絶対にあてはまらないの」

「どうして？」

「だって、その四人が四人とも、その家系に嫁いできた人だつたんだもの」

「どちらにしても病気を調べるしかないんじゃないの」

「それもなかなか難しいのよね。だって、その死のどれもが、朝起きてこないのを見に行ったら死んでいたとか、小さな怪我が原因でショック死したとか、みんな原因を特定することが難しい突然死だつたの」

「だったら、何が原因だつて言つんだよ」

「え？ だから、血縁よりも家を継ぐとかその家に入ることが重要だつていつこと」

家督相続という考えは戦後の新しい民法ではなく、長男も次男も平等になっている。私の家には家業も、相続すべき財産もないから、私には家を継ぐとか守るといふ考えはない。だから、結婚する前に苗字を変えて

欲しいと言われた時、何の躊躇もなかった。私にとって、苗字を変えることは、ジャストただそれだけの意味しかなかったのである。だが、霊的なことを考えれば、私はきわめて大きな決断をしていたのである。

「ねえ、結婚式の前に顔におできがきたり、目が赤くなつたのを覚えてる？」

「あのままじゃみつともないから、毎日病院に通つたよね」

「あのおできも結局原因不明よね」

「僕は顔をよく洗わなかつたのが原因だつて思つてたけど」

「あときは言わなかつたけど、あれは霊障だつたの。昔からよく言つただけど、体の右側に病気や怪我が出るとその人の業で、体の左側に出ると先祖の因縁なんだって」

「あの時の眼は確か左側」

「そついつこと」

「先祖の因縁っていつても、どつしたらいいんだよ。やりようがないじゃないか」

「お墓参りをしたり、ご先祖を思い出せばいいのよ」

「ご先祖を思い出そうにも、まずその前に知

ることからはじめなければならぬ。平貴家の墓参りは終わったから、とりあえず安心だが、墓の場所も分からない供養も出来ない。私は白桜が浜月家の墓のことが気になる。私は白桜が墓の場所を特定できないなら、自分でその手がかりを見つけて出して霊能者の鼻をあかしてやるうと思った。白桜の話信じるなら、浜月家の墓は四国にある。四国は、平貴家の遠い祖先である河野氏の根城である。

私は全国ロードマップを開いた。あらためて四国の地図を眺めると、川も多いし、せき止められて作られたダムも多い。四国のダムという手がかりだけでは漠然として手の着けようがない。そこで、私は近所の図書館に行ってみた。久しぶりの図書館で、「日本の苗字」という本を手にとった。この本には日本の代表的な苗字が五百収められているが、その五百の中に浜月はない。

次にルーツ探しの本を引っ張り出す。最近自分史を書くのが隠れたブームらしいが、自分史の先にあるのがルーツ探しいえる。ルーツとは英語で根つこのことだが、『アレック・ス・ヘイリーのベストセラー小説『ルーツ』

から自分の先祖という意味でこの言葉が一般化したのは有名な話だ。読み進むうちに私はこの著者に嫌悪感を覚えた。自分のルーツを探すがまるで推理小説を解いていくような動機ですすめられていく。アレック

ス・ヘイリーは小説を書くことによって、自分の祖先が奴隷として辱めを受けたことを知る。自分を知るうえで、自分の祖先を知ることが重要なことは間違いない。だが、それは推理小説を読むような愉快なことではない。自分の輝かしい経歴を残すために書いた回想録が裁判の重要な資料となって失脚したアメリカ大統領がいたように、過去はいつも苦々しい部分を持っている。そうした人生や家族の陰影について、この本は何も配慮していなかった。だが、そんな脳天気な本にもひとつだけ役に立つことが書いてあった。それは、自分と同じ苗字の人を探せというのである。自分と同じ苗字の人ならば、同じルーツの可能性がある。同じ苗字の人を探すには電話帳を調べればいい。そこで全国の電話帳が置いてあるNYの支局に行くことにした。

新しい電話機がいくつも飾ってあるロビ

ーの一角に全国の電話帳が何十冊も置いてあった。

「四国の多分西の方でしょう」

霊能者の言葉を思い出し、愛媛県の五十音別電話帳を片っ端から調べていく。浜と月といえば、それこそ月並みに思えるが、それが苗字とあると珍しい。五十音別電話帳は市町村ごとに分かれているから、愛媛県の市町村の数だけページをめくることになる。私は五十以上ある総ての市町村を調べたが、浜月という苗字はない。

次に高知県と徳島県を調べたが、浜月の名に出会うことはなかった。やはり、白桜の霊能力に頼るしかないのか。NYから帰った私は、次第にそう考えていた。

第十一章：盲編

何度モ京都に往復するとなると電車賃も馬鹿にならない。三度目の霊視は妻だけが行くことになった。そして、これまでの二回の霊視で大方の方向は見えているから、私が見届ける必要もないだろう。とはいえ、霊視から帰ってきた妻に霊視のようすを尋ねるところは忘れなかった。

妻は、ゆっくりと霊視のことを語り始めた。

霊視はいつものように始まった。数分間の沈黙のあと、白桜が掲げた手を下ろすと、いつものように神州専務はメモを取るために電気スタンドを点灯する。幾度も経験しているので、妻は霊視室の暗闇の中でも平常心でいることができた。

「大分いろいろなことが解けてきました。これはあなたの努力のたまものですよ。」

「ありがとうございます。」

「あなたの親戚で、ごなたか狂いしにした女の方がいらっしやいますか？」

「はい。その方は父の妹のワカさんではない

でしょうか。」

妻は亡くなった父から、叔母のワカのおぼろげながら聞いていた。

「お名前は分かりませんが、その方は若くしてなくなられています。」

「確か、叔母は二十歳前後で亡くなったと聞いています。」

「その方が盲編の着物が欲しいとおっしゃっています。」

「盲編ですか？」

「そういう着物があるのかどうか、私は着物に詳しくないから知りませんが、きっとそういう種類の反物があるんでしょう。調べてみてください。」

「はい。」

「盲編の着物が手に入ったら、その方のためにお焚き上げをして供養してさしあげましょう。」

「盲編ねえ……。」

妻も私も盲編なんて見たことも聞いたこともない。仕方がないので、デパートの呉服売り場に出かけてみた。

「盲縞って着物、置いてますか？」

売り場の若い店員は困り果てて、どこかに消えてしまった。暫くすると、五十過ぎのいかにも呉服屋の主人といった感じの男性が現れた。

「盲縞ですか。あれは今置いてないんですよ」

「そうですか。それは残念だな。で、…あの、その盲縞ってどういう着物なんです？」

「ご存じないんですか？」

「え、…ええ」

「盲縞ってというのは、言には紺一色にしか見えないような細かい縞が入っている着物なんです。うちでも昔は売り場に置いていたんですが、地味な着物で、なかなか売れないので大分前に置かなくなりました」

「一反、いくらぐらいなんですか？」

「そうですねえ。まず百万は下らないですよ」

「そうですね。百万ですか」

妻と私は顔を見合わせた。

「盲縞は値段が張る高級品といっても、所詮普段着なんです。でも、普段着にお金をかけ

るっていうのが、本当の粋なんですよ。大島紬や黄八丈を代わりに如何ですか？ 今とっても人気があるんですよ」

「実は、どうしても盲縞が欲しいって頼まれてましてね」

「そうですね。それじゃ仕方ないですね。最近を着物を知らない方が、紬を訪問着にしたなんていうちょっと昔だったら笑い話にもならないようなことがあります。今じゃ笑い話にもならず、感心されてしまうんですよ。まあ、何十万円もする普段着なんて本当の贅沢ですから、勘違いされる方がいらっしゃるのも無理はないんですけどね」

「はあ…」

「まあ、お客さんは盲縞をご所望なさるくらいでいらっしゃるから、そんなことはないでしょうけど」

着物をねだっているのが、亡くなった靈魂だと白状することはできない。私と妻は店員に会釈すると、そそくさと呉服売り場を引き上げた。

「お焚き上げて、ただ燃やすことだろ。そのためだけに百万円もする着物を燃やすの

か。それじゃまるで札束を燃やすようなもんだけ」

「盲縞なんて、とても手が出ないわね」

「亡くなって何十年経っても、百万円の着物が欲しいだなんて、ワカさんはよっぽどの贅沢好きだよな」

「そうかしら、贅沢が出来なかったから、執着が残ってしまったのかもしれないわ。ねえ、盲縞って正絹のものしかないのかしら。もし、木綿の盲縞があるのなら、もっと安いはずよね」

私は学生時代の友人で、染色をやっている朋子のことを思い出した。彼女は鎌倉で染色の工房を開いている。私は横須賀線に乗って鎌倉へ向かった。鎌倉駅から駅前の商店街を歩いていると、ここが中世からの歴史の街であることを忘れてしまつた。

休みの日に鎌倉へやってくる若者たちは、まるで原宿にでも来るように鎌倉に来る。メインストリートには、そんな若者たちを相手にした洋服やファッションシーグッズを扱う店が立ち並んでいる。だが、その中に一軒だけ昔ながらのたたずまいで民芸品を売る店があ

った。シヨウウインドウには、鎌倉彫りのお盆や文箱が並んでいる。店の中には若者たちの喧騒を避難しているかのような中年の夫婦の姿が見えた。朋子の店も、物の分かる人種で賑わっているといいが。賑やかな商店街から住宅地に入ると、すぐに朋子の工房の看板が眼に入った。

シヨウウインドウには生地を生かして染色されたブラウスや帯、花瓶敷きが置かれている。扉を開けて中に入ると、工房の中には喫茶コーナーがあり、三尺のショーケースを間仕切りにして、染色の作業場があった。

作業の手を休めた朋子が顔を上げると、懐かしい笑顔が現れた。

「あら、三沢君、久しぶり。どうしたのわざわざね」

結婚式の挨拶状を出していない朋子は、私を旧姓で呼ぶ。

「いやね。急に朋ちゃんの顔が見たくくなってね」

「何言ってるの。聞いたわよ、結婚したって。奥さんに言いつけちゃうわよ」

妻が工房の中に入ってくる。

「いらつしやいませ」

朋子は妻に挨拶をする。

「あ、純之助さんと結婚した妻の友美です」

朋子は、「はじめまして」と、言ったとたん噴き出した。

朋子と妻の間で私は小さくなった。朋子が入れてくれたコーヒーを飲み干したところで、私はようやく切り出すことにした。

「盲編って知ってるかな？」

「盲編？ 私は織ったことはないけど、どうして？」

「実は、盲編の着物を探してるんだ。でね、この間デパートに行つて盲編のことを聞いたら、一反百万円もするっていうんだよ」

「そつね。正絹の一反物だったら、それくらいはするでしょつね」

朋子は机の引き出しを空けて、生地の見本を取り出した。十センチ四方のハギレが小さな鉄の輪でまとめられている。

「私も詳しくは知らないけど、多分こんな生地が盲編よ」

朋子が差し出した見本は、茜色の細かい縞だった。

「これは木綿だからそんなに高いもんじゃないでしょう」

「これって着物にするといくらぐらいするのかね？」

「一反作るとすると、それでも十万円ぐらいはするかしら」

「それでも十万円か」

「反物って注文生産になると値引きがきかないでしょ。そうすると普段の値段の倍以上になるのよ」

「そうか」

「でも、どうして盲編なの？」

私は妻のほうをつががった。すると、仕方が無いともいうように、小さく頷いた。

「実はね……」

私は朋子に亡くなった叔母の話をした。

「ねえ、その叔母さんが亡くなったのはいつ頃なの？」

「亡くなったお父さんが二十歳そこそこの頃だから、昭和の四、五年でいうところかしら」

「昭和のはじめの人が欲しがった着物ねえ。着物の資料っていうと、元禄時代のものとか、

大昔のものは沢山出ているけど、比較的最近のものはなかなかないのよね。ほら、この服飾史の本にも、大正デモクラシーや戦時中の服装はあるけど、昭和初期っていうのは出てないわ」

「でも、今でも百万もする着物を欲しがるなんて、友美の叔母さんも警沢好きだよなあ」

「そうかしら。それは、きつと三沢君の思い違いよ。確かに正絹の盲縞は今のデパートで百万円かもしれないけど、昭和のはじめにそれがいくらだったかは分からないわ」

「そうかな」

「これは私の想像に過ぎないけど、その叔母さん、警沢好きなんかじゃなかったと思うわ。だって、亡くなって何年も思いを残している着物がこんな地味な柄だなんて、普通じゃ考えられないと思うの。叔母さんはずっともつましい暮らしをしていて、いつか盲縞って思いついたとしても、縞を着ていたんじゃないかしら」

「でも、木綿の盲縞にしたってねえ」

「もし、本当に警沢好きだったとしたら、友禅とか絞り染めとか、もっと派手な柄の門と

高価な着物を欲しがっているはずよ。もし、私が死ぬときにどうしても欲しい着物は何って考えたら、盲縞なんかより、もっと高価な晴れ着をあげると思うな」

「たとえば、総絞りの振袖とか」

妻が朋子の話に加わった。

「そうそう。でも、私これでも死ぬまでには結婚するつもりなのよ」

「そりゃ、そうよね。これは失礼しました」

「いいえ、どういたしまして。まあ、冗談はこつちにおいておいて、友美さんの叔母さんって、何が何でも盲縞が欲しいって言うんじゃないかって、自分のために新しい着物をつくって欲しかっただけじゃないかしら」

「朋子さんもそう思うの？ 実は私もなんとなくそんな気がしてるの」

「盲縞が何だって？」

工房の奥から、八十歳を過ぎた朋子の祖母が現れた。

「あ、おばあちゃん」

「お客さんかい？」

「こちら学生時代からの友達の三沢君と奥さんの友美さん」

「そうかい」

「丁度よかった。彼が盲縞について知りたいんだって。ねえ、おばあちゃん知ってる？」

「盲縞ねえ。あの着物は、大正から昭和にかけて、とっても流行ったんだよ。あの頃は国中が戦争に向かってたから、派手な恰好で町を歩いていると非国民って罵られたもんだ。だから、お金を持っていても、堂々とお洒落はできなかった。でも、どんな時代も女は女だからね。着物を裏地を少し派手な生地にしてみたり、こつそりお洒落をしていたもんだ。だけど、盲縞ね。あたしは二度とあんな着物は着たくないね」

「盲縞って、そんなに流行ったんですか？」

「そうねえ、あの流行は今でいうと何になるかねえ」

「たとえばシャネルスーツとか？」

「いやいや、そんな高価なものじゃなかった。なんたって、絹の盲縞ならまだしも、木綿の盲縞は町娘の定番だったからね」

「そうですか。それだけ流行ったものなら、戦前の映画を作るときには必ず盲縞の着物が出てくる訳ですね」

「あんた賢いね。だったら大船の撮影所に行くといいよ」

鎌倉からの帰り、横須賀線の車窓から、大船の観音様が見えた。

「映画の衣装っていつでも、女優さんが袖を通したものでしょ。それじゃ古着と一緒に意味がないわ」

「そうかな」

「だって、つましい暮らしの中でせめて盲編の着物が欲しいって思ってたんでしょ。古着なんかじゃ供養にならないわよ」

とはいえ、百万円を盲編に出せるほどの余裕は私たち夫婦にはない。また、仮にそれだけのお金を使ってお焚き上げしても、一枚の着物くらいでは供養しきれないほどの思いを叔母の魂は抱えているだろう。

今は失われてしまった盲編とはどんなものだったのか。まるで推理小説を読んでいくようなわくわくした思いがあった。だが、盲編の着物について分かってくると、そのようなくわくわくした気持ちは薄れ、会ったこともない叔母の悲痛な思いが私を捉えて話さなかった。

叔母の人生がどうだったのか。それを知ることが供養の近道に違いない。叔母ワカのことを知っている可能性があるのは、妻の父の兄弟だが、まだ生きているのは、ワカさんのすぐしたの弟の専太郎と、その下の妹のしめ子しかない。

専太郎は今、都内の大病院に入院している。妻は専太郎を見舞いに行つて、直接ワカさんのことを聞いてみようとも思ったが、病人につらい昔のことを聞くのかわいそうだと躊躇した。そこで、とりあえず、千葉で暮らしている叔母のしめ子に電話をいれてみることにした。叔母は十年以上前に夫に先立たれ、今は娘夫婦と一緒に暮らしている。妻は、仏事の相談をきっかけに、それとなくワカさんのことを切り出した。叔母は微かな記憶を頼りに、話はじめた。

「ワカさんよね。ワカさんって友美ちゃんのお父さんのすぐ下の妹でしょ。たしかワカさんが亡くなった時、私はまだ小学校の二、三年生の頃だったんじゃないかしら。でも、ワカさんに遊んでもらったっていう記憶が私には不思議とないのよね」

「そうなんですか」

「ワカさんは、早くから川崎に奉公に出ていたからね。ワカさんの唯一の記憶っていうと、私が学校から帰ってくると、おくの座敷の蚊帳の中でワカさんが病気で寝ていたってことかな。なんだかとっても暑い夏の時期だったのを覚えてるわ」

「何の病気だったんですか？」

「肺結核じゃなかったかしら。ワカさんは奉公先から病気になるって帰されたのよ」

「奉公先って、何をしてたんでしょうね」
「よくは知らないけど、女中奉公かなんかじゃないのかしら」

「じゃ、おばさん、ワカさんが亡くなったときのことを思い出して。お葬式のことか覚えてるでしょ。うちのお父さんもすぐ下の妹が亡くしたんだから、とっても悲しんだんでしょうね」

「そうねえ」

受話器の向こうで、叔母は突然無口になった。

「ごめんなさい。叔母さん、健忘症がはじまつてね。最近、めっきり物忘れがひどくなっ

て」

「いいえ、こちらこそ久しぶりに電話したのに、悲しいことを思い出させちゃって、本当にごめんなさい」

「あら、本当にワカさんが亡くなった時のごとがぜんぜん思い出せないわ。最近も娘からお母さんはアルツハイマーだ、痴呆症だって悪口を言われてるのに、ああ、これは重症だ。でも、待って、江本家の過去帖を見れば命日は分かるはずよ」

「それはいい考えね。叔母さん、まだ呆けてないじゃない」

「ありがと。そう言ってくれるのは友美ちゃんだけよ。うちの娘なんか私のことを年寄り扱いして、孫と一緒に私のお金を年寄りばあちゃんですって。だから、私は、『あんたみたいな孫はいませんよ』って言ってやるの。あ、そうそう。過去帖だったわね。ちょっと待ってね」

叔母は仏壇の引き出しから江本家の過去帖を持ってきた。

「あら、おかしいわね。ワカさんの名前が過去帖にのってないわ」

仏壇のある家には必ず過去帖がある。過去帖とは掌サイズの帳面で、中には一日から三十一日まで命日に合わせて先祖で亡くなった人の戒名と俗名を書くようになっていゝる。今の人は命日というと一年にいつべんの祥月命日のことを思うが、一昔前までは、命日といえば月命日のこと。昔の人は月に一度墓参りをするのが当然のことだったのだから。

「この過去帖は母の十三回忌で江本の本家が仏壇を变えるときに、私にもって菩提寺のご住職に作ってもらったものなのよ。でも、おかしいわね。お寺さんの名簿をもとにつくつた筈なのに…」

叔母は過去帖を何度もめくってみたが、どこにもワカさんの名前は見当たらなかった。「ごめんなさいね。ワカさんはやっぱりつてないわ。ご住職が書き忘れたのかなあ」「きつとそうよ。おばさん、あんまり気にしないでね。ワカさんのことはちょっと気になつただけだから…」

妻は叔母の健康を気遣う言葉をかけて電話を切った。

老人性痴呆症の患者は、さつき食べたものは忘れていゝるが、何十年前前のことはまるで昨日の出来事のように覚えていゝる。叔母にはワカさんが奥座敷で伏せていたという記憶はあつた。だが、葬儀の記憶はないという。その上、菩提寺の記録にも、ワカさんの命日も戒名もない。昭和初年といえば、今から七十年ぐらい前である。生前のワカさんを知る人はもう殆どなくなってしまつていゝる。生きていゝるにしても、専太郎叔父のように病院に入院していゝて、話を聞くこともはばかられる状態も珍しくない。

ワカの調査はここであきらめて、白桜の霊視に頼る他ないのか。

あきらめの境地で私は江本家の家系図を広げる。

「そうだわ。茨城の寅吉おじさんがまだ生きていゝるはずだわ」

妻は私から家系図を取り上げる。

「生きてるつて、一体いくつなんだよ」

「寅吉つていうくらいだから、当然、寅年生まれでしょ。ということは…」

私は高島曆を開いた。今年で満九十一歳で

ある。

「お正月に年賀状が届いていたはずよ」

妻は年賀状のファイルを持ってきた。

「もう何年会ってないかしら。私が子供の頃、寅吉おじさんがよくモンブランのケーキを持ってきてくれたのを覚えているわ」

「でも、九十一歳のおじいちゃんだろう。ちやんと話ができるのかどうか」

寅吉おじさんと妻は呼んだが正確にいうと、友美の祖父の弟。つまり、友美の父、光晴にとつての叔父さんだった。友美の父の叔父ならば、ワカさんの事情を詳しく知っているに違いない。

私は九十一歳の老人が呆けていないことを祈った。

第十二章：長老たち。

「ゴルフ場の看板を目印にすれば、簡単に我が家に辿り着けます」

寅吉の家は東関東自動車道を成田のひとつ先で降りて、そこからさらに一般道を四十分ぐらい走ったところにある。

寅吉の一人娘の昌子の言葉を信じて、予定のインターチェンジを降りたが、一般道の最初の交差点には二十個近いゴルフ場の看板が立てられていた。

私は林立する看板の群れからようやく彼女が口にしたゴルフ場の看板を見つけ出すと、ウインカーを傾けた。

利根川にかかる橋を渡ると、一面に水田が広がっている。あたりは霞ヶ浦に近く、水郷といわれている。交差点を越えるたびにゴルフ場の看板の数は減っていく。ようやく看板がひとつだけになった交差点を曲がると、赤いトタン屋根の家が見えてきた。リビングに続いた応接間に通されると、私と妻は寅吉の前に座らされた。

妻にとつて、二十数年ぶりに会う寅吉だっ

だが、あまりに変わっていないのでびつくりした。寅吉はこれが九十歳を過ぎた老人かと疑うほど、肌はつやつやしているし、脚も丈夫そうだ。歯もぎりりと並んでいて丈夫そうだった。私は総入れ歯に違いはないと思っただが、彼がバリバリと大きな煎餅を齧る姿を見て、九十まで生きるような人は土台が違うのだとおそれいった。

お膳には昌子の作った天ぷらや魚介類のサラダが並べられた。

「たいしたものではありませんが、どうぞ召し上がってください」

ビールを注がれると、私と妻は昌子の手料理を頂戴することにした。私たちがいる座敷とつながっているダイニングキッチンには、昌子と彼女の夫、そして、娘がふたりテーブルを囲んでいた。姉妹の姉は三十すぎ、妹は二十歳を越えたあたりだろうか。妹は用もないのに、応接間とダイニングキッチンの間を行ったり来たりしている。姉の方はテーブルについたままだったが、すぐに姉妹がふたりとも精神に障害を持っていることが分かった。

「とってもおいしいですね」

進歩的な心理学者は精神病の原因の八割は霊障。つまり、霊的な因縁が原因だと明言している。寅吉の孫娘が精神障害者だと気づいたとき、私はすぐにこの場を立ち去りたいと思った。

「おじさん。うちのお父さんの妹、ワカさんのことを教えて欲しいんだけど」

「ワカさんねえ。川崎に奉公に出てたってことは知ってるけど、それ以上は何も知らねえや」

私は、寅吉が口の端でニヤリと笑ったような気がした。

「そうですか。おじさんも知らないんですか」

寅吉は妻と私に対して、まるで年寄りが自分の孫に接するように終始明るくなごやかだった。だが、そのはにかんだような明るさは、彼がワカが亡くなった時の事情をすべて知っていて、それを隠しているための表情なのではないかと邪推させた。

「おじさんも、人生山あり谷ありで大変でしたね」

「そうかもな。だが、わしの苦勞を知っている人間はもう殆どあの世に行っていないってしまった」

「うちのお父さんもその中のひとりですよ」

「友美ちゃんのお父さんねえ。実は最初はお父さんじゃなくて、わしが刈谷の家に養子に行くはずだったんだよ」

「そうだったんですか」

「でも、お父さんは慶応に行ったぐらいだから勉強ができた。そこで刈谷の婆さんが、どうせ養子に来るなら、若くて勉強が出来るほうがいいやあってんで、それであんたのお父さんが養子に行くことになったんだ」

「もし、おじさんが刈谷の家に来ていたら友美は生まれていなかったってことですよ」

「まあ、そういうことだな」

寅吉は機嫌よさそうに大きな声で笑った。

「ねえ、記念写真を撮りましょうよ」

妻の提案に私はカメラを構える。寅吉を中心に娘夫婦、孫ふたりをいれた記念写真を撮影した。

写真を撮り終わると娘の昌子がコーヒー

とお菓子を運んできた。記念写真をきつかけに、孫の姉妹も座に加わった。彼女たちは感性を刺激するために、オペラや展覧会に足しげく通っている。彼女たちも感じる術は持っているが、自分が感じたことを表現する術を持っていないだけなんだ。私は、彼女たちがもし霊障が原因で精神に異常を来たしているなら、京都の白桜のところへ連れて行きたいという衝動に駆られた。だが、白桜の霊視を前に解決しなければならぬ問題がある。それは寅吉が一族の過去を隠蔽していることに他ならない。

私は、寅吉の機嫌の良さに、彼が隠蔽しなければならぬものを深刻に抱えていることを感じた。ワカさんが非業の死を遂げたのと同じ理由で、この家のふたりの娘に障害が起きている。そのような思いを私は振り払うことができなかった。

こうなると都内の大病院に入院している専太郎に、ワカさんが亡くなった事情を聞くしか方法は残っていない。だが、皮肉にも、次の日の朝、専太郎死亡の連絡が入った。

私は午後六時に仕事を切り上げると、桐ヶ谷斎場へ向かった。映像ディレクターという職業柄、ジーパンにジャンパーといったラフな服装で仕事をしていることが多い。だが、この日はお通夜があるため背広を着て家を出ていた。私は山の手線を五反田で降りタクシーに乗ると、車の中で黒いネクタイに締めなおした。

桐ヶ谷斎場は、火葬場であるとともに葬祭場でもある。火葬場の建物に葬祭用の建物が続いている。出席者の少ない家族葬から、大勢が集まる社葬まで、さまざまな規模の葬儀に対応できるように、間口の広さが何種類にも分かれている。

入り口で江本家の葬儀の場所を確認すると、私は駐車場の中を突っ切って行く。江本家の葬儀は斎場の中で二番目に大きい会場で開かれていた。

江本家と書かれた行灯の前には、もう数十人の行列ができていた。受付には専太郎の長男と長女のそれぞれの会社の名前を書いた紙が貼られている。叔父の葬儀に参列するのは、広告代理店の営業部長を勤める長男の靖

と、外資系のシステム会社に勤める長女の久仁子の会社関係が殆どのようだ。

専太郎はかつて地方官庁の職員だったが、退職して二十年近くともなると、故人に直接面識のある弔問客が少ないのも仕方ないことだ。私は弔問客の中に妻を探した。どうやら、まだ到着していないようだ。

私は生前の専太郎に会う機会はなかったから、悲しくてやりきれないという感情はない。不謹慎なこともかもしれないが、何故専太郎が生きているうちにワカのことを聞き出せなかったのかという後悔のほろが大きい。人ひとりの死に対峙するという厳粛な思いだけが、振る舞いを神妙にさせていた。

同僚の涙にもらい泣きをする若いPなどを見ると、故人を知っていると、知っていないということは大して問題ではないと思えてくる。生きている人が死んだ人の魂をあの世に送り出す。そのためには、できるだけ沢山の人のパワーがあった方がいい。その意味では、若い女性の涙にはパワーがありそうだ。専太郎の成仏は間違いなし。と、私は思った。

受付の行列から一人離れて立っていた私を、妻は見つけ出した。

「なんだ。こんなとこにいたんだ。今、叔母さんに会ってきたとこ」

「そう。で、受付は？」

「親族だからいいの。さあ、読経が始まるから中に入りますよ」

「ああ……。ねえ、今専太郎叔父さんってどこにいるんだよ？」

「え？ どこって、棺桶の中に決まってるじゃない」

「そうじゃなくって、臨死体験なんかの話だと、自分の葬式の風景を上から見てるって言うんだろ」

「そうねえ、今は見えないけど、さつきは見えたわよ」

「さつきって何時？」

「ちょっと前、葬儀場の表から叔父さんの祭壇を眺めてた時、祭壇の左側の上に丸く叔父さんの顔が浮かんできたわ」

「叔父さん、何かしゃべったのか？」

「しゃべりはしなかったけど、ニッコリと微笑んでいたわ。叔父さん、淋しがりやだった

から、きつと賑やかなのを喜んでるのよ」
「そか。そいつはいいや、なら成仏間違いないだ」

葬祭場の中に入ると、最前列に江本の叔母といとこの靖と久仁子が座っている。きらびやかな袈裟を身に纏った僧侶が読経を開始した。読経の中ほどで、葬儀社の進行係が親族から順に焼香を始めるように合図した。江本の叔母、靖、久仁子と焼香が進められていく。それぞれの顔に、叔父への看病の疲れと葬儀の準備への疲れが見えた。だが、そんな疲れも家族を失った悲しみから比べればたいたことではない。私と妻が焼香する番になった。

遺影に向かって手を合わせながら、専太郎叔父とはこういう顔だったのか。と私は思った。焼香を終え、江本家の人たちに会釈すると、叔母は赤く腫らした眼をしながら深々と頭を下げた。

私は憔悴する叔母に、妻がさつき見た叔父の微笑みの話をしたくて仕方がない。だが、この会場で専太郎の霊が見えたなどと口にするのは危険だ。ひとつの危険は、私と妻

が気違い扱いされる可能性。もうひとつは、叔母がその話を正直に信じすぎて、何から何まで妻の能力に頼ってしまうことである。

僧侶が読経を終えて帰ってしまったも、まだぼつと参列者が訪れてきた。焼香を終えた参列者は、一階に用意された通夜ぶるまの席に通される。参列者はビールにお酒、天ぷらにお寿司で小腹をつないでから家路につく。通夜式が終わったからといって、直ちに食べ物に群がるのをためらった私は、葬儀場の表にふたたびたざずんだ。目の前を長女の会社の外国人が通り過ぎる。その白人女性はいかにも重役秘書といった感じ。彼女は葬儀には不似合いな真っ赤なツーピースを着ていた。

欧米には喪服という習慣はないのか。と思っただが、ツーピースの袖と襟の部分には大きな黒い縁取りがしてあった。その黒いラインが彼女の弔意を示しているのだろうか。

焼香台に近づいて行く彼女に気づいた久仁子は焼香のやり方を英語で教えている。

南無妙法蓮華經に英訳はあるのだろうか。「ねえ、今日は百人以上の人が弔問に来てる

けど、叔父さんの姿が見える人って何人いるのかな？」

私は傍らの妻に聞いてみる。

「きつといないでしょうね」

「でも、女の人は勘が鋭い人が多いっていうし、金縛りとか、旅館で幽霊を見る人もいるよね。だから、普通の人はそういうのを見ても、自分の勘違いだなんて思うだけで、人には言わないだけじゃないのかな」

「私は、自分が見た霊の話の特別なことがない限り人に言わない習慣がいつの間にかできてしまっただけ。それって、人から変な目で見られたり、仲間はずれにされないための生活の知恵だったりする。でも、私や白桜先生のように見えている人は殆どいないはずよ。私に見えるようなレベルと、普通の人が立つに幽霊を見るのでは、まったく違うのよ」

「一体どついついことだよ」

「一言でいえば、霊能者と霊媒体質の違い。幽霊を見るっていつのと、霊を見るのとの違い。だって、叔父さんの霊を見て、幽霊だなんて言ったら、叔父さんが可哀相でしょ」

「それはそうだけど…」

「それに霊能者と霊媒体質の人の決定的な違いは、霊媒体質の人は霊に憑依されやすいこと。その意味では、勘がいいからって妙なことをすると悪霊にとりつかれて、とんでもないことになるの」

「だったら、霊能者っていつのは、どう違うんだよ」

「人によって能力は違うのかもしれないけど、生きている人に対してと同じように、死んだ靈魂とも話ができるのが霊能者。だから、成仏したがない霊に成仏を説得したり、とりこごととして悪霊を追い払うことが可能なの」

自分の妻から特殊な能力を持っているとあまりにはつきり言われてしまうと、返す言葉がない。私は妻とともに二階に上がって、通夜振る舞いの席に加わることにした。宴席にはすでに叔母しめ子の姿もある。妻はこの間ワカさんのことを叔母に尋ねていた。

お通夜は翌朝まで一晩中線香を絶やさないので一般的な風習だが、この近代的な斎場にはお通夜の終了時刻が決められていて、そ

の時刻以降は火の用心のために祭壇の蠟燭は勿論、お線香をたくことも禁止されている。それは疲れきっている遺族にとっては合理的で楽なことかもしれないが、営業上の理由や火の用心というこの世の都合で、あの世に旅立つ魂への儀礼が曲げられていいのだろうか。否、霊的な話を持ち込まなくても、肉親の死を受け入れる遺族の気持ちにとっても、一晩の鉄や重要な儀式であるに違いない。だが、すべてのこの世の事情を受け入れてお通夜のスケジュールは進行していく。

私は通夜ぶるまいの宴席で無口になった。

専太郎が葬儀から三週間あまりが立った土曜日。ふたたび白桜志津の霊視の日がやってきた。前回の霊視からはすでに二ヶ月が過ぎていた。私と妻はいつものように薄暗い霊視室にはいった。蠟燭の明かりだけの部屋は線香の煙がたなびいている。蠟燭と線香は白桜が背中を向けている祭壇に飾られているから、彼女の姿は黒いシルエツトになっている。

蠟燭の光は線香の煙の力を借りて、いくつ

もの筋になつて見える。白桜は数珠をかき鳴らして、精神統一から霊視にはいつていく。

私にとつて、久しぶりの霊視である。初めて霊視に来たときから、すでに半年が過ぎようとしていたから、私のスピリチュアルな世界に関する知識も、考えも大きく変わってきた。

霊視に立ち会う人間が、霊能者の能力を信じていなかったり、霊視の成功を一緒に祈っていないと、それは霊視を妨害していることになる。霊視に参加することは、霊能者とともに祈ること。だとすれば、霊視に関する客観的な記述は、この世に存在しないことになる。

私は、白桜に、「霊視をしていただいてあげがとつございます。ワカさんのことや盲編のことが先生の能力でもっと分かりますように」と念じていた。

十分ほど経つただろうか。白桜はふたたび数珠をかきならし合掌すると、記録係の神州に合図した。神州が電気スタンドをつけ、メロ神を取り出したのを確認すると、白桜は静かに話しはじめた。

「今はもうここにはいらっしやらないんですが、あなた方と一緒にここにはいつてらした方がいます。その方は、とてもやせた男性の方です。やせていると言つても、そうですね、弱い感じではなく、結構骨太な感じの方ですよ」

「その方は最近亡くなった方ですか？」

妻はうつむいたまま、白桜に質問した。

「そうです。比較的最近お亡くなりになりました方です」

妻も私も、それが先日亡くなった専太郎に間違いな思つた。

「こつという言い方は、その方に失礼になるから、あまり申し上げたくないのですが、もうここにはいらっしやらないからいいでしょう。その方の頭はラッキョウの実をひっくり返したような、ひよろつとした感じ。友美さん、どなたかそつという風采の方に心当たりはありませんか？」

妻は、手を膝の上に合わせて置き、俯いたままだったが、確信に満ちた口調で話し始めた。

「その方は先月の末に亡くなった私の父の

弟に間違いないでしょう」

「そうですか」

意外な話の展開に私は驚いた。

「その方は自分が亡くなることを長い闘病生活で覚悟していたので、この世に未練はありません。しかし、亡くなった今でも、この世に残っていた家族のことが心配で、光の差す方向に進んでいけない。そして、誰かを一緒に……。ああ、奥様のことですね。この世に残してきた奥様をあの世と一緒に連れて行くとおつしやっています」

「叔父ががいがいしく自分の世話をしてくれていた長女が三十歳を過ぎたので、一刻も早く読めにやらなければならぬと、ずつと心配していたんでしょ。自分が亡くなると、家は母ひとり娘ひとりの家族になつてしまつ。お母さんをひとりにすることができない優しい性格の娘のことを思つと、娘が結婚して幸福になるためには、娘の結婚の障害となる叔母と一緒にあの世に連れて行つた方がいい。もしかすると、叔母も娘の面倒になるのが気苦労がなくていいと、叔父は考えているのかもしれない」

「私は、この方がご家族のことが心配なあまりに光の方向に歩いていけないことが心配でなりません」

白桜は私に語りかける。

「人殺しをしたり、自殺をしたような人の場合は別ですけど、普通、人が死んですぐの頃は、大きくて暖かな光がなくなった方の霊魂に差し込んでいくんです。しかし、亡くなってから時間が経つにつれて、今まで大きかった光はだんだん弱く小さくなっていきます。死んだ当初は、光の世界という未知の世界に行くことは億劫だし、この世を離れたんだという自覚も薄いですから、霊魂はこの世をうろろろしています。しかし、その間にも光はどんどん小さくなっていて、いつの間にかそれがどちらの方向があるのか分からなくなるほど、光は小さくなっています。気がつくあたりは真っ暗で、寒くてジメジメしていたたまれない場所なんです。そうすると、もう霊だけの力では光の方向に進むことが出来なくなっています。この状態が不成仏霊というものです。霊能者の役割はそういう成仏できないでいる霊を光の方向に導く

ことです。具体的には、霊能者が不成仏霊と一緒に光を求めて霊界を彷徨う行をするのですが、これは霊能者にとっても生死をかけた、とても危険な仕事なのです」

人は死ぬと三途の川を渡るといふ。川ではなく砂漠があるという海外の臨死体験の報告もあるが、どちらにしても、人は死ぬと霊界というこの世に近い一段階から、霊界という第二段階に進み、その第一段階と第二段階の境界線が、日本では三途の川であり、ある国では砂漠なのだろう。

専太郎が亡くなってから、まだ一月に満たない。聞くところによると、人が三途の川を渡るのは、四十九日忌のことだといふ。ならば、専太郎の霊はまだ三途の川を渡っていないことになる。これ以上話を複雑にしないためには、盲編はともかく、専太郎に三途の川を渡ってもらわなければならぬ。

私は三途の川と臨死体験でいうところの光の位置関係が頭の中で統合できずにいたが、専太郎が叔母をあの世に道連れにしていることとして、この危機感を覚えた。だが、この危機を乗り越える術を私は持っていない。

い。

「友美ちゃんの叔父さんは何かいいかげに畑を指していらいしゃいます。どうも、この土地の名義が気になっているようです。でも、まだ亡くなってから日が浅いから自分の言いたいことをはっきり伝えることが出来ないようですね」

私は白桜に質問する。

「人の霊魂は亡くなると幽界から霊界へと飛んで行って、だんだんこの世から遠ざかって行く。だとしたら、死んだすぐ後の方が近くにいるんだから、霊魂と話がしやすいんじゃないですか？」

「ご主人。確かに近いという意味ではそうでしょう。でも、霊界は次元が違っただけで、現世とは背中合わせの場所にあるんです。亡くなってすぐの人が自分の言いたいことを伝えられないのは、あの世での意思の伝え方に慣れていないからなんです。人はこの世で口を使って声を出して話をするけれど、あの世では肉体がないから声を出すことはできません。そこで、念を使ってコミュニケーションするんです。でも、なくなったすぐの霊は長

年言葉を使ってきたから、なかなか念を使うことが難しいんです。どちらにしても、叔父さんは、この畑が気になっていているようです」「畑ですか？」

「はい。何か原っぱというか、畑というか」「叔父が住んでいたところは東京の住宅地ですから、周囲に畑なんかありません。住んでいる家にしても、借地のはずですから、土地で相続の問題は多分ないと……」

「そうですね、分かりました。調べてみれば、必ず原因があるはずですよ。それから友美さん、あなたに伝えたいことがあったようです。それを伝えられなかったことを叔父さんとはとても後悔していらつしやいます」

「そうですね。叔父は戦争に行つて人を殺して帰ってきたことを一生の重荷として背負っていたようで、自分の過去のことは一切身内にも話さなかったんです。叔父はワカさんのことについて何か言っていますか？」

「いや、やはり死んですぐの方はなかなかしゃべることが難しいようです。でも、大丈夫。そのうちあなたに話してくれることですよ」

白桜は確信に満ちた言葉で霊視を締めくくった。

ワカさんや言綺が今回の霊視で新たな展開を見せるのかと期待していたが、この日の展開は思わぬ発展を見せた。現世の人間に何かを訴えたいことのある霊は、その言葉を聞くことのできる人間を頼りに集まってくる。ならば、専太郎が霊能力のある妻の所にきて、自分の家族へのメッセージを伝えてくれと頼むのも当然のことだ。

昭和初期の江本家の事情を知っている専太郎は亡くなり、ワカさんが亡くなった時のことを知る最後の頼みの綱はなくなってしまった。しかし、そんなことで落ち込んでいる場合ではない。専太郎を成仏させるという新たな目標が妻と白桜、そして、ある意味、私にも課せられたのだ。

京都から帰ってきて何日かが過ぎたが、妻は専太郎の残された家族に白桜の霊視の結果を打ち明けられずにいた。意外なことに、妻はいままで親戚は勿論のこと、親兄弟にも自分に霊能力があることを話したことはなかった。そのうえ、今は白桜志津の霊視を受けている。興味本位や間違った伝わり方をすれば、妻も私も親戚たちから非難的になる。いかがわしい新興宗教にとりつかれ、狂ったことを言っていると一度噂を立てられたら、そうではないと反論することはなかなか厄介なことだ。人が信じようと信じまいと霊界が存在することは間違いない。ならば、あの世の存在を信じるという言い方さえ、間違っている。しかし、霊界や霊の存在を自分の感覚で捉えることができない人は、信じることでしか存在を確かめることができない。一方、霊能力がある人間にとっても、信じることで初めて霊界とのコンタクトが可能になるという事情もある。

専太郎の四十九日忌の前日、叔母から電話

が入った。

「友美ちゃん。うちのお父さんの今度の四十九日にお塔婆を立てたいんだけど」

叔母は両親の葬式をすでに出している妻のことを頼りにしているらしく、菩提寺との付き合い方についていろいろと相談してきた。話はいつしか、嫁に行った小姑の愚痴話になっていった。

「おばさんもいろいろあって大変ねえ。ところでね、私、この間夢枕におじさんが立ったのよ。でね、少し気になっていることがあるの」

妻は先日のお霊視の結果をそれとなく話していく。

「ねえ、おじさんが気にしてるみたいなんだけど、土地の名義が何かでもめてない？ おばさんのところは確か借地だったわよね」

「そうよ」

妻は亡き父から火災保険の代理店を引き継いでいるから、おばの家の権利関係には詳しい。

「だったら、他に土地を買ってない？」

叔母はしばらく考えると、

「そういえば、長男の靖が北海道に出張に行ったとき、いい土地があるから買って買いたかったことがあったの。でも、靖ったら自分で欲しいって言うときながら、お金を持つてなかつたんで、それを見かねたお父さんが、俺が出しといてやるよって言って、靖の名義で土地を買ってやったことがあったわ。でも、後になって、うちのお父さんは生真面目だから、自分でお金を出したことが税務署にばれたら、生前贈与になるからどうしようかって気にしてたのよ」

「おばさん。その土地って、もしかして畑じゃない？」

「畑かどうかは知らないけど、電気も水道も通ってないから、ずっと放りっぱなしだよ」

「あのね、おじさんが、その土地がどうなってるのか気にしてらしいの。死んじゃって、私にしか知らせることが出来る人がいないから、出てきたのよ」

「あら、まあ。そうなの。友美ちゃんにはそんな力があるのかい。おったまげた…」

叔母は驚きを隠せないでいたが、妻の言うことを疑わなければかりか、とても明るい。

「それから、おばさん。もうひとつびっくりしないで冷静に聞いて欲しいんだけど」

妻は、叔母の気持ちに穏やかになるのを待ちながら、言葉を慎重に選びながら続ける。「あのね、おじさんはおばさんのことをとても心配しているの。それと久仁子ちゃんのこと。それで、このままだとおばさんが久仁子ちゃんの結婚の邪魔になるし、それじゃおばさんも心苦しいだろうって。だから、どっちにしても、おばさんを一緒にあの世に連れて行ったほうがいいって……」

「ま。お父さんがそんなことを。おつとろしや。お父さんこそ一人で勝手に先にあの世に言っておいて、勝手なことを」

「おばさん。でも、心配しなくていいの。明日はおじさんの四十九日忌でしょ。明日、みんなでおじさんが安心してあの世に旅立っていけるように祈りましょう。そうすれば、おばさんもおじさんにあの世に連れて行かずに済むわ。うちの夫婦も一生懸命にお祈りするから、頑張りましょうね」

そう言つと、妻は四十九日忌のお祈りの仕方を説明した。その要点をまとめると次のよ

うになる。

故人が光に向かつて進むように祈る。

この世で上手くいかないことがあつても、それが故人のせいではないと祈る。

この世のことは生きている人間だけでも、それが故人のせいではないと祈る。

頑張るから心配はないと祈る。
故人の霊を惑わすような悩み事や愚痴は勿論のこと、頼みごとなども一切祈つてはいけない。

もし、頼みごとをしても、亡くなってまだ日が浅い霊は力が弱いので、この世に影響を及ぼそうと思つても、かえつて事態を悪化させる場合があること。その一番の霊が私のおしつこが出なくなつた事件だ。

結局、妻と叔母の電話は一時間以上の長電話になつた。

専太郎の四十九日忌の朝、私と妻は江本家の菩提寺のある下町に向かった。気象庁はまだ入梅を宣言していなかったが、空はどんよりと重たそうに垂れ下がり、雨粒が時折フロントガラスを濡らした。車が商店街に入つて

行くと、露天商の屋台がいくつも並べられている。出番を待つお神輿が小雨を避けてテントの中に置かれているが、午前中のこの時間、天気を気にする露天商たちが仕込みをする姿しか見当たらない。

六月の東京は三社祭をはじめ数多くのお祭りが催される。この界限でもそのひとつが開かれるのだ。私と妻は車を参道に停めると、本堂の待合室に入つて行つた。待合室には、すでに江本家の親戚が集まつていた。通夜、告別式の時には涙で顔を腫らしていた人たちも、今日は普段の表情に戻っている。遺族同士がその姿を確認することが、死後四十九日後に法事を行う意味のひとつかもしれない。

死者が成仏するには、生きているものが平常心を取り戻すことが必要なのだろう。専太郎の遺骨を抱えた叔母たちが現れたのは、定刻ぎりぎりだった。長女の久仁子が出席者の確認をとると、一同は本堂に移つて専太郎の四十九日忌の法要が始まつた。法要をすすめるのは、六十過ぎの住職と三十そこそこの僧侶である。この宗派では、お経の間に銅鑼を

叩いたり、小さなシンバルのようなものをグルグル回しながら鳴らしたり、結構賑やかだ。何故、故人をあの世に送り出すために読経だけでなく、鐘や太鼓が必要なのだろうか。故人の霊を霊界に送り出すためには、僧侶のスピリチュアルなパワーがあればいいのではないか。お経を読んで修行することが、僧侶のスピリチュアルなパワーをあげることにつながっているのだろうか。

私は、「迷わず光の方向に向かって歩いてください。迷わず成仏してください」と、心の中で念じた。

叔母も神妙に俯いて祈っている。長男の靖の二歳の娘だけが、むずがって本堂の中を走り回っている。

妻は目を半眼に開きながら、専太郎の成仏を一心に祈る。すると、彼女の脳裏、ヨーガの用語でいえばチャクラにドライアイスの煙のような雲の流れの映像が浮かんできた。ドライアイスの煙は川のように見え、妻はそれが三途の川であることが分かった。

よく見ると、その川のこちら側には専太郎が立っており、川の向こう岸には何人もの人

が立っているのが見えた。向こう岸に立っているのは専太郎を迎えに来た親や兄弟だろう。しかし、川幅がとても広いので、向こう岸に立っている人が誰なのか判別できない。「行きたくない。心配だ」

叔父の淋しげな呟きがテレパシーになって妻に伝わってきた。妻が専太郎に同情したとたん、妻の膝が突然痛くなった。彼女はその痛みが専太郎のものであることを直感した。

「おじさん。もう脚も胸も痛くないのよ。あの光の方向は身体がとっても楽になる暖かなところだから行かなくっちゃ」

妻が送ったテレパシーに心えるように、ドライアイスの煙に覆われた川の上に小さな橋がさつとかがった。だが、妻に見えた橋は、欄干のあるような一般的な橋ではなく、向こう岸に向かって人がひとりやっと通れる幅だけドライアイスの煙が左右によけたもの。モーゼの十戒では海が左右に別れ干上がった海底を歩いて向こう岸に渡ったが、三途の川の場合はどうも水の上を歩くことが出来るようだ。

「光の方向に歩くの。もう、おじさんは死んじゃったんだから、身体はごも悪くないし、ちゃんと自分の脚で歩けるのよ」

妻のテレパシーが伝わったのか、専太郎はとほとと歩き出した。だが、歩き出すとすぐに立ち止まり、今まで来た方向を名残惜しそうに振り返る。

「おじさん。ちゃんと歩いていかなきゃだめじゃない」

このままでは、専太郎が光の方向に歩くのをやめてしまうと、妻は思った。

「途中まで一緒に私が行ってあげる」

妻が専太郎にテレパシーを送ると、予想していなかったことが起きた。妻は突然ジェットコースターで急降下した時のような衝撃を受けた。気がつくと、妻は専太郎の隣に立っていた。それまでの妻の状態が映画館で映画を観ているようなものとすれば、今の妻の状態はその映画の中の登場人物のひとりとして入ってしまった。オカルト用語でいえば、ジェットコースターに乗る前が霊視であり、乗った後が幽体離脱である。妻には光が眩しすぎて、その光を見ることができない。

妻は寄り添いながら、光の方向に向かって専太郎の背中を押した。

「さあ、早く」

妻が話しかけると、専太郎は淋しそうに微笑むと、背中を向けたまま左手をちよつと挙げて、「分かった、分かった」と言うように頷きながら、ゆつくりと光の方向に従って、百米ートルはありそうな川の中ほどまで歩いていった。すると突然、大きな光の中に専太郎の笑顔が浮かんだと思うと、それは瞬く間に消えてしまった。

そして、妻は川の真ん中にひとり残されていると思つ間もなく、再び大きな衝撃を受けた。こどもが泣き叫ぶ声が入ったので、妻は再び現実の世界に戻ったことを意識した。

現実の世界に戻り我に返ると、妻は専太郎が光の方向に歩き始めて本当によかったと感謝の気持ちでいっぱいになった。

読経の中で、出席者の焼香が始まった。叔母を先頭に出席者は次々と専太郎に思いを馳せながら焼香をしているが、故人が三途の川を渡っている今の姿を見ることはできな

い。妻の経験した幽体離脱は、肉体から靈魂が離れる状態をいう。最近ではテレビ番組でもりあげるほど、臨死体験は流行語になっているが、臨死体験は言い方を変えれば仮死状態で起こる幽体離脱である。したがって、幽体離脱は仮死状態と同じだといつていい危険な状態だ。私は、ついさっきまで妻がそんな危険な状態にいたなどと思ひもよらなかつた。

本堂での法要は三十分ほどで終わった。卒塔婆を何本も抱えた私は出席者たちの流れに従つて本堂を出て、本堂裏にある墓地に向かつた。

「友美ちゃん、昨日はいろんなことを教えてもらつてホントにありがとね。でも、ほんちに友美ちゃん、いろいろなこと知ってるね」「いいえ」

「昨日、電話口でおばさん、ほんとにびつくりしたわ。畑の土地のことなんて、友美ちゃんが知ってるわけないのにねえ…。それで、あの後、靖に電話して確かめたのよ。それから、靖も土地のことを忘れて、そういえば、あれは生前贈与になるのか、相続税がかかる

のか調べてみないと」

妻と叔母の話に靖が加わった。

「そうなんだよ。実は、俺もびつくりすると同時に、死んだ後もそんなことを心配してるなんて、親父らしいやつて…。ホントに、親父は根っからごまかしたり、間違つたことが嫌いな役人だったんだなあ」

靖は目頭を熱くした。

専太郎の骨壺はカロートに収められる、墓に蓋がされた。私と妻は、日本の家族が一心にお墓に手を合わせる姿を見て安堵した。家族のそれぞれが心の中で、迷わず光の方向に進んでください。家族のことはみんなで頑張つて仲良くやっていきますから心配しないでください」と、祈っているのだろう。

納骨を終えた親族一同は、場所を江本家近くの寿司屋に移して宴席となった。一時間も立つとお酒もはいつて宴席は賑やかになった。ひとり帰り、ふたり帰り、寿司屋から江本家まで残つたのは、叔母が気落ちするのを氣遣つた叔母の実の兄弟たちだった。そして、打ち解けた雰囲気の中で妻の不思議な能力のことが話題になった。叔母や長男の靖、そ

して、長女の久仁子も妻の話を聞きたがった。専太郎を成仏させる努力は四十九日忌が済んだからといって終わる訳ではない。

妻は、読経の時に三途の川で専太郎に会ってきた話をした。

誰一人として、妻の話を馬鹿げた作り話だと笑うことも、興味本位に面白がることもない。妻の語る専太郎のしぐさに在りし日の姿を思い浮かべ、江本家の人々と一様に涙した。

第十四章：除籍謄本

家庭裁判所の調停日が迫っている。遺産を巡る姉妹同士の争いの原因が霊的な因縁によるものであっても、霊的な方面ばかりに気を取られてばかりもいられない。ワカさんや浜月家の因縁が根本的な原因だとしても、現実的な対応がなければ問題の解決は望めない。

裁判に備えて、妻は母の残したダンボール箱の整理を始めた。母の遺した書類の中に裁判の役に立つものがあるかもしれない。逆に、母の筆筒預金が見つかりでもしたら、遺産をわざと隠していたことに何て、事態を一層複雑にしてしまう。ダンボールの中には、母のお稽古事の教本や旅行の時に集めた箸袋など、細々とした物が詰まっていた。いくつかの箱を開いた後、ブリキで出来た四角い煎餅の缶の中から、戸籍謄本のコピーが出てきた。

「お父さんが亡くなった時に取り寄せた戸籍謄本だわ」

妻から受け取ると、私は一枚ずつ吟味して

いった。

一つ目は、四枚綴りの除籍謄本で、妻の父・光晴が自分の生家の江本家の戸籍を抜けたことを証明するもの。

二つ目は、一枚だけの除籍謄本で、光晴が養子先の刈谷ヨシの戸籍に入ったことを証明するものだった。

三つ目は、養母ヨシより家督相続をした光晴が戸主のものである。当然のことながら、三つ目の書類には私の妻の友美や義母、そして、嫁いでいった姉たちの名前も記載されている。

住所は旧番地で町名は戦後の町名変更で消えてしまった大井鎧町。記載されている文字は達筆過ぎて読みにくい。私は、漢字で書かれた年月日をアラビア数字に書き換えて整理した。三つの書類を照合すると義父・光晴の人生は次のようになる。

刈谷光晴は、明治四十四年（一九一一年）七月二十一日に生まれている。

「原戸籍二因り出生場所オヨビ届出人ノ資格、氏名ヲ知ルコト能ザルニ付、記載省略ス」

とあり、出生した場所は正確には分からない。しかし、専太郎の出生地が大井鎧町とあるから、叔父が生まれた大正六年（一九一七年）にはすでに大井鎧町に住んでいたことが分かる。多分大正六年以前に役場が火災に遭って、原簿が消失したのだろう。焼けてしまった戸籍を復活するために戸籍係の役人が各戸を回って話を聞き、戸籍簿を新たに作っていったに違いない。

除籍謄本には、同居人の総ての氏名、生年月日、父母の名前、続柄が記載されている。光晴の生家は両親の他、祖母、曾祖母、六人の兄弟姉妹、叔父三人、叔母一人の合計十三人家族である。先になくなったものも、後から生まれたものもいるから、十三人がひとつ屋根の下に暮らしていた訳ではない。事実、盲編を欲しがったワカさんについての記載を見ると、

「大正三年一月十三日出生、昭和七年九月二日午前十一時十分本籍地ニ於イテ死亡、戸主江本伍一届出」と書いてあるだけだ。彼女がどこで暮らして、どういう訳で亡くなったかはこの書類では何も分からない。だが、この

記載は、暑い自分に亡くなったという叔母しめ子の証言と符合する。この書類は昭和二十二年四月、光晴の実父の死去にともなって抹消されているから、戦災は免れたのだろう。どちらにしても、光晴は大正六年、刈谷家に養子に出され、江本家の戸籍より除籍されている。

ふたつめの戸籍謄本からは、光晴の養子先の事情が伺える。戸主は刈谷ヨシ、刈谷ヨシは文久三年（一八六三年）に栃木県栃木町に生まれ、明治四十二年（一九一九年）に刈谷福次郎と結婚している。記載が正しければ、彼女は四十六歳で結婚したことになる。とはいえ、これはあるまで書類上のことだから、内縁関係のままの事実婚が長く続いていて、なんらかが必要が生じて、または、障害がなくなつて、この年齢になつてようやく戸籍を入れたということも考えられる。

ヨシの夫、福次郎は大正十四年に死亡し、家督相続によりヨシは戸籍を設けた。光晴は、福次郎が死んだ五年後の昭和五年にヨシのもとに養子に入っているが、不思議なことは光晴の実家と養子先の戸籍の住所が同じこ

とである。養母ヨシは昭和六年に死亡したため、光晴は刈谷家の家督を相続した。

光晴は昭和十七年五月にまきと結婚、昭和十九年に長女、昭和二十二年に二女、そして、昭和三十一年に友美を設け、昭和六十年十月五日に満七十四歳で亡くなっている。

遺された除籍謄本を見る限り、浜月家についての記載はどこにもない。だが、義母は妻に、福次郎が浜月家に養子に出たものの、何らかの事情があつて刈谷家に戻つてきてしまった。福次郎はその時、浜月家のかんりの財産を引き継いだ。光晴の本籍地になつている土地も、もとはといえば浜月家の土地だったのかもしれない。これでは先祖の霊が快く思わないのも仕方がない。しかし、お墓の場所が分からないのでは、事情を知つた私とて打つ手はない。

福次郎の妻のヨシは、明治四十二年三月二十二日に福次郎と結婚して、子供ができぬまま、十六年後の昭和十四年に夫と死別している。ヨシにしても、福次郎が浜月家から刈谷に戻つてから結婚しているため、浜月家のお墓の事情を知らなかったのかもしれない。な

らば、そこに養子に入った光晴が浜月家のお墓の場所を知らないのも無理はない。しかし、戦前までは祖霊信仰が今とは比べ物にならないほど強かつた。大正十四年の関東大震災の時には、着のみのままで焼け出された被災者が、ご先祖の位牌だけは燃やしてはならぬと、位牌を抱えて炎の中を逃げ惑つたという話を聞く。火事の多かつた戦前から浜月家の位牌が現在に残されているのは、浜月家の先祖への信仰心の現れである。にもかかわらず、福次郎の生家の刈谷の本家や親戚たちと付き合いはおろか存在さえ伝わっていないのは異常である。その異常さの裏には、きつと財産を巡る親戚同士の仲たがいがあつたのではないか。でなければ、本葬、一周忌、三回忌、七回忌と続く法要をめぐつて親戚同士のやりとりがあるはずで、そのような機会

は幼い子どもにとつても印象的な出来事だから、語り継がれるはずだ。田舎であればどんなに仲違いをしても村八分といつて、火事と葬儀の二部だけは協力したものだ。だが、ここは東京である。付き合いをしなければしないですむ。そんな都会人の人づきあいのス

タイトルが、明治時代にすでに出来ていたのかもしれない。

結局、遺された除籍謄本から浜月家に関する情報は一切出てこない。あきらめ顔の私から除籍謄本を取り上げた妻は言う。

「ねえ、大正十四年九月十二日、前戸主福次郎死亡二因り選定家督相続人前戸主妻ヨシ相続届出、同十五日十一月一日受付。つてあるわ」

「だから？」

「同じ所番地にきつと福次郎さんが戸主の除籍謄本があるはずだわ」

「そっか」

昭和六年に亡くなったヨシの戸籍が残っているなら、大正十四年に亡くなった福次郎の戸籍が残っている可能性もある。

「でも、福次郎さんの戸籍なんて、誰でも調べだすことができるのか？ 最近は本人じやないと住民票を取るのも難しいぞ。俺、自信ないな」

「そうね。じゃ、それは私が上手くやるわ」
東京府荏原郡大井町は現在の品川区の管轄である。次の日、私と妻は品川区役所に向

かった。妻は除籍証明の申請用紙に必要事項を記入すると、戸籍係の窓口にし出した。「大分昔の頃のものなんです、戸籍が抹消されたのが、多分大正十四年なんですけど」戸籍係の女性は申請用紙をしげしげと見つめた。

「この方とあなたのご関係は？」
「私の祖父なんです。実は墓地の整理をしなければならぬことになりました」

「そうですか。それは大変ですねえ。大正十四年ですか。とういことは西暦一九二五年。戸籍の保存期間は八十年ですから、多分残っているでしょう。そちらでかけて少々お待ちください」

私と妻はわくわくしながら戸籍係に呼ばれるのを待った。八十年前といえば、一九一二年。大正元年になくなった人の記載は残っている。仮に大正元年に亡くなった人を想定すれば、その戸籍には一八三二年からの記録が残っていることになる。ということは江戸時代の天保年間である。もし書庫の中を風漬しに探すことが許されるなら、浜月家の手がかりを見つげ出すことができるかもしれない。

い。

五分ほどすると戸籍係が刈谷福次郎の除籍謄本のコピーを持って現れた。それによると、刈谷福次郎は、安政三年十月十七日（一八五六年）に父・平七、母カウの二男として生まれている。生まれた住所は分からない。だが、この戸籍を設けるにあたる経緯として、次のような記載がある。

「神奈川県横浜市高島町八丁目、刈谷平吉叔父分家、明治四十年二月二十三日届出同日受付」

家族は分家後の明治四十二年三月二十二日に入籍したヨシだけだ。

「やっぱり、浜月家に養子に行ったなんてどこにも書いてないわ」

「考えてみれば、一旦刈谷家に戻ったんだから、浜月家に養子に出されたことが書いてないのも当然だよな」

「でも、明治四十年の記録が残っているなんてね……」

「そつだよな。関東大震災も第二次世界大戦の空襲も免れたんだからたいしたもんだよ。待てよ。戸籍が駄目なら、土地の登記簿を調

べるっていう手があるんじゃないか」

私の提案に妻は同意して、土地の登記係へ行くことにした。戸籍係と違い、区役所の土地登記のコーナーは賑わっていた。集まってくる人の多くは、土地に付けられている借金を確認しに来た金融会社や不動産会社の社員たち。傍目にも、彼らが殺気立っているのが分かる。

私は旧番地と新住所表示の対応表をめぐりながら、新住所表示で土地登記簿の閲覧申込書を書いた。だが、職員から渡された該当番地の登記簿ファイルには、戦前の記載がない。

「純ちゃん。戦前の登記簿がないのは当たり前よ」

「どうして？」

「品川区役所は空襲で燃えちゃったのよ。戦前の家も空襲で燃えちゃったんだけど、大井町の駅前のいい場所だったから、戦後すぐにバラックが建ったんですって。それで、お父さんたちが疎開先から帰ってきたとき、ここはうちの土地だからどいてくれて頑張って頑張ったらしいんだけど、登記簿がないから土地を

諦めるしかなかったんだった」

「でも、戸籍は燃えずに残ってたんだぜ」

「きつと品川区役所は燃えたけど、大井村の役場は戦災で燃えなかったのよ」

私は妻の言葉に納得した。すると、この登記簿閲覧コーナーにいる殺気立った人たちが急に身近に思えてくる。戦後まもなくこの役場の登記簿コーナーに現れたであろう光晴。その当時とは建物は勿論、場所だって変わっている。だが、私の脳裏には刈谷家、そして浜月家から受け継いだ財産の総てを失い呆然とする光晴の姿がまざまざと立ち上がってきた。

家に戻ってから、私はもう一度福次郎の除籍謄本を見直した。福次郎さんの前の除籍謄本をもらいに横浜まで行くしかない。私はロードマップで横浜市のパージを広げた。福次郎の本家は横浜市高島町八丁目とある。横浜市高島町は、現在の横浜市西区高島町となっているが、二丁目までしかない。横浜市は区役所に分かれているから、どこに行ったらいいのだろう。私はとりあえず西区役所に電話で問い合わせてみた。福次郎の本家の戸主と

住所を言うと、刈谷平吉の除籍謄本があるという。翌日、雨の中を私と妻は横浜に向かった。

横浜の住宅街の中に西区役所があった。駐車場に車を止め、区役所の門をくぐると、私は申し込み用紙に品川区役所から貰った除籍謄本から福次郎が除籍した本家刈谷平吉の名前と高島町の番地を記入する。五分ほど経つと、戸籍係が書庫から戻ってきた。

「当該番地には、刈谷平吉さんの除籍謄本は見当たらないんですが」

「おかしいですね。昨日、電話で問い合わせたら、こちらにあるっていうから、わざわざ東京からやって来たんです」

「少々お待ちください」

私の申し出に、職員はもう一度調べに書庫に入っていた。それからまた五分経った頃、ようやく刈谷平吉の除籍謄本が出てきた。

刈谷平吉の本籍地は横浜市西戸部町。高島八丁目調べていたのでは見つかるはずはない。高島町八丁目を調べていて、西戸部町の戸籍が見つかったということは、転籍元と転籍先がそれほど離れていなかったからな

のではないか。

「大正十二年九月一日火災二罹り滅失二付大正十二年十二月二十六日日本戸籍ヲ再生ス」

大正十二年九月一日、関東大震災が起きていた。横浜市役所は、関東大震災で消失したのだろう。消失した戸籍簿を再生するために、戸籍係が聞き書きをして、戸籍を新たに作ったのが、その時の暮れの十二月二十六日なのだ。

「叔父、刈谷福次郎、安政三年十月二十七日生、刈谷平七、二男。東京府荏原郡大井町二分家届出。明治四十年二月二十三日、大井町戸籍吏不詳。受付年月日不詳。送付除籍」

福次郎に関する記載は簡素なものだった。

「やっぱり浜月家のことは載ってないわね」

「分家したのが、戸籍が燃える十六年前なんだから、戸籍に名前が載っているだけでもありがたいと思わなくっちゃ」

「でも、福次郎さんの実家の戸籍もなんだか複雑そうね」

刈谷平吉は明治三年生まれで、彼が十二歳の明治十五年に祖父の平七から家督を相続し戸主となっている。祖父から孫へ家督が相

続された理由は、平吉の父・清吉が早世したことが原因だ。成人していない平吉を戸主にするにあたり、後継人として叔父の福次郎を立てた。そのため、福次郎は養子先の浜月家から戻らなければならなかったのかもしれない。しかし、不可解なのは平吉の母の欄が空白なこと。そして、平吉と福次郎が本籍を同じにしていた高島町の住所が、平吉の妻になる田坂キンの実家と同じであり、平吉はキ

ンと二児をもうけた後に、キンと入籍していることである。平吉は若い頃に放蕩して、キ

ンの家に居候を決め込んでいたのか。平吉とキンが婚姻届を出し、二児が嫡出子となった翌年、福次郎は分家している。放蕩した平吉も結婚したから、これで大丈夫だと福次郎は思い、大井町に分家したのか。否、平吉は昭和十八年に亡くなっているのに、昭和五年に養子になった妻の父は平吉の存在すら知らなかった。ならば、平吉は結婚を機会に福次郎を厄介ばらいし、以後、絶縁状態になったのだらう。

でなければ、後見人といえれば親代わりである。親ともいえる福次郎の法事や墓参りに平

吉が大井町の刈谷家へ顔を出し、在りし日の福次郎の話から浜月家の経緯の情報が、妻の両親にもたらされていたらう。

人は出来れば、自分の人生や出自を取り繕ったり、飾り立てたいものだ。だから、お上に提出する戸籍簿には、恥ずかしい部分はないべく載せたくなかったに違いない。だが、破綻のないようにいくつかの経緯を差し引いて役場に提出したにもかかわらず、不可解な部分が出てしまう。

妻の父・光晴の実家と養子先の住所が同じこと。そして、祖父福次郎の実家の住所と戸主平吉の内縁の妻の住所が同じこと。除籍謄本がみせたふたつの事実は、明治、大正、昭和と年号は変わっても、同じような因縁の力に翻弄された刈谷家の人たちの生き様を表現している。私は、その不思議な力を感じないではいられなかった。

第十五章：放生会。そして、一周忌。

そして、一ヶ月が過ぎた頃、私と妻は再び京都へ向かった。今回の京都市行きの目的は、霊視を受けるためではない。白桜が主宰する共善会では、毎年秋になると放生会という行事を行う。放生会とは、読んで字のごとく、生き物を放す会である。指摘された鴨川の河原へ行くと、大会本部用のテントが張られていた。開会の時刻にはまだ時間があつたが、すでに五十人程の人が集まっている。家族連れあり、老夫婦あり、集まった人たちはまるで町内会の慰安旅行のようだ。その集まりの中で一際目を引くのが白桜志津。紫色のチャイナスーツを着たその姿は、霊能者というより、教祖といった方がふさわしい。

「私たちの食を満たすために殺されている生き物たちを供養することにより、自分たちの罪を謝罪するのが放生会です」

開式の挨拶に立った白桜は、集まった会員たちに訴える。

「私は普段から十善戒に従って生きようよ、皆さんを指導しています。その中に汝殺すな

かれという不殺戒があります。殺すなどしても、人殺しなんか自分とは関係がないと思つている人も多いでしょう。しかし、食べるということは殺生です。人間は食べなければ生きていけない。ならば、自分を生かしてくれる生き物にも感謝が必要です。今日は、日ごろの罪を反省し、殺生した生き物たちの霊を慰めるために、鯉や鮒、どじょう、蟹を川に放していただきます」

霊能者はスピーチを終えると、川に向かって合掌し読経をはじめた。

読経が始まって暫くすると、神州専務の指示に従い、参加者たちは鴨川に魚を放流していく。私はその姿を眺めていた。

「ねえ、あなたはやらないの？」

妻は私を促す。

「この魚たち、どうせ生簀で飼われていたんだろ。だとしたら、この魚たちはこの川に放流されて喜んでるんだろ。勝手に人間が魚に放流しても、かえって、それが自然のバランスを乱すことにもなりかねないんだよ」

「刈谷さん」

振り返ると白桜が立っている。

「放生会に疑問をお持ちのようですね」

「あ…。い、いえ」

「勘違いをされて困るのは、放生会は自然保護のために行っているのではないということとです。共善会は、すべての魂の救済を目指しています。総ての魂とは、生きている者の魂、死んでいる者の霊魂、そして、動物、植物、好物など、すべての霊です」

「…」

「確かに、最近では日本中で自然が失われています。そのためには木を植えなければなりませんし、生き物も大切にしなければなりません。しかし、木を植えるといっても何を植えるといいのです？ 人間の浅知恵で木の種類を決めていいのでしょうか。生き物は大きな自然のバランスの中で生きています。人間の好みでもって、特定の生き物をえこひいきするのも自然のバランスを乱すことになります。私たち共善会のテーマは、直接保護活動をするのではなく、そうした行動のもとになる魂の浄化です。どんなに自然保護が叫ばれ、人々が自然と接することになっても、

野や山に捨てられるゴミが増えることはあつても、減ることはありません。その理由は、人間の魂が汚れから解放されないで、上辺だけの浄化に終始しているからなのです」

霊能者の言葉に私は反駁することができなかった。とはいえ、彼女の言うことをまるごと信じてしまうこともできない。

「刈谷さん、分かりましたか？ いや、分かつてもよろしい。肝心なことは行動そのものの中にあるのです。川に魚を放流することも、合掌して線香を手向けるのも同じこと。行為だけ捉えて、意味を見つけ出すことに価値はないのです。あなたのように理屈理屈で物事を捉えようとしていると、何も先に進めなくなってしまうですよ」

私はただただ霊能者の前で立ち尽くした。「ご主人。私は毎日あなた方ご夫婦のご先祖さまのために行行行って、最近幾分和やかなものを感じるようになってきました。先祖供養も大分進んでいるようですね」

私は、これまで出来る限りの努力をしたことを霊能者に明かした。だが、それはひとつとして供養ができていないことを知らせる

ことでしかない。

「それだけ一生懸命探されたのなら、それが一番の供養ですね」

「でも、原因が分からなければ因縁を解くことはできないでしょう」

「確かに、墓に合掌し、線香を手向けることが一番の供養になります。しかし、それが叶わないというのも現実です。人は、別れるときに、よく『私を忘れないで』と言いますが、亡くなられている方も同じです。ご主人と友美さんが、言編のことを探しているときは、ワカさんのことを思い出していたでしょうし、浜月家のお墓を探しているときは、浜月家の人たちのことを思い出していたんです。それがとても大きな先祖供養になったんです。それから、友美さん。あなたはぜひぐんと霊能力を身に着けましたね」

「は、はい」

「あなたの霊能力は、先祖供養をする中で大きく成長しました。その力は、もう私を必要としないほど十分に強いものです。あなたは勘のいい人だから、自分たちの先祖のためだけになく、人のためにも使いなさい。それが、

あなたの使命なんです」

白桜と妻、そして、私が見つめる向こう側には会員たちが魚を放流している。その風景は一見すると楽しい川遊びだ。だが、なかには障害者を連れた親子の姿もある。そして、その他の参加者たちも何らかの霊的な因縁を抱えているのだろう。

放生会から数週間経つと、義母の一周忌がやってきた。

集まった親戚たちを前に、浄縁寺の住職は仏壇に向かって二十分ほど読経した。あつけなく法要は終わり、一回は座敷に移り一周忌のお清め膳になった。ひととおりの料理が出て、ビールで住職の顔がほんのりと桜色になったところで、私は住職に尋ねる。

「ご住職。人はなくなつて四十九日経つと三途の川を渡るっていいんですけど、今お母さんはどのあたりにいるんでしょうか？」

「そうですね。一般的に言われている通りだとすれば、三途の川を渡つた向こうは彼岸です。すから、あの世ですなあ。賽の河原があつて、閻魔様が待っていて、極楽へいくか、地獄へ

いくかを決めるんですね。ま、おかあさんの場合は大丈夫。信心深い方だったですから、成仏されて極楽浄土に行ってますよ。」

「本当にそうなんですか？」

「どうしてです？」

「最近では、よくテレビや雑誌で臨死体験が取り上げられているのをご存知ですか？」

「臨死体験ねえ」

「九死に一生を得た人の中には、三途の川を途中まで行った人や、死後のせかいに行つて、観音様やお釈迦様に会つたという人がいるんです。」ご住職は、今日は亡くなった義母のために読経してくださいましたが、本当にお母さんは成仏しているんでしょうか」

「ご主人、故人に失礼なことをいうもんじゃないありません。お母様は立派に成仏されていますよ」

「どうしてそれが分かるんですか？」

「どうしてといわれても困るが、この浄縁寺がお母様の供養をやっているからといってはいけなかな」

「はあ……」

「世の中には、自分に上手くいかないことが

あると、すぐにご先祖の因縁だ、水子の霊だなんて騒ぐ人たちがいます。また、これは僧籍にある私が言うのもおかしな話だが、神社やお寺にお参りして自分の願いが叶うように頼むというのも、決して褒められた話じゃない。自分の願いは自分の努力によって、達成するのが一番尊いこと。なのに、世の中には賽銭箱に一万円札を入れて拜む大馬鹿者もいる。寺に来てすがすがしい気分になつて、自分を奮い立てる。まあ、その程度の意味で寺を使うのがいい」

「じゃ、ご住職は、輪廻転生を信じていらつしやらないんですか？」

「私は寺の住職だぞ。輪廻転生は信じるとか信じないというレベルをはるかに越えて、身体にしみ込んでいるさ。しかし、人間にとつて一番大切なのは、この世を一生懸命生きること。つまり、極楽に往生できるように、毎日修行を積むことだよ。人間、我欲を捨て、人を思いやつて生きていけば、極楽に往生できるものさ。ご主人みたいに、先々を詮索していれば、成仏できるものも成仏できなくなつてしまふ。あの世のことは、この世の人間

がとやかく言うべきものじゃない。それが道理というものだよ」

親戚全員に送られると、住職は上機嫌で帰つていった。

住職の話を妻に告げると、妻は、「あの坊さんはもともと学校の歴史の先生だったからからね」と、あきらめ顔で言う。教師にとつて宗教もひとつの物語でしかないのだから。

すると、江本の叔母が言う。

「純之助さん。あなたがご住職に確かめた気持ち、よく分かるわ」

「四十九日があのお世に旅立たせる法要だつていうのに、うちのお寺なんか友美ちゃんがいなかったら、お父さんをあのお世に行かすことができなかったのよ。お経料やご供物料を沢山取つておきながら、成仏させられないなんて、そんなの詐欺みたいな話よね。いくら見えない世界のことだつて馬鹿にしてるわよ。おばさんなんて、友美ちゃんがいなかったら、今頃、お父さんに引つ張られてあつちに行つていくかもしれないのよ」

「ええ……。まあ」

「でも、友美ちゃん。友美ちゃんには、今お母さんがどこにいるか分からないの？」

「それがね。私、たまにお母さんが二階で歩く足音は聞こえることがあるんだけど、それ以外はさっぱり分からないのよ。やっぱり、当事者っていうのは、雑念が多くなって見えるものも見えなくなってしまうよね」

「そうかい。それは残念だねえ。私が言うのもおかしいけど、友美ちゃんは、お墓のことも、お仏壇のこともきちんとしてやっているから、きっとお母さんも成仏しているわよ」

「それならいいんですけどねえ。何せ、心配ばかりかけてた娘ですから、気になっちゃってあつちへ行けないんじゃないかしら。それに、たまには会いたいな。なんて思ったりもするんですよ」

住職が去った和やかな雰囲気の中で妻の親戚が集まっている。ここにいる人たちは義母の魂がこの世界とは別の場所にいることを信じている。しかし、それが世の中の常識にはなっていないところが、スピリチュアルな世界を語ることの難しさである。

寺の坊主にも分からないことならば、誰に

聞いたらいいのだろう。私にはやりきれない
思いが残った。

第十六章：人間科学学会

【人間科学学会設立の趣旨】

二十一世紀を目前に控え、社会のいたるところで人間性の危機が叫ばれています。その原因は、科学技術の急速な進歩に比べて、人間精神の進歩がともなっていないことにあります。この度開設された人間科学学会は、新しい学際的な観点から総合的に人間の本質を研究していこうというものです。

蔵原のデスクの上に一枚の葉書が置いてあった。その葉書は人間科学学会への招待状である。私はふと手にとって読む。

「人間科学学会はニューサイエンスの立場から、宗教・哲学・心理学から医学・生命科学・工学技術など、現代の最先端の学問によって、人間の心と身体についての未知のメカニズムについて研究するとともに、いまだ学問として未開拓なさまざまな分野についても、学際的な立場から取り組んでいます」

ニューサイエンスが新しい未開拓の分野に挑戦するなら、学問の枠の中で、スピリチ

ユアルな世界が検討されるのだろう。

日曜日、私は妻とともに、人間科学会が開かれる聖訳大学に向かった。最近郊外に引越したこの大学では学生も車で来ることが許されているらしく、立派な駐車場が控えてあった。私たちは、閑散としたその駐車場に車を停めると、日曜日のキャンパスを歩いていった。

受付で蔵原宛の招待葉書を出し、講堂にはいつて行く。四百人を収容できる扇形の怪談教室には、すでに百人足らずの人が集まっていた。学会といってもオープンスクールのようなものだが、参加者の中に文化セミナーに集まってくるような人たちは少なかった。学会の幹事のゼミの学生や眼鏡をかけた尼僧たちの姿もみえる。客席には、私がビデオの仕事であったことのある、ミハエル・ラップマン教授の姿も案た。

定刻の午後一時三十分になると、座長の聖訳大学の吾妻教授が壇上にあがり短く挨拶をし、さっそく講師を説明した。促されて登壇した畑教授は心理学学会の重鎮であり、テレビにもよく出演する。最近の彼は気功普及

協会の理事をつとめていた。

彼は竹取物語や伊勢物語などの古典の名作を壇上にあげ、日本人と気について論じていく。

「気になるとか、気にするとか、気を使った熟語というのは沢山あります。これは日本人と気というものがとても古くから密接に関わってきたからといえるでしょう。ある近松の作品の中を分析したところ、気を使った言葉の中で一番多かったのは、気がかいという言葉で二百七十一ありました。この数は、日本人の無意識の中に如何に気が入り込んでいるかという科学的な分析といつてよいでしょう」

畑教授の講演は私の期待を見事に裏切った。講演が始まってまだ十分と経っていないが、妻は静かに俯き、ちいさな寝息を立てている。講演の内容からいえば、妻の居眠りをする資格は登壇者にはない。

中国の気功はサイエンスの世界でも存在を認められているようだ。だがそれを過度に科学に結びつけると自らの栄誉を失いかねない。老獪な学者を私は軽蔑する。

私はあるラジオ番組を思い出した。その番組では、小学生ラジオ電話相談というもの。ある日の放送では、かおりという名前の女の子から次のような質問があった。

「霊の世界は本当にあるんですか？」

電話を受けた司会の女性アナウンサーは、やさしい声で、

「さあ、どうなんでしょうねえ。ねえ、かおりちゃんはどいっでそういうことを知ったの？」

「あのね、本とか雑誌とかそついつの「分かりました。それではどの先生にお伺いしましょうか？」

女性アナウンサーはこの日の回答者の顔を伺ったのだから。そして、アニメ番組の人気キャラクターを演じることで知られるベテラン声優を指名した。指名された彼女は、人気キャラクターの声色で小学生に語りかける。

「ねえ、かおりちゃんは霊の世界ってあると思う。それともないと思う？」

「わたし、よくわからないの」

「そつ。かおりちゃんは今、小学校の何年生

かな？」

「三年生です」

「そつ。だったら、今は運動とか勉強とかやらなければならぬことがいっぱいあるでしょう」

「はい」

「そつよね。だから、今はそついう学校で習ったことを一生懸命勉強することや、お友達と仲良く活動することが大事だと思うの」

「だから、かおりちゃんも今はそついうことをあんまり考えない方がいいんじゃないかしら」

人気キャラクターの声色を使っていた人気声優は、いつの間にか普段の声に戻っていた。

「かおりちゃん分かった？」

「はい。分かりました」

女の子は、回答者の勢いに押されて、少しこわばった声で応えた。

「ありがとう。そつね、おばさんもよく分らないけど、私は霊の世界っていうのはないと思うわ」

話が澁んだ感じになったので、女性アナウンサーが言葉を発する。

「かおりちゃん。それじゃ、勉強がんばってすると、女の子は、まるで事前にそついう約束ができていたかのようによい、」ありがとうごさいました」と応えた。

声優なんていいかげんなものさ。と私はその時思ったのだが、その思いは次第に変容していた。

声優の彼女があのように応えたのも無理はない。ラジオという公の放送で霊の世界を肯定することはできない。それは、「非科学的なことを喧伝してはならぬ」と放送法でも規定されている。妙なことを言おうものなら、忽ちにマスメディアから追放されてしまう。こどもは大人以上にお化けを怖がったり、幽霊を怖がる。その理由は、こどもたちが科学という知性を身に着けていないからだろうか。それとも、こどもたちが童話や怪談の中の出来事を現実の出来事と錯覚してしまう幼稚さを持っているからだろうか。声優の女性が、「わたしは霊の世界なんてないと思うわ」ときっぱりと言ったのも、質

問者の女の子の悩みを解く効果があるのか
もしれない。ないと言われてしまえば、幽
霊の正体見たり彼おばなという俗諺同様、質
問をしてきた小学生の女の子は気持ちに整
理をつかせることができる。だが、声優の彼
女自身、霊の世界の存在を果たして信じてい
ないのだろうか。

肉親の死や葬儀や供養の経験から、霊の世
界を実感することはよくあるものだ。それは、
私のように霊的な能力を持つ妻を持たなく
ても、同様のはず。否、霊的世界がまったく
ないと認識したら、仏壇にもお墓にも手を合
わせることはできぬ。

もし、声優の彼女が本当に霊の世界がない
と思っているとすると、それは、不思議な
世界に対する恐ろしさから、それがないと自
分に言い聞かせているだけなのかもしれない。
だが、質問をした小学生と素直なりスナ
ーたちは霊の世界は存在しないと思ひ込ん
だに違いない。

休憩時間に入ると、妻はいたたまれなくな
って、車に行つて休んでいるという。十分の
休憩を挟んで、日本学普及会の大町教授の後

援が始まった。彼の演題は、「肉体と精神と
宗教」というものだった。宗教学者である彼
は、世界の聖地を訪れたときの霊的な感動つ
いて語った。だが、それはきわめて印象批評
的なものであり、比較宗教学の範囲を出るも
のではない。人文科学ではあっても、サイエ
ンスというには程遠い。

大町教授の講演が終わると、気功について
のパネルディスカッションがあり、続いて、
会場の一般参加者から質問を募るコーナー
になった。

会場からの最初の質問は、「最後の審判は
本当にあるのですか。科学的にお伺いした
い」というものだった。座長の吾妻教授は回
答者を選ぶように壇上の教授のひとりひと
りに視線を向けていった。大町教授は宗教学
が専門なので、彼が応えることになった。

大町教授は、キリスト教の教義の中で、最
後の審判の位置を説明して、実際に悪かどう
かという質問者の本意をはぐらかした。座長
の吾妻教授は、大町教授の回答に満足してい
るような微笑を浮かべた。

次の質問者は、上品なダブルのスーツを着

た五十代の男性だった。

「私の友人のご息が、睡眠中無呼吸症とい
う病気にかかっています。この病気は、寝て
しまつと呼吸が停止するという難病で、現代
の医学では治療法がありません。しかし、治
療法がないからといって、ただ黙って彼の死
を待つわけにはいかなのが、親の情という
ものです。友人は、息子さんを寝かさないう
うに、毎晩と付き添いました。しかし、それ
も何ヶ月も続くと彼の方がまいってしま
いました。そして、彼は私に電話をしてきて、
『人間は本当に困ったときには神仏に頼る
というが、そういうことをやってみていいん
だろうか』と、相談してきたんです。その辺
りのことについて先生がたのご意見をお伺
いしたいのですが」

「それでは、どの先生にこの質問にお答え頂
きましょうか？」

座長の吾妻教授は、壇上の教授陣にひとり
づつ視線を交えた後で、水野助教授を指名し
た。彼女はパネルディスカッションで気功を
サーモグラフィや心電図を使った分析し
た医科大学の助教授である。

「最初に申し上げますが、私の肩書きは医科大学の助教授ですが、医者ではなく研究者です。したがって、こうしたご相談に乗ることは差し控えたいと存じます。しかし、私の意見として述べさせていただければ、担当のお医者さまがいらっしゃるのですから、そのお医者さまにご相談されるのが一番ではないでしょうか」

質問の男性は、自分の質問の仕方が抽象的で本意が通じなかったのかと思いつけ加えた。

「世の中には、気功に限らず現代科学の範疇を超えたさまざまな治療法があると思います。それは宗教的治療といってもよいと思いますが、そのあたりの是非について、率直なご意見をお伺いしたいと思います」

座長は、誰かがこの質問に答えてくれるのではないかと壇上を見回したが、誰一人として、視線を合わそうとはしない。彼は仕方なく自ら語りはじめた。

「私は聖訳大学の教授であります。同時に禅宗の僧侶でもありますので、加持祈祷をはじめとする密教的手法にも関心があります。

しかし、最近ではそれだけではなくて、カルト教団がオカルト的儀式によって現世利益をもたらすといつて、詐欺まがいの布教活動を行っている。被害総額が何十億円という詐欺事件も起きている。そのような現代にあつて、人間科学学会は、そうした行為を正しいもの間違ったものに峻別するのではなく、そうしたものの本質に迫っていくことであると、私は思っています。ですから、今後はこの学会でも、その辺りのことは研究課題として、諸先生方にも大いに取り組んでいきたいと願っております。それでは、時間がまいりましたので、閉式の言葉を会長にお願いしたいと存じます」

質問者の男性は突然の閉式宣言に悄然とした。会長の閉式の言葉は二言、三言で終わり、壇上の教授たちは、「やれやれ、これで今日の学会も無事に終わった」という安堵の表情を隠さずに退場していった。

映画を観に行くと、映画が終わりエンドマークが出た後に、長々と続くエンディングクレジットを眺めていることがある。そういう場合は、その映画が素晴らしく、すぐに席を

立つとその感動の余韻が逃げてしまふと感ずるからだ。だが、この日の私を捉えて話さなかったものは、全く逆の感情だった。

ホールの片隅で、ラップマン教授が立ち話をしている。

「先生。今日の学会は最悪でした。僕は古典文学や宗教学の講義を聞きに来たんじゃありません。学問が科学的という物の見方に拘らないで、スピリチュアルな世界に挑むのが人間科学学会だと期待していたんですが、ほんとに裏切られました」

ビデオの撮影で会ったことがあるラップマン教授は私を覚えていたようだ。

「僕もわざわざ神戸からやってきたのに、まったくがっかりしたよ」

「そうですか」

「人間科学学会も、もつと活きのいい若手研究者を講師に迎えないと駄目だね」

ラップマン教授は、臨死体験の世界的権威である。彼は末期癌患者のターミナルケアの経験から、臨死体験の研究に手を染めた宗教学者である。最近では、宗教的治癒と名づけて、ハンドヒーリング(手かざし)について研

究を進めている。彼は現在の学問の中で決定的に遅れている分野の旗手であり、その学問の必要性を一番感じている。

「実は、私の妻が霊能者なんです。それで、先生の本も読みましたし、先生に協力したいんです」

「君は有名になりたいって言うこと？」

「いえ。スピリチュアルな世界の重要さを知って、何とか先生の力になりたいと思っただけです。外国人の先生なら、どんな突飛なことを言っても、日本人は相手にしてくれるでしょう。それに、先生の實力からいっても、この日本で新しい価値観を生み出すことは可能でしょう」

「そうですか。君はコナン・ドイルを知っているかな」

「コナン・ドイル？ たしかシャーロック・ホームズの作者ですよ」

「コナン・ドイルはスピリチュアルな世界の研究者としても有名だが、彼は、霊的な出来事を電話のベルだと言ったんです。霊的な出来事ってというのは、最近の言い方であれば、霊障というのかな。そして、ベルの音は重要

ではない。電話の内容が重要なのだと付け加えたんだ」

「では、霊障には意味がないと……」

「コナン・ドイルが生きたのは百年以上も昔のロンドン。それから世界中の研究者がスピリチュアルな世界を証明しようと努力しているが、いまだに実を結んでいないのが現状だよ。たしかに、現代の科学が生み出した最新の電子機器を使っている。でも、百年経っても今日の学会のようにベルの音ばかり研究していても意味はないんだよ」

若者が走ってきて、ラップマン教授にタクシーがやってきたことが告げられた。教授は私に軽く会釈をすると、ホールの前に横づけされた車に乗り込んだ。

キャンパスの並木は赤く色づいていた。私は並木に沿って、キャンパスの中を駐車場への向かった。すると、人気のないバス停に五十歳過ぎの男性がバスを待っている。先ほどの質問者である。

「先ほど質問をされた方ですよ」

私は初対面の彼に声をかけた。

「え、あなたは？」

「いや、単なる一般の出席者です。でも、今日の学会には本当にかっかりさせられました」

「そうですか。私も同感です」

その言葉をきっかけに、男性は学会の権威の前では話しきれなかったことを堰を切ったように話し始めた。

「睡眠中無呼吸症の息子を持つ友人と私は、大学の応用工学の同じ研究室で勉強した間柄なんです。私は卒業後、企業に就職し石油化学工業の世界で新素材の研究開発の仕事をしています。彼は大学に残り、その後、公立の研究機関の主任研究員を長年勤めてきました。学生時代のある時、こんなことがありました。正月返上で卒業論文用の実験を行っていた時のこと、共同実験が失敗に終わればふたりとも卒業できないという瀬戸際でのことです。除夜の鐘を聞いた私が、『実験の成功を祈りに初詣に行こう』と提案したことがありました。私はその時、彼の言った言葉がとてもおかしかったので、鮮明に覚えています。『お前、初詣なんていう非科学的なことを持ち出すんじゃない。もし、初詣が

本当に実験に影響を及ぼすとしてみる、前回の実験と今回の実験の条件が違ってくる。条件を一定にして実験をするのが実験の基本だと、担当教授は口をすっぱくするほど言っているじゃないか。私はその時、彼の言葉にジョークを感じました。しかし、彼は心底そう思っていたのです。彼はその当時からつい最近まで、科学者として唯物論者であることが条件であると思い、自分が唯物論者であることを誇りにして生きてきました。大学を卒業した後、私と彼は別々の道を歩みはじめましたが、私も彼も研究で壁にぶち当たったも、けっして非科学的な神頼みをしないというのが持論だったと思います。でなければ、研究開発では日常茶飯事の実験の失敗を前にして、原因を徹底的に分析し、あたらな推論を立て、新しい成果を生み出すことはできなかったでしょう。彼の娘がキリスト教会で結婚式をあげた時、彼が苦虫をかみしめた表情をしていたのも、あながち花嫁の父親という理由だけではないと、私は思っています。ですから、その彼が神仏に頼ると口にしたとき、私は自分の耳を疑いました。神の存在を

信じない唯物論者の彼が「神仏に頼りたい」と言い出したのです。しかし、考えてみれば、それは彼だけの問題ではない。私の中でも、科学では捉えきれないものの存在が日に日に多くなっているんです」

「そうでしたか」

私は辛うじて、彼の話に応えた。

「そして、今日分かりました。私たちが唯一の拠り所としてきた学問は、私たちの悩みに何も応えてはくれないことを…」

「もしかすると、私の妻には少しばかりの霊能力がありますので、あなたのご友人に何か有効なアドバイスをさしあげることができるともれません。とりあえず、あなたをお送りしましょう。車で妻が待っていますから」

「えっ、でも」

急な申し出に、男性は一瞬とまどった。

その頃、妻は一向にやって来ない私に苛立ち、車の中でパンフレットの閉会時刻を確かめると、会場の方に歩き出した。昼間は暖かだったキャンパスも夕方になると風は思いのほか冷たい。妻はバス停に立つ私を見つけたようだ。

妻は男性に目で会釈をする。

「どうしたの？」

「あのね、この方のお知り合いの息子さんが難病にかかってね。それで悩みに悩んで、今日の学会に来たっていうんだ」

妻は、夕日をバックに経っているその男性を見ると、私の言葉が耳から遠ざかっていくのを感じた。

「なにかご助言できないかなあ。とまっているんだけど…」

妻は、私の言葉を聞かぬまま、親しげに話しはじめる。

「そのお知り合いと息子さんにお会いしないと分からないこともあるけど、いろいろと道しるべになる位のことはお役に立てるかもしれません。よろしかったら、少しお話を聞かせてくださいませんか。ここは寒い、どこかでお茶でも飲みながら」

男性は、妻の言葉に感化されたのか素直にしたがった。

「よろしいんですか。今日はこのために時間をつくったんで、時間はありますから、このままお茶でも一緒にしましょうか」

「純ちゃん、行こう。駅のほうに喫茶店があるから」

妻は、男二人を引き連れて歩き出した。

「何だよ。今、人が説明してたのに、もう話が決まっちゃったのかよ。まあ、いいさ。あの、僕たち、刈谷って言いますが、あの…」

「あ、失礼しました。私は中田と申します」

「じゃあ、中田さん。行きましょつか」

キャンパスの落ち葉を踏みしめながら、三人は駐車場に向かった。

「奥さん。やっぱり、この世の中には科学では説明できないことがあるんでしょつか？」

「そうですね。確かに沢山ありますよね」と、妻は微笑んだ。

「そうですね」

中田は成り行きに驚きながら苦笑した。彼は友人の息子を救えるかもしれぬという思いに引きづられている。それは、一年近く前に、私が霊能者を求めて彷徨ったときと相似形をなしていた。経験したことをもとに彼に何を伝えられ、何が伝えられないのか。私にはその整理がついていない。ならば、私は彼とともに同じ問題に対峙しているに過ぎない。

い。

秋の日はとつぷりと暮れている。陽が落ちると急に冬がやってきたような寒さだ。取り合えず、喫茶店でホットミルクを頼んで身体を温めよう。すべてはそれからのことだ。私は、妻と中田に歩調を合わせながら、キャンパスを後にした。

(完 322枚)

スポンタ中村

spont a0325@mail.l.com

2009.09.18印刷